『海と戦争と魔法使い』

石川零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『海と戦争と魔法使い』

【Ｎコード】

Ｎ１４００Ｑ

【作者名】

石川零

【あらすじ】

海辺で暮らす車椅子の令嬢セアンはある日、砂浜に打ち上げられた男を拾う。記憶をなくしているという正体不明な名無しの彼は……泥棒？　それとも結婚詐欺師かしらね？　偶然の出会いが変えていく二人の人生の行方――　戦争前夜の世界を描く、アンチ・フィクション・ファンタジー？！　２０１０年度ロマン大賞三次選考通過作

一一1

一

1

「あら」

セアンは日常の中に目ざとく異変を見つけた。

「あらやだ。欄干の手すりが、もうこっち側までサビてる。どんどんサビてるわよ、スー。去年の秋に塗り替えたばかりなのにね。というより、また秋なの？」

潮風も心地よいというより肌寒く感じられるようになってきた、と、セアンはショールを掻き合わせる。

「ついこの前に新年を迎えたばかりじゃなかったの？」

「さすがにそれはないですよ、お嬢様。すっとぼけになっちゃ嫌ですよ、スーは賢いお嬢様が好きですよ」

セアンのカップに熱いお茶を入れ替えながら、家政婦のスーが濃くて太い眉をよせて早口に答えた。

「ジミーの便利屋は隣町に越してってしまったんですよ。呼べば来ますでしょうが、町までいって電話してこなくちゃなりません」

ポットを置くと、スーはセアンが眺めやるテラスの端の欄干までちょこちょこと小柄な体を転がしていき、付け根までかがんで、腐食の具合を確かめた。

「潮風ってのは、やっかいですね。あとからあとから追っ付かないですよ」

あとで町までひとっぱしり行ってきますよ、とスー。

「悪いわねえ」

言ったセアンはもうほかのところを眺めて上の空だった。

低い崖の上に建つ家のテラスから見下ろす眼前には、肌色の砂浜

が左右にのびてつづいている。打ち寄せる波と泡。潮騒。海の青色は日ごとに違って飽きないけれど、そんな日々になじんだセアンを海のほうから眺めたら、きっとすぐに飽きられてしまうだろう。
ふとセアンはテーブルへと戻ってきたスー越しに、砂浜に浮かぶ染みのような色を見つけた。
「なにかしら」
車椅子から首を伸ばしたセアンのことを、スーが怪訝そうに窺った。
「どうかなさったんですか？」
「ねえ、スー、あそこ、あそこに何か落ちていないかしら？」
どこ、どこですか？
エプロンのリボンを結び直す癖をしながらスーがまた欄干へ寄っていき、セアンが指さしているほうを覗き込む。
ここから見える範囲の端のほうに、棒切れがうずまったような影が落ちているのだが。
「打ち上げられた流木かしら……」
「うーん、まさかイルカの弱ったのじゃあないでしょうねえ。そんなふうに見えますよ？」
「えっ、イルカ？」
「にしては小さいでしょうかね」
スーはやたらと首をひねって不審がり、
「ちょっくら見てきますよ」
と言った。
「そうしてちょうだい」
ポーチから崖下へ降りる階段へいき、スカートをつまみ上げて砂浜を歩いていくスーとその先の物体をよく見るため、セアンは車椅子を動かした。
両腕で、タイヤをまわす。めったに自分では動かさないから、すぐ目の前の欄干へ近づくだけでもたいそう骨が折れた。
床にうずくまって寝ている犬のポイのしっぽを轢きそうになると、

毛むくじゃらな小さい頭をもたげた。ポイはセアンのほうを見ないで、階段のほうを気にして四つ足で立った。そのまま走っていってしまう。
車椅子の肘かけに頼り、欄干から首を乗り出すように砂浜を見下ろし、黒い影におそるおそる近づいていくスーを見守る。砂の上に点々と薄くかすかなスーの歩き跡がついていた。
スーがあげた素っ頓狂な悲鳴が、潮風に流れて聞こえてきた。
近寄ったと思った黒い影からスーは二、三歩跳び退って、両手を口元へ持っていった。足元で、ポイが黒い影に向かってぎゃんぎゃんと吠え立てながら、落ち着かなく駆け回った。
スーは転げるように走ってポーチの下まで戻ってきた。
「ねえ、どうしたの?!」
「お嬢様ぁ、大変ですよあれは人ですよ!　人が打ち上がってしんでるんです!　おそろしいこと!」
真っ赤になってスーが叫んだ。
セアンは「死んでいるの?」とつぶやいて、もういちど陰のほうを見る。
じっと動かない影。
それが横たわる人だと思って見つめると、今にもむくりと動きそうでどきどきした。
ポイがせわしなく駈けてまだその物体に向かって威嚇の吠え声を上げていた。
「男?　女?　どんな格好?　もう人相も何も水を吸ってぶくぶくだった?」
ひゃあ、とスーはおぞけに震えて、泣き顔になる。
「なんてこと言うですかぁ、お嬢様。いいえ、顔はしっかりしてますよ、若い男じゃないかと思いますねえ、うつ伏せなんで、砂つぶのいっぱい張り付いた横顔しか見えませんでしたが」
「あら、だったら死んでるかどうかなんてまだわからないじゃない」
「死んでますよ、ぴくりとも動きゃしないんですから」

「死んだふりしてる泥棒ってこともあるわよ。なんにせよ、タヌキ寝入りの泥棒にせよ、新手の結婚詐欺師にせよ、水死体にせよ、早く警察を呼ばなくちゃ」
「けいさつ！　そうか、警察ですね。あたし、ひとっぱしり行ってきますよ！」
　セアンは聞いて少しあわてた。
「ちょっと待ってスー。もし死んだふりしてる泥棒だったら、あなたがいないあいだに私、したいようにされてしまうんじゃないかしら？」
　下で見上げるスーがひっ、と顔色を青くする。
「ほんとですよ、お嬢様」
「マクビーじいさんを呼んできて。今朝は果樹園のほうにいるはずだから」
　わかりました、と頷いて、スーが家の横手へと駈けていく。
　――寡黙な庭師のマクビーじいさんは、せかすスーのあとを文句ありげな足取りでやってくると、浜からセアンにちょっと帽子を取って挨拶して通り過ぎる。
「マクビーさん、ちょっと待って」
　マクビーじいさんは声かけたセアンを見上げ、声をかけたけれど言いよどんだセアンの顔をじっと見、そちらからふだん無口な口をひらいた。
「いっしょに見に行きますかね？」
「ええ、おねがいしたいのだけど」
　階段を昇ってきたマクビーじいさんにおんぶしてもらい、セアンは浜辺に降りる。
　まだひっきりなし吠えているポイを追い越して、そばからマクビーじいさんの肩越し目にした物体は、たしかに人間のかたちをしていた。
　髪の短い男。砂にまみれて汚れた顔は、くっつく砂粒よりも蒼白だが、眠っているようにも見えた。

マクビーじいさんがセアンをおぶったままかがんで首に手を触れ、
「熱い。脈がある」
とじいさんは言った。
「やっぱり泥棒ね。それとも結婚詐欺師」
セアンのつぶやきに、「じゃあ警察を呼んできますよ」、スーが張り切る。
「スー、警察には行かなくていいわ」
そうセアンは言った。
「え、なんででしょう？」
セアンはつなぎのような服を着た男の襟についたバッジをじっと見ていた。
「行かなくていいわ。この男、たぶん町の警察ともぐるで、とにかく私をだまして財産を取ろうとしているのよ。警察に届けても、あとあと瀕死のところを助けてもらったお礼とか言って家に上がり込んで、いい気持ちになった私に取り込んで、お近づきになって、身ぐるみ家ごと“いただく”つもりよ。計画的に近づいて、変な噂でも立てればあとは簡単だもの。私には逃げようがないし」
「はあ、それは気取り屋トニーよりもタチが悪いですね」
「本当よね、まったく。……だから、警察に届けたら最後よ？　まず、うちの中に隠しておいて様子を見るのよ。そのうちボロをだすまでね」
マクビーじいさんが何かいいたげに首を後ろに返しかけたが、胡麻塩の顎はけっきょく引き結ばれて動かないままだった。
「スー、あなたにおぶさるわ。マクビーさん、すまないけれど、家の中までこの人間を運んでくださる」
マクビーじいさんは黙ってセアンの言うままに動いた。不機嫌そうに動くのはいつものことだ。
じいさんが頬をはたいても、肩を担いで引きずっても男は目を覚まさなかった。うめき声や吐息すらださない。息はあるから肺を海水で詰まらせているわけではなさそうだった。

「はい、お嬢様、立ち上がりますよっと、よいしょっと」
背中にセアンをのっけて立ち上がったスーが、顔を上げた先にマクビーじいさんの背負った男の後ろ姿を見て、
「はあ、亀？」
と言った。
同じものを覗いたセアンも、目を留める。
海の塩が乾いて浮いた紺色のつなぎの背中に、同系の目立たない色で刺繍された図柄が見える。海草を模した円の中に一匹大きく亀が泳いでいるような図案だった。文字も書かれていたが――。
「あれなんて書いてあるんですかね」
綴りの読めないスーに訊かれて、
「〈亀ほど遅い運送屋〉」
と答えた。
「運送屋さんなんですか」
「偽装よ偽装。事故にあったように見せかけて、哀れぶって財産を――」
「あ、なるほどなるほど」
セアンは図柄をもう一度よく見て、それから海の方へ顔を向けて、凪いだ朝の海の遠く、はっきりと眺められるその水平線までを、くまなく見通した。
波間の一カ所に、きらりと異様に朝日を跳ね返して光る点が、一瞬だけ見えたような気がした。

セアンの住む家には三年前まではもう一人、雑事を引き受ける使用人の少年が住み込んでいたのだが、雇い主の性格に着いていけないと言って自分から出ていってしまった。少年は今は近郊の農場に住み込んでいるという。農場では、海辺の家に住むセアン・スタチェットという少女はごうつくばりの骨皮魔女のように語られている

という噂だ。
その少年が使っていた日当たりの悪い使用人部屋のひとつに、男は運び込まれた。
汚れた身ぐるみを剥がしてベッドに寝かせられた男は、マクビーじいさんが持ってきたじいさんの肌着とモモヒキをじいさんの手で着せられた。マクビーじいさんはひょろりと背があるから、その毛糸のモモヒキは中背の男にはズボンと言ってちょうどよい丈だった。まあ、それでもモモヒキはモモヒキだったけれど。
セアンが、とりあえず清潔さだけは与えられた男の姿を目にしたのはしかし、ずっと間があいたその日の夕のことだ。
家に男を連れ込む指示だけ出すと、いつもの通り図書室に籠ったセアンは、いつもの通りラジオをかけながら好きな読書にふけった。
読書にかけては雑食なセアンだからスーにとっては慣れた光景だったが、その日もこのお手伝いが埃取りにお邪魔したときテーブルの上に散らかっていたのは、字が読めずとも物語ばかりではないとわかる、国の紋章が表紙の図鑑や、あけっぴろげられた中頁に軍艦のような絵がたくさん描かれた物騒そうな本ばかりだった。
十六の少女が好き好んで読むようなものとも思えないし、そうじゃなくてもセアンは毎日ニュースを聞いてはものわかった顔をして、戦争なんてするもんじゃないとスーに言って聞かせるのだったが、セアンの蔵書にそういうものがあるのは、とにかく暇にまかせて浴びるように読んでしまうセアンの毎日ゆえに、世に出ている本は片っ端から取り寄せて読破しては溜め込んでいるからだった。ときどきはこうして、過去に読んでしまった本を引っ張り出したりもする。
そんなふう、この日の読書を終えて、いつもの通り呼び鈴を鳴らして、居間へ戻るためにスーを呼んだセアンだったが、何度鳴らしてもスーが来ないので、聞こえないほど忙しいのかしらと思いながら自分で車輪を動かして廊下に出た。
ふと居間と反対のほうへ首を向けると、わずかに隙間の空いたドアが目に入った。

そこが男を運び入れさせた使用人部屋だと思い出し、セアンはなんとなくその部屋を覗いてみる気になった。
もしもぜんぶ演技で行き倒れたフリをしているなら、人がいない今頃、こっそり起き上がって、セアンたちをどう騙すかの算段をしているかもしれない。
音を立てないように廊下を近付き、そっと上半身を寄せてノブに取り付き、隙間から覗くと、部屋の中は光を絞ったランプひとつの薄明かり。枕におとなしく頭を載せ、氷嚢を額に当てられて眠る男の顔がぼんやり見えた。
「あんれ、お嬢様！」
かかった声にびくと肩を震わせてセアンは振り返り、あわてて「スーおそいわよ」と言った。
「お呼びでしたんですかお嬢様ぁ、それはすいませんでした。まぁそんなところまでご自分でいらっしゃって」
「別にわざわざ心配して見に来たんじゃないのよ。もしもぜんぶ演技で行き倒れたフリをしているなら、人がいない今頃、こっそり起き上がって、私たちをどう騙すかの算段をしているかもしれないでしょ」
あらかじめ考えていた言い訳をすらすらと言った。
「用心が必要ですね」
と、スーはまじめな顔をして頷いた。
「そうよ。今晩からは、寝室にも鍵をかけて寝なくちゃ駄目よ」
「そうしましょうねぇ」
「ところでお夕食はなにかしら」
「ローストチキンスープにしようと思っておりますが。ブラウンの奥さんがこの前のジャムのおかえしにけさシメた鳥の足を二本くれたんで」
「あら、いいじゃない。サギ男（フラウドマン）にはあした目が覚めたらうわずみでも飲ませたらいいわね」
この家では一切合切、セアンの鶴の一言で決まるので、明くる朝

にはスープのうわずみが使用人部屋のベッドの脇に置かれたし、男の仮称もいつの間にかサギ男で定着してしまった。
「サギ男、一晩で熱は下がったのに、目が覚める様子がないですよ。まったく、たくらみが早々にバレているもんだから、起きるに起きられなくなっちゃったんじゃないですか」
「詐欺師にしては肝が小さいわね」
深い眠りはよほどの疲労からのもののようだったが、この家の女たちは簡単には用心を手放さない。
女主人であるセアンの性格である。
「ねえスー、サギ男、目が覚めたら一番になんて言うかしら。賭けをしてみない？」
その夜、夕食を終えて居間でお茶を飲んでいるとき、セアンはそんなことを思いついて言いはじめる。
「はぁ、賭けですか」
ティーコジーをポットに掛け直しながらスーが小首をひねる。
「そうね私は『女ども、金目のものを出せ』ね」
「ひぃ、言われたらどうなさるんです？」
セアンは肩をすくめてとぼける顔をつくる。
「この家にたいした金品を置いているわけじゃないもの」
普段から町の銀行の貸金庫にしっかり隠してあるのである。
女主人セアンの疑り深い性格のためだった。
「まぁ、そうですねぇ。じゃ、あたしは『ここはどこ、私はだれ、雲の上？』に午後のお菓子一切れ賭けさせてもらいますよ」
「あら、私もその台詞に変えようかしら。詐欺師なら言いそうよね」
「駄目ですよ、これはあたしんです」
スーが得意げに胸を張った。
その得意さ加減がちょっとおかしくて笑ったつづき、外から忍び入ってきた隙間風にセアンは身震いをした。
「冷えてきたわね。スー、ストーブを点けて、それからラジオも」
「はいかしこまりました」

やがて六時のニュースを読み上げるアナウンサーの早口が居間に流れた。世界を覆う戦争の状況が、点と点でつなげられていく。耳を傾けるセアンと、編み物するスー。それは毎晩の、お決まりな光景だった。

《ヤーヘル魔法連合軍による南コロニア西海岸への魔法攻撃は、死者五千を越える甚大な被害をもたらしました。この攻撃は戦争法第6条に違反する行為であり、コロニア同盟は国際社会にヤーヘル連合の悪魔性を訴えています。我が国大統領は今夕、南コロニアへの全面的同意を正式に発表しました。南コロニアは今後我が国へ参戦の要請を強めてくると思われ――》

「伯父様もつらい立場ね」

セアンはそっとつぶやいた。

「はい？　なんでございます」とスーに問われて、なんでもないのと首を振った。

「魔法で都市を焼くなんておそろしいわね、スー、想像できる？」

「できません」

スーは神妙に恐ろしげな顔をしてかぶりを振った。

「そうよね。もっとおそろしいのは、北コロニアも参戦したらそんな得体の知れない相手と面と向かって戦わなきゃいけなくなるのよ。もうすでに海のこちら側大陸の半分はそうしているわけだけど」

「なってしまうんでしょうか」

「時間の問題ね」

「あたしの弟たちなんか、まっさき兵隊に取られてしまいますよ」

「だけどスー、あんたの弟たちはヤーヘルについてなんて言ってるんですっけ」

「悪い魔法使いなんか、ひとっ走りやっつけてきてやんぞ、と言ってます。田舎で会えばそんなことばっかり言ってますよ。もっとも、弟たちだけじゃなく町中がそうですが」

セアンは少し考え込んで、

「それもそうね」

だったら仕方がない、と思って言った。
「たしかに魔法使いなんて、うす気味が悪くて近づけたものじゃないものね。やっつけられたらそれにこしたことないんだわ。気を許して好き放題されたら魔法で身ぐるみはがされてしまうかもしれないんだもの」
けっきょくセアンにとっては、自分に損さえ降りかかってこなければ良いのだった。とにかくこの海辺の家さえ巻き込まれなければ戦争なんてどうでもいい。
そういう態度を取っていないとどこまでも付け込んでくる連中が彼女の周りにはたくさんいた。
そろそろ寝る支度をする時刻になってスーが洗い物に立ち、ひとりストーブの窓の火を見つめながらセアンがラジオから聞こえるクラシックをぼうっと聴いているときだった。
廊下に足音の軋む音がして、居間の入口から人影が覗いた。
セアンはちょうど入口のほうを向いて座っていたから、その人影が見るのと同時に目が合った。
「スー！　スーザン！」
人影が固まったのが先か、セアンが叫んだから固まったのか。人影とセアンがじっと対峙するあいだにキッチンからどたどたとスーが駆け込んでくる。
スーの両腕には長銃がしっかと抱えられていた。
スーは銃口を人影に向けて構えた。狙撃手なみの格好であった。
「両手をあげな！」
廊下の暗闇に身体を残していたその影は、スーの命令にあわてた様子で手を掲げ、部屋の明かりの中へ一歩姿を現わそうとして、身体のバランスをふと崩した。
入口の枠に後頭部をぶつけながら貧血を起こしたように座り込んだ。男の姿が明るみになった。
「……サギ男ね？」
セアンがつぶやく。

「サギ男？」
おうむ返して男がセアンのほうを目だけで見た。頭はまだ枠から持ち上がらないらしい。
「このペテン師！　おとなしく有り金ぜんぶ出しな！」
銃口を向けたまま怒鳴るスー。
「スー、あなたがそのせりふを言ってどうするわけ」
冷静にセアンはたしなめた。
「ここは……警察じゃ、ないのか」
怪訝そうに目をすがめて男がひとりごちた。
聞いてスーが興奮した。
「警察ですってぇ、やっぱり警察とグルなんでしたよお嬢様！　ええ、もしくは警察のごやっかいになるしかないようなゴロツキに間違いありませんでしたねえ！」
ますます怪訝そうな眼になる男を見下ろしながら、セアンがスーにうなずく。
「……そうね。ええ、スー。私の推理のお手柄よ」
それで男の注視がセアンに留まった。
首をもたげた男の視線を受け止めて、セアンは昂然と言い放った。
「観念しなさい、サギ男」
かたんと音立てて男は後頭部をまた枠にもたせると、ため息のように息をつく。
「何だかよく分からないけど、どうせ動けない……」
「唇が白いフリしたってムダだよ！」
それはフリでできるものでもないんじゃないの、とセアンは内心で思った。
「スー、とりあえず銃を下ろしておあげ」
「はい、お嬢様」
男はぼんやりそのほうを見て、疲労でそれ以上は気にもできないというように天井を仰いだ。
「お部屋にスープが置いてあったはずよ」

「それはどうもありがとう」
妙にきちんとした例を反射的に返し、男は再びめまいに首を倒した。
「スー、あたためなおして持ってきてあげたら」
「はい、お嬢様」
たったったっ、とスーはサギ男の真横をすり抜けて廊下へ出ていき、スープ皿の乗ったお盆を回収して戻ってきた。
鍋で温めなおしてきてサギ男の前に湯気にけむるお盆を置くと、スーはセアンのかたわらへ帰って、猟銃をまた小わきに抱え直した。
「ああ、本当にどうもありがとう、ご親切に」
やはり男はていねいに身についた自然さで礼を言った。
「ご厚意に甘えます」
実にあっさりと、照れることもなく男は二人の監視の前で食事にありついた。
具も浮かないうわずみに文句の一つも発さず気持ちよく流し込むので、そんなさもしい栄養補給を気の毒にも思ったのかスーが、夕食の焼き残りのコーンブレッドをふたつナプキンに包んで持ってきてやった。
「ごちそうさまでした」
男は出されたものをきれいに平らげ、ナプキンで口を拭うと、姿勢を正すようにして膝を抱えた。
「それで、サギ男さん、人心地ついたなら教えてほしいものだけれど、あなた、どこの組織に雇われたのかしら。それとも単独犯のチンピラかしら」
男は首をかしげこそしなかったが、きょとんとセアンの詰問の顔を見上げて、「はあ」と曖昧に相槌を打った。
「神妙に答えな！」
「ここは、海の音が聞こえますね。浜辺にある家ですか」
男はふと外を気にし、閉じられた雨戸の向こうへ耳を傾けるようにしながら、そう言った。

「だから？」
とセアンは眉をひそめて訊きかえす。
「ぼくは浜に打ち上げられていたりしたんでしょうか。どうも海水の生臭さが身体や頭に染み付いているような気がする。口の中も砂でざらざらしてたんです」
分析するみたいに男は言葉をつらねた。
「ええ、事実としては、あなたは浜に転がっていたわよ。遭難を装おうとしたんでしょうけどね」
「だとすると、服は着けていましたか？　それはどんなものでしたか？　僕がどこの所属の者か、もしくはどこにも所属していないかは、その服を見ればある程度わかるんじゃないでしょうか」
「あなたずいぶんまどろっこしいことを言うわね」
「はあ、つまりぼくは、所持品を奪われてしまっているこの状況では、どうも自分が誰なのか証明できません。つまり……」
「記憶がないの？」
男はセアンの言葉に、少し驚いたようだった。僅かな空白ののち、のろのろと大きく頷いた。
「そうみたいなんです。なんにもわからない」
「名前も？」
「はい」
「身分も？」
「はい」
「犯罪計画も？」
「……はあ、はい」
最後の確認にはまたまた怪訝そうに頷く。
「信じると思う？」
セアンは鼻を鳴らして呆れてみせた。
男は困ったように黙して肩をすくめた。
「お嬢様はあんたの魂胆なんかお見通しだよ！」
しかし男は、びくつきもせず不思議なものを見るようにスーの剣

幕を眺めていた。
「仕方がないわね。まあこれも織り込み済みよ、あくまでしらを切り通してくるでしょうってね。だけど騙されるセアン・スタチェットじゃないってことは肝に銘じて憶えておいて」
自分が何を言われているのか分かっているのかいないのか、男は飄々とセアンの啖呵を聞いて、ちょっと間を取り咀嚼するようにしてから、
「わかりました。憶えておきます」
とはっきり答えた。
空きっ腹から気力を回復すると、意外なほどよく通る声だった。
「あなたのことは、当分警察には突き出さないわ。警察は信用できないの。あなたとグルかもしれないのよ。だから、しばらくはこの家であなたの言動を監視するわ。私に対して何をしようとしていたのか分かるまでは、とにかくね。まったく面倒なことになったものだわ。ねえスー？」
「ほんとにまったく」
鼻の頭に皺をためたスーはセアンに頷いて、男のほうへ顔を向けるとさらにしかめた顔でにらみつけた。
「サギ男、あんたは当分ディビィ坊やの代わりだよ。どんな悪人でも間抜け者でも一応は男手さ、ペンキ塗りくらいはできるだろうからね」
着せられている爺さんじみた下着をつまんでためつすがめつ、ぱたぱたさせたりして珍しいもののように馴染ませながら、男はスーの決めつけを聞いていた。
あとからその命令にうんうんと頷いてみせた男が、ふと廊下に隠すよう浮かべた表情にセアンは気づいていた。
苦笑いのような、かみ殺した笑いのような、そういう顔だったようなのだ。

一一2

2

セアン・スタチェットは肩にたれた金髪の巻き毛も、細面の顔立ちも、人形のようにうつくしく整った少女だったが、口を開くと周囲を困惑させる性格だった。

一言で言えば偏屈だった。

両親が健在であるにもかかわらず、一人、田舎町近くの海辺の家に暮らしていることからも、彼女が世間の同年代の少女たちとは一風代わった考えの持ち主であることはわかる。

生まれつきの下肢障害によって、車椅子の生活を強いられている境遇のほうは、むしろ性格の前ではささいな部類のことだった。

いや、もちろんその境遇が性格形成に一役買ったというのは充分考えられようが、足の不自由な少女全般が変人になるなどという先入観をセアン一人が人に植え付けてしまうとしたら、大きな不幸であり誤解であり迷惑である。

「サギ男はちゃんと働いているの？」

図書室を掃除にきたスーへ思い出したように訊いたセアンの、めくった頁へ首を傾ける仕草は訊いたことへの関心の低さをさも窺わせた。

「朝からやたら柔順に立ち働いとりますよ。なんとかこっちを信用させようって作戦でしょう」

「あなたもわかってきたわねスー。その通りね」

「ただいまはテラスの床の水洗いをさせてます。男の力だとブラシかけの汚れ浮きもずいぶん違うんですよやっぱり」

「だから、うんと疲れさせてね。マクビーさんも寝ちゃったころに、隙を見て襲われたら女二人じゃどうにもならないもの」

「もちろん休みなんか犬のクシャミの間ほどだってやりませんとも。

何しろ男手仕事は唸るほど積もってるんです！」
　それこそ因業婆さんみたいな張り切りかたをして袖まくるスーを、小さく呆れた目で見上げるセアン。ふと、窓の外から聴こえるポイのはしゃいだ吠え声に気をひかれたようにして、彼女は風の入るほうへ首を向けた。窓枠に切り取られた浜側の景色の隅に、テラスの端が少しだけ迫り出して見えている。
　デッキブラシの先がしゅっしゅとリズムのいい音を鳴らしながらちらちらと見えかくれする。はしゃいで進路を邪魔するポイの尻尾と一緒に。
　それは確かにとても、使いものになりそうに慣れた音だった。労働が身についた者のたてる音だ。
　しばらくセアンは頁から目を離したままでいて、テラスを折り返した男がはっきり背中を見せたとき、我に返ったように姿勢を戻した。いま自分がしていた注目を知られやしなかったか気にするように、閲覧机の上を水拭きするスーの顔を盗んで窺う。セアンが持ち上げた本の下をまるく拭きながら、スーは今晩の献立を考える顔で片手の指折り、ぶつぶつ言っていた。
　手に広げた本で顔を隠しながらセアン・スタチェットは安堵のため息。
　彼女は自分が、人に、あるいは何事かに、少しでも関心を持ったと周囲から思われることをとても深く嫌っていた。
　気取られたが最後だと固く信じて疑わない。近づく人間は、みんな財産目当てに決まっている。セアン・スタチェットという少女は頑なにそう考えている。
　玄関ベルがジーと鳴って応対にスーが出て行った。
　どうせろくでもない訪問者だとわかっているセアンは重いため息を、ちっとも読み進まない頁の綴じ目に沈めた。
「ミス・セアン、ニュースを聞いたかい。南コロニアは大変だ。大きな火の玉が落ちて海沿いの街一つが大火事になったんだってね。いよいよ海のこっちにも戦争が近づいてきた！」

落ち着きも気遣いもない足音を響かせて勝手知ったる図書室へ入ってきた青年の来訪こそ、セアンにとっては戦争よりずっと嫌なものだ。
「こんにちは、トニー。今日は早いのね。それでそのお話が私に何の関係があるって言うの？」
勧められてもいない向かいの椅子をひいて腰下ろしたトニー・シンクルーはキザなパッドを入れた肩を皺にしてすくめながら大袈裟に両腕広げる。
「一人で聞くには恐ろしいニュースかと思ってね。この海岸線の続いてる先で起こった大惨事だよ。下手したら、ここだって間違って焼かれちまう可能性はあったんだよ。こわいと思わないかい？　お父上から何か連絡があったかい」
「どうして私のお父様が、何を言ってくるの？」
「君のお父上は正確な情報を知れる立場だもの。僕より先に君の心配を溶かそうとしたっておかしくないだろう？」
「父の情報を聞き出して先物相場にでも生かそうっていうのね、トニー」
セアンの不機嫌な言いようは普通の客なら大いに気分を傷つけられるだろうほどのものだったが、このふてぶてしい青年は右から左聞き流すように鷹揚にほほ笑み、むしろくつろいで椅子に背を凭れた。
「そんなこと思ってもいないよ、ミス・セアン。僕は君のことが本当に心配で」
彼の背後の入り口にすまなそうな顔をしたスーが立ってエプロンを絞っているのへ、セアンはあなたのせいじゃないわよと眉間のしわで伝えながら頷いた。どんなに気に入らなくても来客にお茶ぐらい出さないと、スタチェット家の品格が保てない。
いつも一番最先端の流行をかたどったスーツがトレードマークの赤毛のトニーは、町一番の名士である町長の三男で、大学を出て銀行の支店に勤めはじめたばかり。肩書だけならさぞかし四角く誠実

な人間と想像させるが、実物はちっとも。
前途ある若者にしては俗物な性格が、軽薄な顔付きと言葉の端端にあらわれていて、セアンに毛嫌いされている。
何よりもセアンが嫌っている点は。
「ねえミス・セアン。そうじゃなくてもこんなに物寂しい崖の上で女の二人暮らしは、何かと危ないと思うんだがねえ」
「親切にありがとう。でも、これまで大丈夫だったんだから、これからだって何も起こらないわよ。何しろ私の用心深さのことは、あなただって知っているじゃないの」
「まあねえ」
こんなごきげん伺いが、お呼びじゃない親切であるのを何度もはっきりとさせてきたセアンの態度ににめげず、一週間と空けずに崖の上の家にやってくるトニーは、いわゆる求婚者というやつだった。
はっきりと言葉にして申し込まれたことこそないが、一人住まいのうら若いセアンをたらし込もうという下心を彼が隠せていたこともない。
「だけどねえ、ずっと死ぬまで独りっていうのもね」
頭のてっぺんから車輪の下まで、じろじろと視線をあげおろしてセアンを眺め、含みありげに優しく呟くトニー。
同情の裏に、侮りが見えかくれする。
――可哀想な車椅子のひきこもり少女を、自分以外のだれが相手にするだろう。
内心の声が聞こえる気がするから、セアンはトニーと過ごす時間が大嫌いだった。
『けれど、わかりやすくていいのよ』とも、セアン・スタチェットはスーを相手に吐露したことがある。巧妙な相手にひっかかって財産を取られるよりは、丸見えのトニーのほうが無害だというのだ。
「私にはスーザンがいるもの」
「見かけ腕っ節が強そうでも、スーザンだって女だからさ、用心棒にはなりゃしないよ」

鼻で笑うように返したトニーの口ぶりに、色白の少女は立腹して赤くなる。ガンマン裸足の構えだってできるスーを馬鹿にしないでちょうだいと反論しかけた鼻先で、閲覧机にお茶を出して並べるスーが口をひらいた。
「用心棒なら、もう雇い済みなんですよ。トニーさん」
へえ？　とトニーは虚をつかれたように高い声を上げ、目を丸くした。
「スー！」
声音をひそめてそれ以上言わせないよう仕草するセアンに気づかず、スーが胸を張る。
「人をもう一人雇う甲斐性くらいお嬢様はたくさんおありですからね。さっきから外で音がしてるじゃないですか。男手を一人増やしたんですよ」
だからあんたのお節介も用無しだ、と言いたいようにまくし立ててしまう。
「へえ、マクビー爺さんかと思ったぜ？」首を反らして窓の外を窺うトニー。「身元の保証はあるんだろうねえ？」
「ええもう、出入りの運送屋からの紹介で、働き者をよこしてもらったんですから」
トニーが訝しげにセアンを見返った。唐突な話だし、運送屋の出入りにも心当たりが見つからないといった顔だ。
「年に一度、本を図書館に引き取ってもらうでしょう」
もっともらしく気を取り直してセアンが言い添えると、眉を上げながら納得した。
「そんなことより、トニー、仕事はいいの？」
「仕事なんてほっとくさ、ミス・セアン。君の顔を見ていられる時間のためならさ」
だが、俗物たる気取り屋トニーがみすみす上司から目をつけられるヘマを選ぶはずもなく、抜け出してきた昼休みが終わる前にさっさと彼は職場へと戻っていった。

あとに清めのハタキをかけてスーが、
「往復だけで時間を食うってのに、よっぽど早食いなんでしょうかね」
やや感心気味に言うのへ、
「そんなにスタチェットの家名と財力が魅力なんだわ」
飄々と呟いたセアン・スタチェットは筋金入りの偏屈娘だ。

「だからねサギ男や、あんたはお嬢様に感謝しなけりゃいけないよ。お嬢様のご身分を思えばね、あやしい行き倒れ者なんて、野垂れ死にさせておくのが一番だったんだから。慈悲深いお嬢様の浜辺に落ちてたからこそ、今もあんたはこうしてお天道様が拝めてるんだからね」
日向ぼっこと家事を両立させる彼女の定位置、勝手口の敷居をまたがせた椅子から、ときおり首を突き出しては説教をたれるスーのその手元では、小ぶりのジャガイモが華麗と言える早さで皮を脱いでいく。
「セアンお嬢様の天使のような清いお心にかかっちゃあ、いくらあんたみたいな小悪党だって改心せずにはおれないんだよ。肝に銘じておくんだよ。ぜったい感謝するようになるからね」
はい、はい、と律義にうなずきを挟みながら、男は身体を一定の挙動で動かして鉈をふるった。あてがわれた薪割りの仕事を、最初は知識でとりかかり、だんだんこつを掴んでいくように工夫を加えながらサギ男はこなしていた。すでに小一時間も単調な大振りをくりかえす首筋と二の腕には、秋の真ん中というのにそろそろ汗が流れて光っている。
廃材屋から届いたまましまっておいた一冬分の丸太の山を、すべて割らせてしまうつもりのスーは、今年はマクビーじいさんに頼んで嫌な顔をされずに済むので、説教と裏腹、機嫌がよい。

「案外使いでがあるじゃないの。もうあらかた済みそうだわね。終わったら、お勝手に入ってお茶にしていいよ、サギ男」
「ありがとうございます。……あの、でも」
「何だい？」
「このまま屋内に入るのは失礼じゃないかな、と」
気温と体温との差に湯気が立ちそうになっているサギ男が、肌着をつまんで申し訳なさそうに答える。男の衣服は昨夜のうちにスーが古いシーツや毛布をばらして洗い代えの分とそろえて仕立て上げた。上着として着ていた白い襟なしシャツは横へ脱がれてあったが、それでも朝から続いた労働で頭から汗まみれになった身体を家の中へしかも台所へ持ち込むのはまずいだろう、という遠慮を、顔に表していた。
「そうだね。テラスの横に汲み上げ水栓の柱があるだろ。そこで水浴びしといで。ズボンの替えはあたしが部屋から持ってきといてやるからね。その前に、できた薪はぜんぶ裏手の小屋にしまっとくんだよ。今日の汗かき仕事はこれで終わりだよ」
「わかりました。はい」
サギ男は素直に頭を下げて、地面に散らばった薪を集め、丸太がそれによってまとめられていた荒縄をかけなおし、幾つかの束を抱えた。
小屋とを往復したあと、額の汗を肘で拭いながらテラスのほうへ回った。家の北側横に突き出すよう付いた台所から、西側の海に向くテラスへ行くあいだには、図書室の張り出し窓の前を通る。午後、夕方少し前の西日を受けた窓は丹念に磨かれた硝子がきらきらと透き通って、白いレースのカーテンの刺繍目まではっきりと見えた。わずかに持ち上げられた上げ窓の下に、うつぶせに伏した少女の頭と両肘がのぞいていた。出窓にもたれたまま、ちょうど午睡の時間、微睡んでしまったように。
穏やかな息に上下する肩、そして繊細に流れる金色の髪とを、立ち止まって男は眺めた。じっと見つめて、ふと顔半分をきつく、歪

めた。首折るようにうつむいて足元を睨みつける男の両拳が、筋を浮かせる。
足早にテラス下に突っ立つ鉄パイプの柱までたどり着き、ポンプレバーを押し引きすると、漏斗状になった頭上の口から雑な雨のような水玉が降りつける。水量は大したことがないが、勢いはよかった。浜遊びのあとに砂を落とすための水栓で、いかにも金持ちのセカンドハウスらしい代物が設置されているものだが、錆びついて脚もがたがたと揺れるそれは長いあいだ、本来の優雅な目的では使われていないことがわかる。この崖の上の家自体が、どこかしら、にぎやかに過ごす避暑荘、という存在目的を長らく忘れてしまったような侘しさに包まれているのだ。
息が止まるほど冷たい水を頭から被って、男は不平の表情ひとつ浮かべず、むしろ行者のようにうなだれた。静かに淡々と打たれて汗を流しながら、水粒の雨の中で脱いだ肌着を絞った。
「目障りだわ、サギ男」
遠く、家のほうから突然声が投げられて、サギ男は振り返りかけた。
「いやだ、こっち向かないで」
「すみません」
ぱっと姿勢を戻し、水の外へ伸ばした腕で肌着を絞りきる。
藍綾織り（デニム）の作業ズボンに上半身は裸の状態で、使用人としては例えば夏などはこのくらいも普通だが、雇い主の目に入れていいものでもない。
水が止まると、固く絞ったばかりのごわごわの肌着をひらいて、表と裏が張り付いて皺々のそれを急いでむりやり着ようとした。
「そんなものわざわざ被らなくてもいいわよ」
不機嫌な声のままやめさせるセアン。「さも気の優しい善人ぶって当てつけるのはよしなさい。わかってるのよ、サギ男」
面倒そうな声がくぐもったので、サギ男が振り向いた先、遠く窓辺のセアン・スタチェットはあさってを向くかたちで、腕に頬を埋

めて伏せていた。
「セアンお嬢様は、お幾つですか」
ためらいがちにサギ男が尋ねる。
何よ、というふうにそちらへうつ伏せの首の向きを変え、セアンは顎を手の甲へ乗せた。
「十五よ。もうすぐ六カ月だけれど？」
「あ……、なんだ」
一瞬よぎった、緊張をゆるめるような表情を見逃さなかったよう、セアンの肩が警戒にこわばる。
「どうして『サギ男』なんですか」
やりとりの成立によってか幾分ぎこちなさを外した男がズボンの裾をしぼりながら続けた問いに、――というよりそうして流れはじめた会話にとまどいを見せつつ、セアンの答えはいつもの調子だ。
「しらをきっても無駄なのよ、この結婚詐欺師」
「スーザンさんの話からするとそう思われてるみたいですが、それらしい手掛かりを倒れてるとき僕は持っていたんでしょうか。何かくどい台詞をつぶやいたとか。どこか貧しい町の名前をうわごとしたとか。……それとも――雰囲気？」
「雰囲気よ」
「雰囲気か……」
しごく真面目な顔付きで男は頷いた。
「人に年を訊いておいて、自分の年は思い出せないふりするようなこすい悪人の雰囲気が根っから漂っているわね」
申し訳無さそうに肩をすくめる。
手持ち無沙汰にパイプ棒のがたつき具合をたしかめ、修理の方法をたてるよう検分しはじめる。その片手間にサギ男は懲りもせず喋りかけた。
「十五歳か……学校は行かないんですか？　今日は土曜日なのかな。安息日ではないはずだけど」
スーザンさんが掃除やジャガイモ剥きをして働いているし僕を働

かせていますから、と推理なぞしている。
「学校って、街で寮生活しなくちゃいけない高等学校のことを言っているの？　行けるわけないでしょう。高等学校くらいの勉強なら、家庭教師でとっくにじゅうぶん足りていたし」
サギ男はセアンのほうを見て首をひねった。
「入れてくれないなんてことはないんでしょう？」
「なんですって？」
「車椅子だからって、入学禁止なんてことは、ないですよね。少し周りが移動を手伝えばいいだけだもの。じゃあ、行きたくないから行っていないんですか？　勉強が嫌い？」
言葉を選び選びといった様子のわりに、その遠慮ない話の持ち運ばれかたは、セアン・スタチェットという少女の怒りの琴線を震わせ、白い顔が首から紅潮を帯びはじめる。
「なんですって」
「病弱なわけじゃないって、スーザンさんが」
いよいよセアンの形相は一変した。
「わたしが学校に行っていないからってなんだっていうの？　あなたに関係があるの？」
「関係っていうか、ちょっと不思議だったもので。僕はてっきり、一八、九の大学出のお嬢さんかなと思っていたので、でも十五歳だったら……。すみません、年の話ばかりするべきじゃない」
こんがらがったよう頭を掻いて、サギ男はすまなそうに明後日を向いた。
「家庭教師か……だけどどうせ眼鏡の度のきついオールドミスか、耳に黴の生えた爺さんですよね。こっそり手紙を回す友達もいないんじゃ、ぜんぜんつまらない」
「何なの……」
セアンの口から重く引きずるようなつぶやきが漏れる。怒りで染めた顔、その皮の下でのぼりつめる感情が溶岩のごとくあふれ出る道を探していた。

「とても、もったいないような気がするな」
尾を踏んだ失態を知ってか知らずかサギ男はしゃがみ、パイプ棒の足元の強度をみて集中しだす。
「――何なの、あなた。どういうつもり？　行き倒れの詐欺師が差し出がましく訊きだすようなことじゃないわよ、急に何様のつもりになったの？！」
びっくりしてサギ男が振り返る。
「え……」
「二度と私に話しかけないでっ！」
乱暴に下ろされた窓の硝子が、繊細に割れそうな心のように震えた。

すっかり夜のとばりが下りた家の外から骨太なくしゃみが連続して響く。
「あれあれ可哀想にねえ」
鍋を持ったまま窓の外を振り返るスーが同情をにじませる。鍋の来る食卓にすでにつかされているセアンはじっとした視線をスーにこっそり当て、彼女の同情度をはかった。得意のシチューをお嬢様に熱々で出すことを至上命令とした今は外への関心はおざなりで、クロスのぴりっとしかれたテーブルに琺瑯鍋がほどなくどんと鎮座する。
「まるで水栓にとっつかまっちまったみたいに、お三時もせずにあそこにいるんですよ。薮蛇っていうんですかねえ」
スーは一悶着を知らなかった。サギ男が家の中へいっこう入ってこないのが、激昂したセアンの命令によってだとは思ってもいないのだ。それもおかしくない状況は、セアンがサギ男との会話を閉め出したあと少ししてからはじまっていた。
「もともとボロだったんですからしょうがないですよ。そうでしょ

うねえ、お嬢様」
セアンが拒絶したあとサギ男は勝手口にも戻らなかった。会話中から手をつけていた水栓パイプのがたつきにこだわって、小一時間もあれこれ弄ったのは、あの命令が身の置き所をなくさせたせいなのかもしれない。目撃者であるスーの話によれば、いったん砂に埋まった支台とのネジを外してパイプ棒を抜き差しし、また固定し直してみて、確認のため水を汲み上げたところで突然、パイプ棒が根元から折れてしまったのだという。見た目より潮風による腐食が進んでいたのだろう。サギ男は間欠泉のごとく吹いた冷たい水をふたたび頭から浴びせられることになり、ずぶ濡れた。
壊した責任をかぶるように、その後も後始末だか再修繕の準備だかにのろのろと居残っているらしい。
もうすっかり日が落ちて夕食時間だというのに。
「スー、あなたもすっかり……」
さっきからしきりとサギ男の失態をかばうような言葉を連ねるスーの様子に、セアンは目を細める。
およそスーの内心はわかった。セアンの言い付けの通りの警戒心は保ちつつも、サギ男の早朝からの働き者ぶりは、同じ働き者の家政婦の心証をすこぶる良くしていた。やっと見つかった使える男手だという気持ちもあるだろう。今日一日のスーは家の外仕事については自分のすることがほぼなく、だいぶ楽だったに違いない。
だが、サギ男の身柄のあしたが監視付き保護か放逐か、すべてはセアンの鶴の一声で決まる。ついスーの口からサギ男の側に立った説明が出てくるのは、思いがけなく飛び込んできた下働きを失いたくない本心の表われだ。
「晩ごはんにお入りと言っても、一区切りついたらあずかるのでよけて置いといてくれの一点張りで。あのまま風邪なんか引かれたら面倒ですよ、お嬢様」
「一昨日拾ったときからあのサギ男、熱を出して寝込んでなかった？」

それを慮ることもなく本人の『大丈夫です』という自己申告のまま働かせていたスーに胡乱を感じながらも。
居間の暖炉の燃え爆ぜる小気味よい音の背景にまたもくしゃみ連発が混じれば、セアンとて妥協にかたむくしかなくなる。
「スー、テラスへ出してくれるかしら」
ショールを肩から羽織りながら、頼んだ。
「不愉快なのよ、哀れっぽい気配を聞きながら食事するなんて」
「まったくお嬢様にわざわざ足を運ばせるなんて、男どもの凝り性にも困ったもんだ」
闇にきわだつような潮の香るテラスへ出て、横についた階段のほうへ車椅子を寄せる。
脇に置かれたカンテラの明かりに照らされ、最下段に座るサギ男の背中が見えた。くしゃくしゃと皺のついたまま潮風に乾いた、木綿の肌着いちまい、という寒々しい格好だ。覗くうなじや肘が、冷気に抵抗して赤く色づいている。
前方を向いてじっと座ったままぼうっとしているのだろうか。声をかけるのがためらわれるほど、その背中はみじんと身じろぎしなかった。
「サギ男」
振り向いた男は意外そうにセアンを見上げる。
「話しかけるなとは言ったわ。けれど、家に入るななんて言ってないじゃない」
サギ男はちょっと困ったように首をかしげた。
でも、と言いたげにうろうろと目をそらす。自分の立場ではそう言われたも同然だ、と。……馬鹿がつきそうなそういう真面目さが、早くもスーの心を掴んでしまった彼の特性なのだと、納得半分立腹半分、セアンはわかった。
「家に入るのを禁じられているわけではないでしょう。たとえ入りにくかったとしても、頼めば親切な人間が助けてくれるかもしれないわよ」

サギ男の表情が怪訝そうに変わる。
「それとも」
と、セアンは底意地の悪さが自分の顔に浮かぶのを自覚しながら言った。
「夕ごはんが嫌いなの？」
はっと口をあけて、サギ男が気づいた。
『勉強が嫌い？』
セアンの投げ付ける言葉はさっきの件の意趣返しだ。
（簡単に言わないでよ。人の好意がまるでどこにでもある空気みたいに）
（当たり前に受け取れるわけないじゃない）
「ずうずうしくならないのはとてももったいないような気がするわ」
厳しく眉間を寄せたサギ男の沈黙を置いて、セアンは車椅子を引くよう合図する。心得てスーが階段下へと言い残す。「お勝手にシチューを置いとくからね、すぐに食べてあったまりなさいよ。誰も使ってない水栓なんかは今はいいから。さあさ」
だが、ふと考えてセアンはこう伝えた。
それは、さっきの動かない背中があまりにも、寂しいものに見えたからだ。幽霊みたいに。暗い台所に幽霊が一人こそこそしている隣の部屋で食事するのは、気味が悪い気がしたのだ。
「いいえ、サギ男、居間で一緒に食べなさい。そのほうが電灯だって効率がいいもの。その代わり身なりはちゃんとしてきなさいね。スタチェットの居間には見苦しい格好で来ないでちょうだい」

「スタチェット家は、おじいさまも、おとうさまも、使用人には誇りをもって健康に働いてもらう家訓を大事に守っていたわ。五月祭や収穫祭、冬至祭の楽しい無礼講はスーも知っているでしょう？」
「ええお嬢様ぁ。あたしはちっさいころから収穫祭の宝釣りゲーム

が得意で自慢で！　今でもおぼえてます、奥様手作りの香水を釣り上げたときの嬉しかったことといったら。今でも宝物にしてるんですから！」
「あんなの、もうとっくに揮発しちゃったでしょう。私が見せてもらったときからも十年も経つわよ。……そうだ、今度の冬至祭の贈り物は、その瓶のあたらしい中身ににするわ、スー。もちろんそれだけじゃないから、あとの全部は楽しみにしていてね」
「まあ、お嬢様ぁ」
涙もろく感激してエプロンの裾を持ち上げるスー。
「とにかくスタチェットの家訓なのよ。この海辺の家でだってそれは守られなければならないわ。スタチェット家の名誉を傷つけるわけにはいかないのよ」
たとえ行き倒れのフリした胡散臭い結婚詐欺師であるはずの下男に対してであれ。
「あたしはこんな立派なお嬢様のお世話につかせていただいて本当に幸せ者だ！」
居間の入口の壁が廊下からノックされる。漆喰の壁がアーチにくりぬかれた扉のない入口の陰から、セアンの重ねる言い訳の元凶が、セアンが返事する前にそっと姿を表し、室内へ入ってくる。
食卓からその足取りを見返って、セアンたちはなんとなく口をつぐんだ。
いや、スーのほうは、なんとなくではなかったらしく口をあんぐりと開けて、あらまあ、と言った。
しかしでも、せっかちで仕事に忠実なスーはタッと立ち上がって台所へ一度レンジに戻した鍋を取りにいった。そちらを気にしながら彼は、食卓の前で足をとめる。横顔を下から見上げて、分をわきまえないお節介さが浮かび出たその表情に苛立ちに近い気持ちを覚えながら、セアンは促した。
「座ったら」
熱々の鍋を運ぶのはスーの誇りにしている仕事だ。

彼が手伝う筋合いのことじゃない。台所はスーの城なのだから。
「……」
まだ命令に沿った遠慮をつづけているらしいサギ男は黙ったまま席についた。
「さあさ、待たされたぶん、お嬢様のお腹がすいて今日はたくさんお食べになっていただけるといいんですが」
セアンは少食だ。一日中、座ったままろくに身体を動かさないので、三度三度の食事がたまに苦痛に思うときがあるくらいだから、おかわりにも縁がない。
「一度に二人分に響く嫌みを言うなんて、あなたも腕を上げたわね、スー」
「はあ、なんのことでしょ」
目を真ん丸くすっとぼけるスーから受け取った皿には、角のほろほろとした人参、じゃがいも、小たまねぎがごろん、ごろん、とたっぷり転がるミルク色のスープ。
「それにしてもサギ男、あんたそうやって見ると随分ぴりっとしたね」
手渡され自分の前に着地させた皿から、言われて顔を上げたサギ男が、まばたいてスーとセアンを窺う。
「そう、ですか？」
不精髭の剃られた顔と、二度の水浴びで油が抜けた皿の濃茶色のさらさらした髪――。着ているものも、作業着のデニムから麻のズボンへ、上は小さな貝ボタンのついた白い綿のシャツを着足した、それだけで、サギ男の印象は驚くほど変わっていた。
シャツは襟がなくて簡素なかたちだが、スーの縫製はていねいで、くたびれた感じがぜんぜんない。丸首から伸びる小麦に焼けた健康的な首。その上にある顔が、むしろ洗練されて映りさえすると言ったら、スーを褒め過ぎだろうか。
「ますます疑いは濃くなっていくわね」
持って生まれた目鼻立ちの端正さを、砂と、朦朧と、不精髭を順

々に落として露にしたサギ男は、セアンの警戒を聞いて頬をかすかに震わせた。
「いま、笑ったわね。どういうつもり？」
あわてたようにサギ男は首をふるふると振った。
「まさか。笑ってなんかいない」
電灯の下ではごまかしきれるものではないのに、真面目をつくろって否定した。
「溺れたショックで顔が痙攣するようになったのかもしれない」
「呆れた……」
平然と嘘をつく態度に愕然とさせられた。
調子のいいトニーだって、下心の言いつくろいは上手いにしても、ここまでしれっと切り返してきたことはない。
トニーは町長の息子だから人付き合いが広く、自分で話術を自慢にしているが、のんびりした田舎の社交界はその程度で済むところなのだ。セアンは首都の社交界を知っているから、気取り屋トニーの井の中の自負を気の毒に思いさえする。
ずっと近くにおいているスーはもちろん正直者の鑑みたいな人間だ。
久しく会っていない種類の人間を目にしている気がして、胸の真ん中で警戒を覚える。
注目を受けながら食事にありついたサギ男は、籠の鳥みたいに目の前の二人から観察されながら、臆することも、気にする様子もなくスプーンを口へ運んだ。背筋の伸びた姿勢がきれいで、手元は皿に音を立てない。がっついてパンをむしったりもしない。それでいて結構な早食いだ。さほどの動作を感じさせなかったのに、すぐにシチューは空になった。
嬉しそうにスーがおかわりをよそってやる。
その光景を見てセアンは心細くなった。
――サギ男は都会の詐欺師だ。
セアンは確信していた。一枚も二枚も上手であるかもしれないか

ら、よほど心していないと、こちらの身ぐるみが大変なことになる。
スーという盾はすでに危うい。
「さっき暗いところでぼうっとしていたわね。私の家からあるものないもの騙し取ろうって算段を考えていたのじゃないの？」
スーの警戒心を取り戻すべく、セアンは苛々とスプーンを皿の底につつきつつ険のある声を放った。
「海の音を聴いてたんです」
「聴いてどうするの？　薄汚れた心根を波の音で洗えるとでも言うのかしらね」
「――海は、そんなに都合よく優しいものじゃないです。きっと」
「その海の波に、都合のいい浜へ打ち上げてもらった設定のくせに、よく言うじゃない」
「そうですね」
今度はわかりやすく小さな苦笑を片頬に浮かべ、セアンを向いた。
そのサギ男の目が、暗く虚ろな空洞を抱えていたから思わずはっとする。
「どうしてかなって、考えていたんです。どうして海の中で死ななかったんだろうと。僕は普通なら死んでいておかしくない、生きて打ち上げられたことのほうが不自然で、だからだと思うんです、記憶がないのは」
「まだ言ってるわよスー、記憶のないフリを」
「ほらお嬢様がお怒りだ。往生際が悪いよ、サギ男」
サギ男は苦笑を微笑に力無く変えて、うつむいた。
抜けられない泥沼にはまったような態度を眺めて、セアンはそれ以上追い詰めることをやめにしていた。……けれどチクリと、針刺しておいてやらなければ気がすまない。人のいいスーの心証に滑り止めをかけておくためだ。
「神妙なことを言ってるわりにがつがつしてるのね」
すでに三杯目のシチューを半ばにしているサギ男である。
どんなに虚ろな目をしていても、それでは言葉が真に迫らなかっ

た。
　そして次に顔を上げたときには、もう目の色は何も物語っていない。
「デザートの隙間はとっといておくれよ、サギ男。お嬢様、今日はマクビーじいさんが初生りの林檎を持ってきましたからね、スーザンのおっかあさん直伝のとっときをおつくりしましたから」
　楽しみね、と言ってセアンは、自分の食事に集中した。
　時計を見ていつもの習慣で「ラジオをつけてくれる？」と頼むと、転がるようにスーが動く。夕食後に聞いているはずのニュースが、サギ男のために時間をずらしたせいでもう始まっていた。
『スタチェット経済政務次官は、対魔法戦争による物価高騰の長期化に備えた抑制策を発表しました。ヤーヘル魔法連合軍による南コロニア領パナリア島攻略以来の戦況と合わせて、高騰の推移は予断を許さない状況であり……』
　スタチェット、とサギ男の口が音なくなぞるのをセアンは見逃さない。
　急いでその思い至りを散らそうと、ニュースにあったフレーズの別のところを拾い上げる。
「魔法連合が勝ったら、わたしたちみんな精霊（ダイモーン）の餌になるのよ、スー」
「ひい。お嬢様はともかく、あたしなんてトウが立ってて不味いですよ」
「さては私を生贄にして逃げるつもりね、スー」
「お嬢様はこうおっしゃればいいですよ、がりがりでやせっぽちの子供より、真ん丸い熟女のスーザンをお食べ、ってね」
「自分を貶してまであなたを差し出したくないわよ。どうせなら一緒に海に身を投げて逃げましょうよ、スー。どこかの国の潜水艦が拾ってくれるかもしれないから」
「魔法で動かす潜水艦ですかぁ？　石炭を燃やすのにこきつかわれているダイモーンにけっきょく食べられておしまいだ！」

『南コロニア西岸ペンセルを焼いたヤーヘル軍潜水艦は北コロニア領海に侵入後、北コロニア軍哨戒の追尾を振り切り消息を絶ちました。当該艦は南コロニア軍の迎撃に被弾し、中破相当の損壊を負っていたとみられます。大統領は領海侵犯についてただちにヤーヘル国に抗議のうえ、今月末予定の中立国主導停戦協議に応じない場合、我が国の参戦もありうるとの通告を同時に伝えました』

「本当に困ったことになっているわね。参戦しないわけにもいかないし、参戦したら……」

「北コロニアが手伝っても勝てないんでしょうか、お嬢様……」

血気盛んな弟たちを持つスーが不安そうに言うから、セアンは考え考えながらも首を振る。

「そういうことはないと思うわ、魔法連合も一枚岩ではないというし、コロニア同盟の主な戦力はほとんど南コロニア軍という現状でも今まで戦局はそれなりに均衡を保っていたんだもの」

敵が、制海の橋頭堡を手にいれ、潜水艦からの魔法攻撃で街ひとつを灰燼に帰す非人道的な戦法をぶつけてくるまでは。

「だけど、それなりの犠牲は払うことになってしまうでしょうね……」

伯父はさぞかし胃が痛いだろう、と慮る。

母の年離れた兄が大統領、という環境は、セアン自身にとっても面倒の寄せ集まる付加要素でしかなかったが、こういう場合は伯父そのひとの心労が思いやられて切なかった。

隣国南コロニアがヤーヘル魔法連合に対して始めた戦争に、北コロニアは肩を持ちつつも非参戦の立場を保ってきたが、友好国の軍事優位が崩れようとする情勢においては、重い腰を上げざるを得ないだろう。誰より北コロニアの国民が、同一な文化風土を持つ地続きの南コロニア――反魔法の頭領たる兄弟に加勢せずして魔法使いの餌食になる明日をけして望んでいなかった。日に日に参戦論は活発化し、パナリア島攻略以来爆発的に高まっていた。南コロニアからの要請よりも国民の声が大統領へのかわしきれぬ圧力を生んでい

るのだ。
　ヤーヘルが停戦協議に応じてくれるならいいが、戦争の原因が、南コロニア以下非魔法圏国による一致した魔法排斥政策にある以上、二つに割れた世界はどちらかが勝ちを得るまで戦いを続けていくしかないのだろう。
　未知の力を怖いと思う心は消せず、譲れないものだからだ。
『ペンセルの街では三日が経った今も遺体の収容作業が続いています。火災後の雨により延焼は鎮火しました。我が国は救護船を送り、負傷者の救済を迅速に――』
「あら気分が悪そうね、サギ男。寒いところからストーブのそばに座ってのぼせたんじゃないの？　台所でお水を飲んできたら」
　額に手を当てたサギ男は蒼い顔をしていた。びくと肩を震わせてセアンを見つめ、ぎこちなく気分の悪さを認め、頷く。緩慢に歩いて消えた台所から、命令どおりにコップに水をそそいで飲み干す気配が聞こえてきた。
「お嬢様」
　声をひそめてスーが何か言ってくる。
「お勝手にゃ、包丁がわんさかあるんですが」
　そう聞いて一瞬、セアンは瞳をしばたいた。
「……いいわよ、別に。独りでに死ぬなら、死体はこっそり海にでも流してしまえばいいじゃない。面倒がないわ」
「はぁ？　いえお嬢様、サギ男が死ぬわけないじゃありませんか。悪党に殺られるのはあたしたちですよぉ。大丈夫でしょうかねえ」
　セアンは瞳を今度は見開いた。ついでに口もあいてしまった。陥った虚から気を取り直して小刻みに頷いてみせ、そしてすぐに首振った。勘違いを悟られぬように早口で修正をかけた。
「ああ、ええ、ええ、そうね。いいえ、でも凶器を持ち出すなら隙は朝から今まで幾らでもあったはずよね。結婚詐欺師なら凶器は刃物じゃなく、口先なのだしね。じっさい、喋りだしたらずいぶん口が立つじゃない？」

「はあ、なるほど。気を付けさせてもらいますよ。何を言われてもまともに取らないことにしなけりゃあ」
戒めを守ってスーは、しばらくしてサギ男が居間に戻ってきたとき、「きれいに片付いた台所ですね」とつぶやくのも聞こえない振りしていた。そのサギ男の手にあるものにセアンは眉を上げる。
「すみません。ついでに持ってきました、つい……」
セアンにスーの領域への手出しを禁じられたさっきの今で、余計なお節介を働くサギ男が運んだデザートの皿が食卓の中央に安置されると、得意そうな料理人の語りがはじまる。
「七つ子のタルトでございますよ」
キツネ色に焼き色のついたフィリングに、スライスした林檎が渦を描いて埋まっていて、赤い皮目がきれいな縞模様を見せる。シナモンの香りたつ甘い焼き菓子。
「昔々、あるところの村に、秋生まれのかわいい七つ子が住んでいました。おっかさんはお誕生日に好きな果物でタルトをつくったげようと約束してたのですが、いざお誕生日がきてみると、七つ子はてんでばらばらなことを言ったので、けっきょく林檎のタルトをつくりました。七つ子は七人とも林檎がきらいでした。真っ赤なまあるいほっぺが林檎に似ていたからです。ぶーぶー文句を言いました。でも大丈夫、お母さんは七つ子のほっぺをちぎってタルトにしたのでしたから」
切り分けられた一切れを一匙口に入れようとしていたサギ男が、聞いた途端、うっと呻いてなんとも言えない目を跳ね上げる。
「微妙だな……」
「うちのタルトは果樹園に一昨年植えた林檎の木に初めて生った記念の初物よ、ほっぺじゃないわ」
だけど、とセアンも気持ちの上では同意して同じ表情になっていた。
「そういうふうに伝わってるデントウのお菓子なんで」
あくまで受け継いだ味の年季について自慢そうに胸を張るスー。

「ひねくれたお伽話を考えるご先祖様がいたのね」
「いえ、実話なんですよ」
匙を運び直していたサギ男がふたたび喉を詰まらせた。
「そんな馬鹿な。猟奇殺人じゃないか」
「まだコロニア大陸に国がなかったころの話ですからね」
それを聞いても何の理由になるのかわからないという顔でサギ男は首をひねった。
「ああ、ええ……そうね、入植者が苦労していたころの、人減らしの話よ」
目を瞠ったサギ男をちらと見て、ケーキ皿に視線を落とし、セアンはたぶんそう、と頷いた。
神の教えに背く精霊契約という魔法を厭い、旧大陸から逃れてきた開拓者たち。それがセアンたちの先祖だ。
「慣れない新大陸で入植者は初めのころ飢えに苦しんだ。痩せた土地に緑を根付かせるためには長い年月と技術開発の努力がいったわ。そういう歴史の中でおきた残酷な不幸を忘れないためのお話なのだと思うわ」
同じ神を戴きながら魔の誘惑に堕ちた者らを、邪悪と断じ、純教徒と名乗った彼ら。
神の意志に忠実なることを第一として戒律を重視した彼らなのに、魔法への反発が彼らを貧しさへ追いやり、残酷な子殺しという悲劇さえ多発させたのだとしたら、本末転倒だ。
けれど、そういう悲劇はたしかに歴史の事実だった。
恥部のため、あまり公に語られることはないが。
「そんなに驚くようなことじゃないわ。土地土地には似たような苦労話は残っているはずよ」
初めて聞いたように驚き、神妙に考え込むそぶりを見せているサギ男を、そうセアンは牽制してあしらってやった。
「ほんとうに白々しいわね、サギ男」
「じっちゃんばっちゃんの話さえ憶えてられないんなら、言葉をし

ゃべれるのはおかしいよ。ああ、あんたはほんとに、わるい男なんだねえ」
裏切られた悲しさに、タルトに布巾の蓋を被せておかわりなしのおしまいにしてしまうスー。
馴染んでいた食卓の空気が、不利に塗り変わったのを眺めるままに察し、自分はいったい何をどこで間違えたのか、わからないという困惑の顔で、サギ男が少し口をあけた。
名残惜しそうに布巾蓋を見つめ、まばたく。
「調子に乗ってぼろを出すようじゃ、二流もいいとこ。こっちが不安になるじゃないの」
声の調子に感ずるものがあったのか、サギ男はもの問うような顔をセアンへ向けた。
セアンは無視した。紅茶をすすって、黙殺した。
スタチェット、とまたサギ男の口が音なくなぞるのが目端に見えた。
「厄介なものを抱え込んだわ」
聞こえよがしに溜息を沈める紅茶に、浮かんだ意地悪い少女の顔つきとセアンは向き合う。
「すみません」
人のいない食卓の片方へ首を背けるようにしてサギ男が言った。
「ありがとう」
そっと足された言葉の意味を、セアンは深く考えまいとした。

たった二百年前まで、精霊はこの世に生きていなかった。いや、精霊は人の生まれくるずっと前から大地に宿り、そこにあった。それは巨大なエネルギーとして地中に埋まり、あらゆる物質と重なり合って、一つのかたまりとして存在していた。人の目に見えるものではなかったし、音も声もたてなかった。

二百年前、大陸三大王国の一つヤーヘルの王太子レミアックは、ひとこと大地にこう話しかけたという。
――起きよ、目覚めるがよい、我らが仲間である英知の塊よ
彼が終生を捧げた精霊研究のひとつめの成果として編み出した、精霊との会話法によって、人は精霊とかかわる術を得た。
そうして、この星が生まれてより初めて精霊は意識を持ったのだ。

ものの本には大抵そう書いてある。
セアンは読み飽きた文章の載った分厚い歴史書の一頁を右へ左へぴらぴらとめくりもてあそびながら、宙を眺めた。
まともな本でも大抵そうとしか書かれていない。つまらない本だと精霊に対して否定的な形容、修辞だらけの読み取りづらい主観作文で埋められ、そこから情報だけを抜き出したらほんのちょっとということになる。まともではない本なら情報は皆無で、根も葉も無いのだろう妄想だけが悪意に満ちて迸る。
大海のこちら側では、魔法はタブーだ。魔法史の研究者がいないのだから、魔法について客観的に書かれた学問的な本など望むべくもない。
だからレミアック王の研究がどんなものかも、言葉を交わす前に精霊の存在をどう感知しえ、研究が拓かれたのかも、わからない。
魔法圏の情報ならばそう不自由でもない。旧大陸の歴史や、現在情勢、人々の暮らしぶりなどは、行って帰ってきた者の見聞録などに詳しい。大海のあちらとこちらは、ずっと交流がなかったわけではない。少なくとも戦争が始まる少し前までは、人の行き来は止められていなかった。新大陸のどの国も国内で魔法を使うことを禁じていたから、魔法は海の向こうのものであり続けたけれど。
魔法から逃れ、魔法を締め出して新しい国をつくった開拓者たちは、魔法の力に負けまいとして科学の発展に力を注いだ。
それは生存をかけた努力だった。いつ魔法圏の団結によって捻り

つぶされるかわからない時間を耐えて、忍んで、達成した発展は、魔法圏の繁栄と見かけ上の差がないほどまでに今や成った。

その結果が、この戦争だ。

セアンは閲覧机からすぐ後ろの棚へ最小限に車輪を動かして向くと、頭より高い段の背表紙の並びへ目をこらした。見定めてもう少し車椅子を寄せて横付けにし、腕を伸ばす。指先がやっと本の背の下のほうに届く。底を押し上げて抜こうと、ない隙間をつつくがなかなかもどかしい。もうすこし緩めに本を入れないと、といつも思うが、本はいつも、処分しても処分しても飽和状態だからどうしても片付け屋のスーが張り切って詰め込んでしまうし、スーはいつでもセアンの手足になってくれるつもりなのだ。

じっさい、天井近くまでを占める本棚の上のほうなんて、梯子を使わなければどうせ管理できないのだからスー頼みはしょうがないのだが。

親指の爪先で、爪の剥がれそうな思いをしながらようやくひっかけて、わずかに本が浮いた。ねらう個所が見えないから手探りのまま、指を差し込んで持ち上げて、それでも両側の本に迫られてなかなか動かないけれど、あとちょっと……傾くまで……

頭上に影がさしてセアンを覆い、指をかけていた本がふと軽くなった。

どころか宙に浮いて去ってしまった。

「どうぞ」

振り向いたセアンの鼻先に差し出されたその本。

差し出しているサギ男。

「なんてことするの」

声音の色が寒いのが自分でもわかった。

思いもよらず睨みつけられてたじろぐサギ男の反応に、腹の中で腸が縮れるくらい煮込まれていく感覚を覚える。ひったくって本を手にした。

端正な眉間にしわをよせ、怒られた自分の手を見るサギ男。

「あなた、最低ね」
「ちょうど通りかかって、廊下から見えたので。……え？」
「最低ねって言ったのよ。わたしが何してるかわからなかったの？」
「この本を取りづらそうにしてたので、だから――」
「ご親切に高いところの本がひょいと取れる健常な身体の能力を惜し気もなく恵んでくださったの、そう。それはどうも」
あと少しでセアンの努力は報われるところだったのだ。ずれて取りやすくなったその丁度いいところを、サギ男は歩ける優位をいいことに簡単にかっさらっていっただけだ。
「なんなの、まだお礼が足りないかしら、ありがとう、だけれど退いてもらいたいの、机まで戻るから、いいえ一人で動かせるわ！」
横に立ったまま複雑そうに言葉をなくしているサギ男に文句をつけた唇も乾かぬうちに、お節介な手がハンドルへ伸びようとしたから。
「すみません。ええと、そんな方針だと知らなくて。スーザンさんはよく移動を手伝ってるみたいだから。……なるほど、筋力を落としたくないんですね」
「そういう意味だと思う？」
サギ男は困った顔で首をひねった。
もののはずみのように、その視線がセアンの膝に置かれた本に落ちる。
「――『中立国法』？」
話をわざとそらしたのではなく、気をそらされたように。
とっさに両手のひらで表紙を隠した。自分らしくない失態だと気づいた時には遅い。そのあわてた動作で、本のタイトルが相手に見られたくないものであると知られてしまうだろう。
「ずいぶん難しい本を」
「仕事はどうしたの、サギ男。朝から何やら張り切っていたみたいなのに、家の中なんてぶらぶらして、ろくでもないわね」
「ああ、道具を、スーザンさんに教えられて廊下の用具置きに取り

に来たんです」
振り返って廊下を左右往復するみたいに指さす。
「だったらさっさと行って頂戴。目障りだって昨日も言ったわ」
「今日は身なりはちゃんと、今のところ……」
言いかけて言葉の多さに自制が働いたらしく、碧い眼に照れた笑いを一瞬浮かべてサギ男は早々と図書室を退散していった。
色を日々変える海の、一番あざやかなときの碧色だった。
海に揉まれて波に塗り替えられでもしたみたいに。
あの青年、サギ男は、そんな冗談も平然と丸呑みに受け入れてしまいそうだ。素直さを目立たせているのに、どこか投げやりなところがある。いっさいこの家の女たち、つまりセアンの言いなりになって留め置かれているのも。
『戦時中立国法』
手元の箔押しタイトルをなぞり、セアンはセアンで、困った息をつく。
知りたいこと、知るべきことが何であるかも見当がつかないまま、頁を繰っていくのはわりと苦行だ。
しばらくすると窓の外から鉄を切るノコギリの音がかん高く耳障りに聞こえてきた。
集中力がさらに散った。
セアンはきつめに唇を曲げて窓を見た。
サギ男が朝からとりかかったのは昨日壊した水栓パイプの修理だ。修理というよりも、一から新しく設置し直すことを宣言して、勝手に作業を始めた。セアンが命じたわけではない。
取り置きのあった資材を納屋から運び、鉄パイプを切り、次は溶接の音が響き出すのか。場所が近いから騒音被害が直撃している。ふだんなら、スーが図書室でどたばたと掃除をかけていてもまったく気にならないセアンだったが。
いちど途切れた向上心は――本を横取りされたときからそれは折れた――しばらくつながらない。

「スー。スー！」
呼ばわったスーは台所から返事をよこし、ほどなくころころと駆けつけた。
「お便所ですかお嬢様」
「いいえ。少し頭に血がのぼったからテラスで涼んで休むわ」
「あらあら、そりゃ大変でございますよ。お医者を呼びますか？！」
「いいえ、そういうんじゃないのよ」
「根をおつめになるからぁ」
心配そうにされて、セアンは顔をしかめた。逆上しただけだとは言いたくない。さっきのことはぜんぶ、いやな出来事だった。眼の色に気を取られたところまで含めて、ぜんぶ。
「今日はお嬢様、朝から曇りが晴れませんねえ」
一瞬自分の機嫌のことかと思い、海と向き合って被害妄想を自覚した。灰色の空が水平線をあいまいにして、海から生気をなくさせていた。こういう日の夜は窓硝子が結露して曇る。
「だけど雨までは行きそうもないわね」
ということは騒音が一日続くのだ。
一昨昨日まで滞りなく流れ過ぎていたセアンの心穏やかな日々はどこへ隠れてしまったのだろう？
「スー、昨夜どこかで叫び声がしなかった」
「はあ、叫び声でございますか？　そんなおっそろしいものは聞きませんでしたね。まさか人間のじゃないでしょうね。これ以上の物騒な面倒ごとはあたしゃごめんですよぉ。ウミネコですかね？」
「かしらねえ」
車椅子と一緒に外へ出てうろうろと歩き始めたポイを、セアンの話し相手に残し、スーは午前中の仕事を片しに戻る。二人でサギ男への嫌みでも聞こえよがし言い合って暇をつぶそうと思っていたのに。セアンは上手くいかない今日に苛立ちを増させていく。すると、テラスの上から聞かせるつもりだったのが逆に、テラスの下から作業の騒音のまにまに、低くつぶやく声がした。

「……いいんだ……手伝わなくていい。自分でやる……」
低い、かすれたつぶやきに耳をすませて、セアンは思わず首を伸ばした。誰に話しかけているのだろう？
「要らない……じっとしてろ、手を出さないでいい。一つ一つやるから……一つ一つ、自分の手で」
返る答えは聞こえてこないのに、そこにいる誰かをおさえつけておくように厳しく声音は響いた。厳しくて、暗かった。内にこもる決意を秘めていた。
セアンは車椅子を転がして、テラスのへりから身を乗り出した。階段の横で、火花を散らして直線やL字のパイプとパイプを溶接しているサギ男の背中は、独りだ。
手元は果樹園のマクビーじいさんから借りてきたのだろう防虫処理用のバーナーを火力を最大にして扱うサギ男の、防護眼鏡をつけた横顔が、オレンジに輝き、明滅するようだった。
「くそっ、曲がった！」
悪態をすぐ近くに聞いてしまい、慣れないセアンは肩を震わせる。
「いや、俺がやる」
また独り言。怒ったように。
そしてふたたび噴水みたいな火花があがり、眼鏡を打たれるオレンジ色の横顔に、喜怒哀楽を消した集中の意志が浮かぶ。
「……ここは非魔法圏なんだ」

午後に砂の上に横たわっていたものは、ぐねぐねと各接着部の曲がってまるで灰色のウミヘビがひからびているような水栓パイプだ。
バランスも溶接技術も悪くて足りず、とても設置できた代物ではない失敗作。
「これが終わったら、ここを出て行こうと思います」
紅茶のマグを両手に包みながら、階段下を首で示してサギ男。
「もちろん嫌みだけれど、あら嬉しいわね」

見通しも立たない期限をぶちあげるなんて、よくもまあ、だ。
「スーザンさんの言われた修繕箇所も平行してし終えます、それまでに」
「出ていってどうするの？　得意になって言い触らすのかしら、崖の家の娘はとんだ尻軽で、俺の甘い言葉ですぐなびいたよ。とか？
そんな噂が立ったら嘘を真にしてしまわなければ女のほうは体裁がつかないものね。あら簡単に財産獲得」
「ずっと座ってるのに尻軽はないな」
それが閉じたパラソルの下にちょうど出てきておやつを置いたスーの耳に入り、彼女は唖然とサギ男の口を見た。冗談には良い悪いがある、と今にもカンカンに噴火しそう。
「待って、スー、そこは流すわ。出ていくという自体が聞き捨てならない。だからいま問ただしている最中なのよ」
「僕がここにいることで、スタチェットさんに迷惑がかかるんじゃないかと思う。とにかく僕には、僕が結婚詐欺師だという記憶はない。過去を失う前は悪人だったかもしれないけど、今の僕は空っぽだ。少なくとも、この家にこれから何か酷いことをしようという予定のないことだけは誓えるし、誓いたい。神かけて」
碧い眼が真摯にセアンを見ていた。
「だったら書き置きでもしてそっと消えればいいのよ」
「言っておきたかった。心配しないように」
「悪人でございますなんて言う悪人はいないし、神に背くのが悪人というものなのだから、あなたが何を誓ったってしょうがないの。わかる？」
サギ男はしかし首を振る。
目を閉じた。
「神は何度でもチャンスを与えてくださる。神は最初から悪人と善人をわけてしまっていたりはしない。今この僕は、何者でもない。たとえ過去、人からは許されようのない悪人であったとしても、償いのために生きる自由は残される。そうでなければ人間にこれほど

長い一生の時間は必要ない」
　出て行ってどうするつもり。言いかけて、思い直す。セアンには関係ない。浜辺で拾った青年の行く末への義理もない。迷惑さえかけられないならば。セアンを放っておいてくれるのならば。
「いいわ。勝手にすればいいわ」
　セアンは人への疑いと、心穏やかな日々を秤にかけた。騒々しい厄介の種にはとっとと出ていってもらって、平穏な日々を取り戻したい、と切に願う心を見つけた。
「どこへ行ってもスタチェットの名前は出さないでほしいわ」
　サギ男はしっかりと頷いてセアンを見つめた。
「約束します」
　切り分けられたおやつのゼリーはサギ男のぶんが極端にうすっぺらい。さっきの悪い冗談を腹に据えかねたスーによる懲罰だ。
「猫の涙のゼリーね、スー」
　エメラルド色の色素で色付けた透明なゼリーの底には果樹園で採れた大粒種の白ブドウがひしめき沈んでいる。涼しげな見た目が銀食器に合うこのゼリーはスタチェット家に伝わる菓子だ。
「とある路地裏住まいの猫が」
　といかにもいわくありげにスーが始める。
「街の家々の屋根から屋根を渡り歩いているときのこと、ある窓辺の猫に恋をしましたとさ」
「置物の猫だったんだ。窓に飛びついたら落っこちて割れてしまったってオチだろ」
　シロップのしみたブドウ粒をフォークでつつきながらサギ男がしたりと口走った。思わず顔を見合わせてスーとセアンが目を糸のごとく細める。不穏な雰囲気に挟まれておもてを上げ、女二人のそっくりに白けきった表情を見いだしてサギ男はびっくりし、次第に上体を椅子の背へ後退させた。
「え――」
　無言がつきささる痛みで涙目に近くなるサギ男の顔。

「このお話をするとねえ、必ず殿方が先走ってオチを言い当てるんだ。そんであたしたち女どもに呆れられ、白けられて、涙目になりながらデザートを食べる羽目になるってジンクスがあることから、猫の涙のゼリーと名前がついたのでしたとさ」
「ところが気取り屋トニーだけは首都の皮肉屋たちのセンスとは違ったわね。『きっと君みたいに金色の美しい毛並みをした美人な猫だったんだね』ときたものよ。あの人の言う毛並みって、家柄のことでしょうね」
「素直に心から褒めたのかもしれないじゃないか」
ぞんがい飄々とした立ち直りを見せてゼリーを平らげるサギ男がぼそりと口を挟む。
「一方、都会の詐欺師はこうよ。他人をダシに自分を良い人間に見せようとするの」
「どうしてそんなに人を信用しない……？」
疑問を深めてサギ男の眼がセアンへ向き、首をかしげる。
――だがすぐ、首も言葉もセアンの激昂を用心したように、皿へ向き直り、遠回りに変えられた。
「セアンさんみたいに頭の働く人を騙せる人間も、そうはいないと思うけどな」
「こういう私だから利用したがる人間が、中央にはいるのよ」
セアンは小さいころから口が立った。賢しく大人の口まねをして、政治家のスピーチなど一回聞くと丸ごとおぼえてしまうから周りにおもしろがられた。父はセアンの賢さを誇りに思って、家族同伴の公の場には必ず連れて出た。人の壁に低いところで囲まれても物怖じしない社交性を娘に自然と獲得させたのだ。セアンの周りには輪ができて、闊達な弁舌に惹かれた人たちの中心でセアンはいい気になって、望まれる役割を実演していった。上流階級の婦人や娘たちにとって慈善事業への貢献は当たり前の義務であり、恵まれた者であることを証明するステイタスだ。セアンの経験とスピーチ力はこの上ないシンボルとしてひっぱりだこになった。父は娘のために、

“下肢障害の子供たちのためのセアン・スタチェット基金”なるものをわざわざ立ち上げセアンを名誉主管とした。それが小学校卒業の記念で、高校準備校卒業の記念にもう一つ基金は増えた。“貧困世帯への車椅子普及のためのセアン・スタチェット基金”。一つ目のころは自信に満ちて壇上に上がったが、二つ目のころにセアンの気持ちは前を向けなくなっていた。日々に覚えるようになった疑問が膨れて、道を見失っていた。

必要とされる場に毎日を忙しく費やしていたセアンだが、学校ではいつも独りだった。友達はみなセアンに優しかった。代わる代わる車椅子を押してくれたし、家で勉強会だってした。けれど、ふとした瞬間に、気がつくとセアンは教室で独りだった。よく晴れた日の休み時間みんな校庭へ駆け出していってしまったとき。廊下の壁にもたれて女の子たちが噂話しているとき。彼女たちが身体を使ってふざけたりじゃれあったりしているとき。

自分は手足の動いて自由に歩ける彼女たちとは違うのだ、とても違うものなのだ、と感じた。

スタチェット家で基金の催しがあった夜、引き取った寝室で宿題のあと寝る時間をずらし遅くまで慈善パーティのスピーチ原稿をいくつも書いていて、五本目で突然前触れもなく涙が止まらなくなったことがある。級友たちは今日は街で評判のアイスクリーム店に寄って公園の湖のボートに乗って遊んで帰るだとか話していた。家の車に送迎されるセアンにはできない楽しみだ。遊び疲れた彼女たちがぐっすり眠っている時間、自分は婦人たちの香水に悪酔いしてうすら痛む頭から、お金を寄せ集める言葉をひねり出して唸っている。

――

今ならわかる。娘にたいそうな肩書きと役割を与えてくれた父は、人より欠けたるところがあるセアンに一つでも確かな誇りをもたせたかったのだろう。

人と違う自分を嘆いたり、引け目を感じることのないように、そういう意識の芽生える前に、拠って立てる武器となる長所を伸ばし

てくれた。
いうなれば敷いてもらった道だったのだ。それをセアンはずっと、天の定めかなにかと思い込んでいた。
望まれるまま、一生懸命にやった。
でも、あの夜に思ったのだ。自分が書いているスピーチの中に、どれだけ本当のことがあるのだろう、と。セアンのスピーチ力や文才は、物心つかない初めから口まねだった。経験や資料を織り込んで話すようになっても、口まねしていた型は消えない。チャプターのない小説はないように。
人間の日々には区切りなどないのに。
目的のある言葉はつくりものだ。お手洗の帰りがけ、階段の踊り場でふいに立ち止まって、思い出したようにはじまる起伏のないおしゃべりが本物の言葉だ。自分はそのように歩けなくてつまらない、車椅子があったって入って行けない場所はある――これがセアンの本当の言葉だった。そうスピーチしたら、どうなるだろう。きっとシンボルの役目はお払い箱だ。
あの場所では車椅子つきのセアンが求められている。車椅子を降りてボートに乗りたければ誰かの手を借りなければならない。他愛のないおしゃべりとは手を患わせてまでするようなものだろうか。そうまでして、そこへ入っていきたくない。そこでは求められてもいない。
考えはじめると以前のように堂々とスピーチできなくなった。さらに進学への不安が重なった。寄宿生活をしなくてすむ高校は首都にはなくて、今まで家政婦にしてもらっていたこともすべて友達に助けてもらわなければならないと思うと自尊心が疼いた。
セアンは進学をやめにした。
ついでに一切の慈善活動からも遠のいて、逃げるようにスタチェット家の所有する海辺の家に引きこもった。
いつのまに五年の時が過ぎた。遥か遠く海辺から、首都でのレセプションまみれの生活を思い返してみると、あんまりな子供時代だ

ったのではないかと憤りすらも覚える。今はのんびり静かであればあるほど。
「利用するだけされていたのよ」
車輪をつっこんでいるかぎり、あらゆる恵まれない人たちの看板を掲げた人たちがセアン・スタチェットの名前に群がってきた。
真面目に尽くしていたセアンは、馬鹿馬鹿しく楽しむべき子供時代を、楽しまず失ってしまったように思う。
「私の足の不自由さのせいだし、私が継ぐお金のせいよ」
吐き捨てたセアンをサギ男は取り残されたように見ている。彼がスーを仰ぐと、お嬢様自慢を忘れない家政婦の補足的な合いの手が入る。
「お嬢様は、チャリティの女王とお呼ばれになってたんですよ」
つながった話にサギ男の目が納得を浮かべた。けれど次にはちょっとのあいだ考える顔をして、そして首を横に振った。口元は言葉を含んでいたが、そちらを睨むセアンの顔色を見ながらサギ男は何も言わなかった。
「言いたいことがあるなら言いなさいよ。気持ちが悪いわ」
その瞬間、とても強い光をはらんだ碧い眼がセアンを見つめて、言った。
「利用されても、少しでも救われる人がいるならそれでいいんじゃないかな」
それだけ言って急に目を伏せたサギ男の向かいで、セアンは肩をすくめて、言葉を返す。
「そうね、それは普遍の理屈だと思うわ。立派な理由よ。何よ怒ると思ったの？　間違っていないわよ。そういう志をもてる人は折れないでしょうね。でも」
目の中の光を揺らしてもてあますようなサギ男の苦しげな顔付きに気をとられながら、セアンは口にしたことのなかった思いを言葉にしていた。
「でもあのころ、それは私の本当じゃなかった。だって私は、飢え

た子供も治らない病気で死にかけた子供も、この目で見たことはなかったんだもの」

一一3

3

身体に伝わる柔らかな感触。ふわふわと車輪が沈む絨毯の敷かれたホール。ざわめく空間。父の背中のあとを連れられていった人の列の端から、ホールの前のほうを見上げると、開拓者とそれを見守る大天使が描かれた大きな絵。その絵があるということは、ここは国会議事堂どなりに建つ迎賓館だった。見上げる自分の目線がとても低くて、違和感を覚える。感覚そのものがどことなくふわふわしていておぼつかない。見渡した絵の両側に、二つの国旗が掲示されてあるのだけははっきりと捉えていた。一つは北コロニアの、そしてもう一つは、……それを自分はたぶん、見たことがある。否、いまこのとき、見たのだ。

『どなたがいらっしゃるの、とうさま』

とセアンは言った。幼く舌ったらずな言い回しだ。

『魔法使いさ』

かたわらにいる父の声。

『悪い魔法使いなの？』

『さあね、セアンはどういうのが悪い魔法使いだと思う？　どうやってそれを見抜いたらいいんだろうね』

しばらく世界がまたふわふわと不安定になって、ぱっと晴れたとき、答えが飛び出す。

『嘘をついたら悪い魔法使いよ』

父の笑い声。

『そうだね。簡単なことだね。ただしその基準でいくと、ここにいるみんな悪い非魔法使いってことになるがね』

『わたしも悪い子？』

『セアンは違うよ。何を言っても許される、子供だからね。セアン

は唯一人善い人間代表としてここにいるんだよ。魔法使いどのの心証をよくするためにね』
『とうさまだって正直者よ』
『善い人間の前ならだよ。朱に交われば赤くならざるをえないのさ、逆もまたしかり』
大ホールが水を打った沈黙に満たされて、その不気味さが強烈に胸に迫った。人々の緊張が伝染する。扉がひらく。中央を歩いてくる集団の中に、大統領がいた。大統領ってあんなにしわくちゃのお爺ちゃんみたいな顔をしていたかしらとセアンは訝った。その見慣れぬ大統領にエスコートされ、絵の下へ立とうとする人物が誰であるかは、考える間もなくふっと心に落ちてくる。ヤーヘル王国国王、シンアック・ヘルム・マーデル2世――魔法圏諸国家の盟主とも言っていい、最初の魔法契約国ヤーヘルの、元首。
『魔法使いどもの親玉だ』
周りから意地の悪い形容がひそひそと聞こえてくる。相手には絶対に届かない位置から。
『魔法で聞いてるかも』
とセアンはつぶやいた。
でも、呟いたセアンは知らないけれどここで王様は魔法を使えない。非魔法圏では魔法が禁じられているから。シンアック王は魔法圏と非魔法圏が互いに友好を結べる相手であることを示しに北コロニアを訪れていて、友好のため大事なのは、信頼を築くことだ。魔法圏製品の禁輸排斥運動が高まる非魔法圏へ赴いた王の行動は歴史に残されるべきものだったが諸刃ともなりえた。同じ人間であることよりも魔法の気配を強く見せれば、非魔法圏の世論は硬化して戻りがたくなるだろう。非魔法圏の人々は過去に否定した力によって支配されることを恐れている。
――薄い硝子の杯を手に乾杯。
絵に近いほうから順に、列を巡って魔法使いの王様がセアンのほうへ近づいてくる。

マントもローブも羽織ってやしない。黒と白の礼服揃えに金細工のベルトを斜めがけした王様は、プラチナブロンドが照明に映えてきれいな、痩せた人。間近に近づくと目許に小さなしわが見えた。知的な眼差し。明るく笑わないけれど、湛えた微笑に揺るぎない意志がある。前向きにひらかれた意志が。

青灰色の瞳がセアンに落ちて、紹介がなされる。

父を交えた三人のあいだに、二、三の言葉が交わされたが、いくつかはあとに残らない。いくつかは鮮明に響いた。

『チャリティー・クイーンか、愛の女王だね』

『税は徴収しないけれど、代わりに愛をお金に変えさせてあつめるんですの』

初めて王様の愉快げな笑顔を見た。

『素晴らしい。セアン嬢、あなたは生まれながらに女王だったのだろう』

『ええ、だって生まれたときから私の脚はこうでしたし』

セアンは冗談として言ったのだが、王様の表情は現実に引き戻されるよう真面目になった。そして一つおいた呼吸のあと、王様は心からとても残念そうに言ったのだ。

『ダイモーンと契約すれば、君の脚は不自由なく動くようになるよ』

「……シンアック王って」

掛け布団の中で暗闇に目をひらき、過去にごちる。

「ずいぶんデリカシーのない人ね」

夢が見せた過去？

まだ華やかな世界にいたころの、記憶。……今の今までずっと奥底へ沈んでいた。

冷たい月の光が窓から絹の袖のように入って、枕元を覆っていた。崖の上の家は静かすぎて怖いほどの夜があり、潮騒と月光をふさが

ないようにカーテンを閉めていない寝室。家族の寝室はみな本当は二階にあるのだけれど、セアンの部屋は、一階につくってある。
セアンは、ヤーヘル国王に会ったことがあるのだった。克明な残像が掘り起こされてみれば、徐々に思い出す。忘れていた出来事。ぜんぜん、まったく、意識の表層に留どめていられなかったくらいの昔、六、七才の時分だろうか。現代史で習った時系列から割り出しても――。
（伯父様の前の前の大統領は確かにしわくちゃのおじいさん顔だったわ）
急にどうして夢に思い出したのだろう。
昼間、不覚にも過去の不愉快さを心へ甦らせたりしていたせいか。
「デリカシーのない人間が侵入してきているせいかしら」
ヤーヘル国王のあの言葉は周囲の表情を凍りつかせたが――当時の大統領以下、国王を招待した派は対立が導くだろう戦争を望まぬ人たちだったからだ――もちろんその一言のせいで戦争が避けられなくなった、などというわけではない。
国王の訪問も歴史的な反目の前では焼け石に水だったというだけのことだ。
だいたい、無遠慮の余計なお世話にいちいち腹を立てて戦争を仕掛けていたら、セアンなど大変なことになっている。どこどこに伝わる治療法、どんな病気も祈りで治してしまう新宗派、だの、だの、親切でお節介な紹介者たちなら途切れることなくセアンの前にあらわれてきたものだ。シンアック王の、言葉面だけならそれらの勧誘と変わりない。
ただ違うのは、魔法は、魔法圏においては、非魔法圏の科学ほどに確立された方法だということ。
だからこそ、王の立場と状況から問題のある発言であり、――だからこそあれは、嘘のない人間の言葉だった。
掛け布団を引き上げて瞼を瞑りなおす。
壁と廊下を隔てて引き攣れる悲鳴が聴こえる。今夜も聴こえる。

それが人間の、身体のものではない痛みにさいなまれて絞る呻き声だということに、セアンはもう気づいていた。

安息日の日曜は働くことを禁じられている。純教徒たちは特に神の戒律を大事に守る。大海のこちら側の文化だ。

あれから三本の失敗作を転がして、雨の金曜も雷のひどかった土曜もスーの言いつけ仕事を含めて外で働きづめだったサギ男も、残念ながら居間でおとなしくしていなければならない日曜日。

日曜日には決まってあれが来る。

「昨日おとといの嵐は心配したよ、ミス・セアン」

「そりゃあ、目論みごと崖崩れにでも飲まれて消えたらほぞを噛むしかないものね、トニー」

「どういう意味だい？」

「自分の胸に聞いてみて。あら素敵だわ、その胸の紫のハンカチーフ」

「紫は高貴な真心を表すって新聞の色彩心理学欄に載っていたからさ」

「神聖占星術欄にそんなことが書いてあった気がするけど？」

「そ、そうだったかな？」

部屋の隅で吹き出す気配がした。

セアンとトニーがそろってそちらを向くと、何もなかったように真面目な顔で読書に没頭する青年の姿。

戸棚と窓に挟まれた壁にもたれ埋まるように直座りして、膝に抱えた書名は『配管仕事の心得』。

「そんなに面白い本なのかい？」

眉をひそめたトニーに声かけられてサギ男は剥がされるように顔を上げると

「いや、どうぞつづけて」

と言った。存在ごと謙遜するようにだ。
調子を狂わされたよう、トニーが落ち着きなく座り直す。
「使用人は使用人部屋で過ごさせたほうがいいんじゃないのかな、ミス・セアン」
「それがね、あの人を部屋に閉じ込めておくとポイがうるさく吠えるのよ。出てこい出てこいというようにね。うるさくてかなわないから、ポイのねじろの居間で一緒にいさせているの。夜中もよ」
これは本当のことで、サギ男が運び込まれて寝付いた夜こそ低く唸っていたり扉を掻いたり、それはそれで普通の反応だと思っていたが、慣れるどころかだんだんポイの警戒は強くなった。警戒と言っても、目の届くところにサギ男がいる限りは普段どおりだ。むしろ懐いているようにも見えるのだが、一定の距離は空いているからまだつよい興味があるという段階のようだ。
「へえ、見目はしょぼいけど、いい番犬だな」
ストーブの前で寝そべっているポイの垂れた耳が敏感に動いた。けれどそれだけ。
「ええポイは、人間についてとても鼻が利くのよ。つまらないものには反応しないで、放っておくの」
「利口だなあ。さすがミス・セアンの犬だね」
今度こそ吹き出しただけでなく喉から笑う声も抑えられずつづいたので、サギ男は訝りの目から逃げられなくなった。
困って唇を噛むと、サギ男は片手を差し出す身振りで示した。つづけてくれ、と。
「ポイじゃないけど、本当に身元は確かなのかい。なんだか目付きが暗いじゃないか。銀行に勤めていると、後ろ暗いところのある奴は一目でわかるようになるんだよなあ」
「銀行って素敵なところね」
「そうだろう、ミス・セアン」
だから僕も素敵だろう、と言うようにハシバミ色の瞳をきらめかせ身を乗り出すトニー。

「だからさ……」
「スー、ねえスー、いないの？」
「スーザンはさっきマクビーじいさんのところへマトンスープの作り置きを届けにいったじゃないか。この家ではまだ日曜は冷えたスープを食べてるのかい？」
安息日は火をおこしてもいけない、というのが厳格な宗派の生活で、スタチェット家の守る伝統だった。
「もちろんよ」
「冷えてかたまった油の上澄みだって、君と囲む食卓ならごちそうだろうねえ」
「スー、ねえまだ帰ってないの？」
トニーの口ぶりが一つの方向性をもった気がして、セアンはそぞろに逃げ道を窺う。嫌な予感がした。
「ねえミス・セアン。いや、セアン。今日は受け取ってほしいものがあるんだよ」
青い背広の内ポケットへ手を入れた。
「実は、昇進が決まったんだ。来月から僕は、出納係長になるんだよ。これは一応、出世コースと言われていてね。だからね、これを機に、いよいよ思い切って――」
セアンの頭から血の気が引く。
「ちょ、ちょっと、もうスーザンったら！」
革張りの小さな小箱が食卓へ置かれようとした。
血の気が引いたと思ったのに顔は真っ赤になってセアンは招かざる最後通牒の箱を凝視した。金の留め金具を外し蓋をあけるトニーの恭しい手つきといったら。
「セアン、どうか僕の」
ガタン、と引かれた椅子の脚の跳ねる音が大きく割り込んだ。
はっとして、込み入った対峙をしていた男女が顔を上げる。
「あなた、銀行にお勤めなんですか？　それはちょうどよかった。僕はいま、金を貯めたいと思っているんです。口座を開きたいんで

すが、小口は幾らから預けられますか？　利子はどれくらい？　どうか相談にのっていただけますか？」
　座りながら本を食卓に投げ出してサギ男はトニーへ詰め寄るようにまくしたてた。
「な――」
　呆気に取られて固まりかけたトニーが、革箱の蓋に指の皮を挟まれて、あわてて箱ごと手を引っ込める。その前で、うん、うん、と頷きながらアドバイスを催促して待つサギ男。
　トニーはちらりとセアンを見て、何故かすまなそうに肩すくめてから、格好つけなおすような気取った咳払いとともにサギ男と向き合った。
「とりあえず預けられるのはどれくらいだね？」
「月に十二……いや、十ゲール。今のところ三十ゲール貯まっていて」
「まるっきり子供の小遣い程度だな。しかし心構えとしては立派なものだよ、貯蓄は男子の甲斐性を証明するからね。利子は低いが開設金も五十テニーですむ簡易口座をおすすめしよう。正規口座は開設金を五十ゲールとるから無理だろう」
「ついでに今日預かっていってもらえますか？」
「ああ、勿論、お安い御用だね。手続きは明日になるが。名前を聞いておこうか」
「フラウド・スウィンドラー」
「詐欺（フラウド）・詐欺師（スウィンドラー）……？」
　ぎょっとしたようにトニー。
「いいや、シンドラー、です。フラウドって名前のせいで、名字までよく聞き間違えられるんだ。ええと、僕の持ち金はセアンお嬢様に預けてあるので」
　今度はセアンが寝耳に水を浴びせられる。とっさの回転でその言葉に乗り、マントルピースの上を指した。三十ゲールくらいのお金は、スーが持って出るお使い用の財布にいつも入っている。

「そこから出して持っていってちょうだい。いま、家の金庫を開けにいくのは面倒だから」
本当は金庫の場所をスー以外に知られたくないのだ。
「故郷で許婚が待ってるんですよ。五千ゲール貯めたら帰るって言ってある」
「錦を飾るだとか下手なことは考えずに、五分の一程度で妥協したまえ。早めに故郷で足場を固めてしまったほうが、人生設計としては有利だよ」
自ら暖炉へ歩いて金を預かりながら、トニーはもっともらしく諭してみせた。
一世一代の勝負を邪魔されてそれでも余裕のふるまいを見せるのは、さすが気取り屋のあだ名持つ彼の真骨頂だ。『私の前でみすみす醜態をさらしたくないからね』――とセアンは思った。次の機会に響くと判断できているのだろう。
「人の金を預かってのんびり長居はできないな。今日はいったん、帰らせてもらうよ。セアン、大事な話が途中になってしまったのだけど、晴れの記念日は幾ら延びたって逃げてくわけじゃあないよ。どうせ幸福な一本道なのだからね」
結局、妙にうわずったままの場の雰囲気が元に落ち着かない間に、トニーは出直しをはかった。どこか消沈したような玄関ドアのぱたんと閉まる音を壁越し聞き送ったあと、居間に残された預金者と求婚しかけられの少女とは、えもいわれぬ沈黙を食いつぶす。
嵐の名残の強い風が、窓硝子をがたがたと揺さぶった。
「……お礼でも待ってるんだったら考え違いよ。一人だって切り抜けられたわ、だって――」
「それこそあなたの考え違いですよ、セアンさん」
空けられた椅子のほうを向いていたサギ男が座ったまま振り返って遮るように言った。
「……え？」
「僕が割って入ったのは、あなたを助けるためじゃない。あのまま

あなたは彼の求婚を断ってしまうと思ったから」
「もちろんよ。断ったわ。断れば済んだのよ。そうよ別に逃げる必要なんかなかった。だからお礼しないわ」
とつぜん立ち上がってサギ男の椅子がまた派手に床を掻いたから、セアンは後ろでびくりとした。
「ぜんぜんわかってないな。どうしてそう人を見る目がないんだろう！」
青年の声は張り上げたわけでもないが充分大きくて、セアンの息を縮めた。
けれど怯える必要もないから、セアンは肩を張って言い返す。
「私のことを言ってるの？　勘弁してちょうだいね、スウィンドラーさん。いいえフラウドマンさん。命と自由の恩人に誹謗中傷でむくいるなんて、私も自分のした善行が情けなく思えてくるわ」
「本当ですよ。僕なんか助けなければよかったんですよ。僕みたいのがあなたのケチんぼな恩にありついて、彼みたいな良い奴が虚仮にされるなんて、ひどい捩れだ。あんまりな間違いだ。ひねくれた心があなたの目をただの節穴にしてるんだ。何を見てるつもりになってるんだかしらない。だけど何もかもとんでもなく間違ってるのだけはわかる」
握られたこぶしを眺めてセアンは眉間を険しくする。
一方的な非難に、腹がたった。動悸も激しくなったが、こちらに顔を見せないサギ男の憤りは八つ当たり混じりのようにも感じられた。だから、いま一つ感情がついていかなくて、返す言葉をのぼらせあぐねた。
サギ男がどういう筋道を通って怒っているのか理解できず、取り残された気分がする。
「何も見ようとせずに、心を狭く生きていたいなら、あのときはどうして僕を放っておいてくれなかったんです。瀕死のまま、海に投げ返しておいてくれればよかったんだ……」
両の手首でこめかみを挟み、サギ男は声をかすれさせて頭を抱え

た。「いいかげんで気まぐれな神の手のせいで死ぬべき人間が死ねなかった。馬鹿げた話だ」
自分の言葉にとらわれたように呆然としてサギ男は立ち尽くす。
「おせっかいの次、今度は逆恨みなの？」
腕ごと激しくかぶりを振って、サギ男はうわ言みたいに言い返した。
「逆恨みなんかじゃない、俺は呪い殺されても文句は言えない……」
恐怖の滲んだ声音に、セアンは引きずり込まれるような不安を覚えた。暗くて深い底へ。すり替えられた話の先がセアンには見通せない。
夜中に聴こえてくるものと同じ、引き絞る声が居間に響いた。
「どうしてだ……皆も、彼らも、俺のせいで、俺が――したのに」
見開いたまま閉じることを忘れ、腕の力に引き攣られる眼の端が、セアンからも見えた。底はその眼によって見据えられているのだ。
もう彼はセアンに問うているのではなかった。彼は海に質しているのかも知れなかった。窓が閉まっていても、沈黙の落ちた家の中に潮騒が間断なく届きつづける。まつわる海を振り払えもせず、問い質しているのかも知れなかった。
「そうまでも自分を憎んでいる、あなたはいったい何者なの？」
だいぶ時が経ったように思う。二人の人間のあいだに流れるにしてはだ。セアンは家政婦が帰ってくる前にこのときを終わらせなければならないと潮時をみて、静かに口開いた。その問いに意味はない。ただの区切りとして言った。
聞いたって、セアンには関係ないことだからだ。
サギ男の両腕はいつしか小刻みに震えていたが、かけられた声にやっと彼はその腕をおろして、食卓の端に手をかけた。手探りに、置かれた本をたどると引き寄せ、片手に抱えた。
彼は息を吐いた。
そして彼は、少し横顔をセアンに振り返って、答える。
「僕は、詐欺師ですよ。今さっきそれが真実になったでしょう。あ

なたから三十ゲール巻き上げました」
その頬に、かすかに歪む例の微笑が浮かんでいた。

二

1

街の雑貨屋で買ってくるカラフルなねじり飴と板チョコレートが、週に一度、火曜日のおやつと決めているスーとセアン共通のお楽しみだ。

買い出しから帰ってきて物を台所の各所に仕分け、最後にお楽しみの小さな袋を手に取ったスーは、居間へ足を向けようとしてふと窓の外へ目をとられた。

「あんれ、まあ」

眼下の波打ち際に二つの人影が肩を並べてすわっていた。

スーの出掛けていた間に起きたこととは、こうである。

朝から図書室でいつもの時間を過ごしていたセアンは、ポイの吠え声で読書の集中を切らした。顔を上げて意識の向きを外へとやれば、ポイの声と入れ替わるようにトンテンカンの騒音が消えている。車椅子を動かして窓辺から左側を見下ろすと、さっきまでいたはずの水栓のところにサギ男の姿はなかった。ポイの声を追って視線は前方へいった。崖の下の浜辺、海へ向かって歩いていく青年がいた。ここからとても遠い。

セアンは上体を傾がせて車椅子を返した。ハンドルをこぎ、廊下へ出て、居間へ入って突き抜け、ガラス戸を引いて出た外は、深まっていく秋の途中にしては日差しが暖かく、いつもより潮の匂いがつよく香った。

潮騒もまた力強い。

その波が、青年をさらっていってしまうのでは。と懸念がよぎる

ほど、彼は真っすぐ海の中へ進んで、行き交う波に揺らぎながら腰までをすでに浸していた。
テラスの突端から見つめるセアンを知らず、青年はあるところであっさりと身体を返して戻ってくる。互いの表情が見える距離まできて初めて、サギ男はそこにセアンが出ているのを見いだして驚いた顔をした。
「これを」
横の階段を駆け上がってきてサギ男が差し出した、手のひらの上に大振りの真っ白な巻貝がのっている。
「あげます」
「私はそういうものは嫌いよ」
セアンは高い太陽を真後ろにしょったサギ男の頭を睨みつけて言った。
あらぬ誤解をして体力まで使って損した、という腹立ちもある。本心から険を込めて言ったので、サギ男が、他愛ないが無視できない痛みを与える虫に刺されたみたいに眉をしかめて困っている。
どう思われようと嫌いだ。自分の足で入っていけない場所にあるものなんて。自分には一生掴みとれない場所に生っている黄金の実を、軽々と獲ってくる者を誰でもきっと恨むだろう。
「私は本でじゅうぶんなの」
何千回分もの様々な人生を体験できる本たちがあれば、じゅうぶんだ。本当のことには縁がなかったけれど、そのかわり、平穏のすばらしさを知っている。
「あなたのかまけている水栓、ちゃんと水も出るし、倒れないようになったんだから、もうあれで終わりにしたらどう。不格好で耐久性もないかもしれないけど、どうせ誰も使わないんだから」
完全に逆光に入ったサギ男の顔が見えないまま、セアンは雇い主としてそろそろ切り上げを提案した。壊した設備。そんなものに責任を感じて出て行けないでいるなら。
それとも本当は出て行く気なんかなくて、ずっと迷惑をかけつづ

ける気なのかもしれない。世界を面倒にしているこの戦争が終わるまで。戦争が終わったら……。
影が躍る。欄干を超えて浜のかなたへ、白い物体が放物線を描いて飛んでいった。
投げ捨てられた巻貝だった。
（何を――）
「いやっ！」
貝の行方に気を取られていたら突然むりやりに、膝と背中へ腕をまわされてセアンは悲鳴を上げた。
「なにするのっ。いやだ、なにをするのよ！」
軽々と宙に浮いてしまう身体に、自分で悲しくなる。嫌だ。嫌だ。乱暴に対してただ少しさえ抵抗する力もない。暴れたくて動かない脚。力の入らない腰から上も。
「おろして！！」
「首に掴まらないと頭でっかちな頭から落ちるかもしれない」
太陽がちらついてその表情がよく見えないサギ男が、取り合わない声で言った。
遠のく車椅子に不安が高まる。セアンをすくい取るように抱き上げたままさっさと歩きだしたサギ男。不安定さと、強引さに、息を詰まらせながらセアンは落ちたくない本能からサギ男の首にすがった。
至近距離からみたサギ男の顔は無表情だった。いいや、わずかに怒っているようにその横顔は感じられた。
「どうしようっていうの。どこへ……！」
「海」
「いやよ！　海は優しくないって言ったじゃないっ」
「君とは気が合うんじゃないか。優しくない同士でさ」
「サ、ギ男……」
「だけど海は君みたいに偏屈じゃないな。人をいちいち疑ったりはしないし、腹の中から何を持っていかれても気にしない。大らかだ」

「サギ男！」
「人におかしな名前も付けないしさ」
気にしていたのか。そんなに不満だったのか、“サギ男”が。
「後悔しなさい、“カメ男”に変えてやるわ」
「詐欺師よりずっと誇らしいよ。ウミガメは優雅だし、逃げ足だって最高なんだ。理想さ」
セアンは飄々と返すサギ男の胸をこぶしで叩いた。恐怖は怒りに変わってより高ぶった。
「本性を現したわね――」
「君のテリトリーから出たからさ」
崖の下の砂浜を歩いていた。
海へ向かって――。
びくともセアンの抵抗を受けつけなかった腕にしっかりと抱えられていても、サギ男の歩く足元自体がさくさくとした砂で。でこぼこな地形に足を取られるから歩調が一定ではなくて怖かった。
何よりも視界に迫ってくる、巨大な青い水が怖かった。
サギ男はさっきテラスから見たときと同じように、一顧だの迷いなく波を蹴散らし進んでいった。宙のセアンが方向感覚を失って身体も強張りじっとしているうちに、進んだり、下がったり、浜辺と平行に歩いたりしたようだった。
「夏だったらこのへんに放り込むんだけどな」
海の真ん中で――セアンにはそうとしか感じられない――おどかすように言って、けれど結局彼がセアンを降ろしたのは、色の濃く濡らされた砂と乾いた砂との境目のあたりの浜だった。寄せてくる波が、投げ出された足の先を浸し、去っていく。室内履きと靴下とは、サギ男に頭の後ろへ投げ捨てられてしまった。
「お嫁にいけなくなったわ」
恋人でもない男に素足にされるなんて、あまりの屈辱だ。
「行くつもりなんかないくせに。貰い手もいないだろうな、その性格じゃ」

投げつけた砂はよじった背中に阻まれ、襟から入った砂も落とそうとはせずサギ男はセアンの隣で寝転んだ。組んだ腕を枕に目をつむる。まるで野蛮人みたいなことをしているのに、その顔は優しすぎた。

「性格は後付けだわ！」

「自由に歩けるからって性格のいい君なんて、想像できないよ。もしもの君は、首都の社交界で、高慢ちきな高嶺の花になってふんぞりかえってるに決まってる。ときどき紛れ込んでくる田舎者の洗練されてない様子を見て取り巻きたちと笑って楽しむんだ、俺みたいに」

先日のことを言っているのか、それとももっと昔の思い出を語っているのか、判じかねさせる口調だった。

「類は類を見分けるってわけなの？　ずいぶん厚手の猫を被っていたものね。さぞ一週間、つらかったでしょうね。隠し切れてもいなかったけれど」

「本当の自分はなかなか消え去ってくれない」

軽い衝撃がセアンの瞳をひらかせる。本当、というフレーズのせいで。

「やたら厳しい集団生活をはじめたときもそう思った。一六になったからってそれを境にひょいと大人になって分別を持てるわけじゃない。喧嘩ばかり、悪戯ばかり、懲罰ばかりの毎日だった。だけど、だからって、いつまでも子供のままでいられるわけでもなかった。戦争が――」

ふいに瞼があいて言葉をやめてしまう。

気の迷いの吐露だったように、間違いを振り払うみたいにサギ男は起き上がって、怪訝そうな顔でセアンを見返す。

「さっきの恐慌状態は酷かったな。まさか砂を触るのも初めてだなんて言わないよな？」

「……じめてよ」

呆れた顔で見られてしまう。

「海を見にきたことさえないのか？　プライベートビーチだろ」
「子供のころならあるわよ……」
周りの砂を撫でて、セアンはうつむく。手に一面くっついて、けれど握り潰すとさらさらと剥がれていく、白砂。
太陽熱を吸った地表のあたたかさ。
足首をきまぐれに洗う水のひややかさ。
「本の黴みたいに生きているのが楽しいのか？」
もういちど、砂をひっかけてやった。
サギ男は今度はよけなかった。
「あまり疑心暗鬼なのはどうかと思うよ。引け目に感じすぎるのも」
時の止まったように感じたのは、心に踏み込まれて覚える怒りのせいなのか。それとも、息まで止まってしまったのは――。
「人と人は、助け合って生きてくものだよ」
あまりにも、真剣な顔で言うから。
セアンは無理やり息を吸って、めぐらせた殻を強化した。
「あなたに関係ないわ。こんなお節介されたって、私の人生は変わらないし、あなたには変える権利もない。あなたなんかに変えられたくない」
サギ男はだまった。顔色を悪くしながら、深いところを打たれたように目を伏せる。
セアンの言葉のどこかが、彼の琴線を引っ掻いた。
「そうだよな」
さっきの怯えていたセアンよりも強張った声で呟いた。
伏せた睫にからんだ白砂。自分がしてしまった罪悪感とともにそれをじっと見るうち、セアンは手を伸ばしている。ためらいの間に目と目が合う。けれど、サギ男はよけなかった。セアンの指先がそっと砂を払う。
そしてすぐ引っ込めたセアンは、ふたたび臨戦態勢で砂を握った。
「入水するのかと思ったわよ」
図書室の窓から海へ入っていく青年の姿をみたとき。

「しろと言うならしますよ」
飄々とした口ぶりに戻ってサギ男。
海の色を映したような碧色の眼が、本当の本心を行方不明にしてセアンを見下ろす。
「僕の命を拾い上げた、君がここでは神様なんだから」
「馬鹿なことを言わないで。あなたなんかと私は無関係よ。関わりたくないって言ってるでしょう」
本気を表すために、セアンはそっぽを向いた。
苦笑まじりのため息が聞こえる。自嘲気味に。
「っ」
そのサギ男の気配が急に変わる。振り向く間にサギ男が砂を蹴散らして立ち上がった。
「どうかしたの？」
見上げて訊いたセアンの耳に、異変が届く。辺りに満ちていた波音が消えたのだ。
そよと浜を渡っていた風がやむ。
（なに……？）
サギ男は正面の海の果てを睨みつけるように窺っていた。表情が緊迫を進めていく彼の頭越し、信じられない光景を見てセアンは息を飲んだ。
秋の蒼い空が、割れていく。
まるで二本の大きな刷毛で塗り替えられていくように灰色の帯が、海岸線と交差する長大な一線の輝点から生まれ、反対同士の方向へのびていく。ちょうど自分たちの真上に浮かんだ光の線からは、花火のような金色のエネルギーの飛沫が散り降った。
灰色の帯は陸より海の上を広く覆ってひろがった。視界の果てまで海の色が黒くなる。
一帯は低い灰色の空に閉じ込められた。
「やだ……」
「大丈夫。……掴まって」

振り仰いだところにあるサギ男の眼が、絶対の保証を伝える。だが彼が感じている緊張した恐怖そのものは、消えていないように見えた。

「サギ男、あれは――」

横抱きに抱えられて砂浜を後ずさりながら、遠くの海の中からすと伸び上がるように生えた棒を発見してセアンは問う。

みるみるうちに棒は、こちらへ近づいてくる。波を盛り上げて、波を脱ぎ捨てるように、目を塞ぐような距離感で現れた黒々とした巨体。音なく浮上したそれは――

潜水艦……？

「トトラク三一型潜水艦……？」

呟いたセアンをサギ男が驚いて見下ろす。

「図鑑で見たもの。だけど細かいところが違うわ。改良されているんだわ。図鑑の情報は戦前のものだったから」

海上に停止した平べったい艦体はそこに前から存在した孤島みたいだ。間髪を入れず、前部のハッチが開いて、数珠玉のごとくつづく人間たちを排出した。サギ男の手に力がこもる。

十数人の乗員たちが艦上に整列、こちらへ向かって敬礼した。

（敬礼って――）

サギ男は灰色のバリアを見上げながら、もっと後ろへ後ずさろうとした。引きずられるセアンはあとからもう一人人間が出てきたハッチを注意して見ていた。他の乗組員とは着ているものが違う、おそらく将校の軍装だろう紺色の制服をまとった痩身な中年男性が、艦体の梯子を伝って喫水線まで降り、投げ込まれたゴムボートに単身乗り込んだ。取り付いて操舵する前進装置のモーター音とともに近づき、それを乗り捨てるように上陸。

波打ち際で敬礼。

「お迎えに上がりました、殿下。ご生存なにより。国王陛下がご帰還を心待ちにしておられます」

うんともすんとも反応のない相手に向かって、将校は言を継ぐ。

直立不動で。「ジャミング限界時間内に、急ぎ、ご乗艦願います」
サギ男は顔を背けた。セアンと反対のほうだったので、首を伸ばして覗き追うと、口をきつく結んで足元の砂と睨み合うばかりの顔がある。
「サリアック殿下」
冷静を崩さないが、迅速な動きを要求する厳しい声を将校は発した。
殿下と呼ばれるサギ男が首を正面へ返す。
「セロン少佐あなたは私の上官ではないか。何故そうした態度を取られるのですか」
解せないように言い吐く。
「あなたは英雄です、サリアック殿下。あなたの艦の奮戦と犠牲が大火魔法の威力を実証し、我々は勝利を目前にしています。国民があなたの帰りを待っているのです」
激しくかぶりを振りはじめた青年に少佐が目をすがめる。
「レーダー撹乱はあと十分もちません。お急ぎを」
「帰らない」
わずかに目をひらいただけで、動揺といったものを見せずに少佐は淡々聞き返した。
「何とおっしゃられました」
「帰らない。俺は英雄なんかじゃない。犯罪者だ」
「おわかりでしょう、このまま北コロニアにいらっしゃれば、早晩必ずあなたのご身分が複雑な事態を引き起こします。ヤーヘル、しいては連合の不利益を」
青年は首を振りつづけた。
「艦の皆は……」
「残念ながら探知できたのは殿下の精霊（ダイモーン）だけでした」
わかっていた答えだったように、眼を閉じた。
「なおさらだ。俺一人が生き残って、おめおめと帰れるわけがない……！」

「命令だと言っても？」
ふたたび頑なに顔を背けて、青年は肯定した。
「ならば軍規違反とみなす、マーデル大尉」
口調を変え、少佐は砂浜をのぼった。ひらいた右手のひらを肩と水平に掲げ、宙に図形を描くよう鋭角に振った。艦上の乗組員たちが同様に仕草を揃えた。空（から）だと思っていた少佐の背後のゴムボートから、銀色の正四角形がいくつも飛び出す。その鈍い光沢は鉄板だろうか――四角い鉄板片はすべるようにセアンたちの頭上へやってきて、空中で停止した次の瞬間、驚くべき変化を見せはじめる。溶けて、板同士むすびつき、一枚のドームになったと思うと、頂点から放射状に数え切れぬ亀裂を生じて、それは二人を囲む朱色の檻となった。鉄を溶かしていた熱の朱色はすぐに消え去って、去りぎわ熱風が頬をかすめたのは、それが幻ではなくて、相応のエネルギーが消費された物理現象である証しだ。
砂の下を潜った鉄の床が持ち上がり、二人を籠の鳥とする。
「次は手錠か」
サギ男が見つめる少佐の手には素材である鉄球が乗せられていた。
「大尉、君の力に対抗できる私たちではないのは承知だ。どうかそれを汲み取ってもらえないか」
そう言って、少佐は鉄球を投げ、魔法に乗せた。いったいどういう意味、と疑問を抱いたセアンの目の端で、サギ男の空いているほうの腕が正面へ伸ばされる。
おじょうさまあっ！
家のほうから形相を涙目にしているだろうスーの鼻声の叫びが聞こえた。
「スー、来ちゃだめよ！」
時が巻き戻されていく――そう感じた。
鉄柵の隙間が元のように塞がれて鉄球の侵入を弾いた。オレンジ色のカーテンが上がっていくみたいに、灼けた鉄の壁が視界から払われる。熱の輝くオレンジ色は鉄板に幾何学模様を描いて、それぞ

れを欠片に切り離す。遊弋しながら欠片たちが飴細工さながらにキュッとねじれた。火曜日のねじり飴みたいだ、と現実感をなくしながら眺めるセアン。
重力に従った鉄の飴の落ちた先々で砂が舞い、砂の焼ける音がした。
「少佐、北コロニアの哨戒がすぐたどり着くぞ、早く潜れ。勝てるというなら戦争をすぐに終わらせろ。俺は、帰らない」
徒労と失望をかみしめる顔で、少佐が艦を見返る。艦上から何か叫ぶ者があり、緊迫を感じさせた。
少佐は青年を、個人的な意見はわざと殺した瞳で一瞥したのち、無言で急ぎ踵を返した。
「腕が痛いの、降ろして」
セアンの頼みに青年は半分海にやっていた我を取り戻した。
目線の低いところからセアンは波間へ沈んでいく滑らかな黒い艦体を見送る。吸い込まれるように海中の生き物となっていく、それを。
「おじょうさまあ〜！」
家から全力で駆けてくるスー。その両腕には勇ましくもお嬢様を守ろうと長銃が抱えられていた。
「かえって危ないところだわ、スー……」
思いつつ、小さな身体で駆けてくる家政婦に目頭が危うくなる。
雫が砂に落ちて染みた。点々と染みが増えていく。それはセアンの涙ではない。
雨でもない。空はいつのまにか、蒼空に戻っていた。
逆光に陰る青年のおもてを仰いで。
慟哭というものを初めて間近にした。
抑えられない感情が青年の顔を赤くし、歪めていた。
泣きながら、哭いていた。怒り、哀しみ、苦しんでいた。漏れる声が耳から入ってセアンの胸を潰す。
浜に転がる捩れた鉄塊がざざ、と不安な音を立てて動いた。動く

はずのないときだ、動かす意味がないことをセアンは知っている、だから、これは不穏な現象が起きているのだと、感覚が察知した。
「だいじょぶでしたか、おじょうさま！」
「スー、止まって！」
危険を予感して、鳥肌がたつ。
鉄塊が発光しはじめる。燠が酸素を得たように、にわかに燃え立っていく。そして青年の絶叫とともに、爆ぜた。
……ふああ、とスーの悲鳴がかそけく天に響いて、はっと振り返る。放り出された銃が、銃身を花の開くように変形させていて。
膝を着いたスーの白い前掛けが朱色に染まっていく。
「スー！」
肘の内側から鮮血をしたたらせたスーザンが、呆然とセアンをすがり見ていた。

崖の上の家は静かだった。
スーはマクビーじいさんと医者へ行った。戻ってきたマクビーの報告によれば、腕の裂傷は、深いものの骨折には至らず、一カ月程度で完治する怪我だということだった。縫合手術の前後に麻酔と鎮静剤を打ったので、今日一晩は医者の家で寝泊まらせる。
マクビーはセアンに世話が必要かと問うた。セアンは首を振った。これ以上、事態を複雑にしたくない。誰も巻き込みたくない。
マクビーを玄関に送ったあと、居間へ入っていくと、いつもより夜の灯りが少ない。必要最低限しか点いていない。慣れない者がやったように。
セアンは食卓の前に、つくともなく、そこへたどり着くのがやっとという状態で止まった。身体が重く疲れている。
台所の灯が消えて、サギ男が出てきた。抱えた盆の上に岩みたいにごつごつしたパン。それから、湯気の立つ――目の前に置かれて

中身が見えた、オニオンスープ。
「料理ができるの？　それとも」
料理も精霊に任せた魔法？　と皮肉しかけて、やめた。もっとも、料理なんてできるのかという疑問自体、出自を揶揄する皮肉のようだ。そういう意図はなかったけれど。
「艦で覚えたから」
セアンは自分の前にだけ置かれた皿を見つめ、中身にあまり違和感がないことに気づく。玉ねぎの切り方などスーのやりかたに似ているし、スープの色も、スーの味付け具合と似ている。これにローストチキンが入っていれば、一週間前拾ったサギ男に上澄みを飲ませたあのスープと同じだ。
彼なりの気遣いで、なるべくスーのやりかたを真似したのだろうか。だが食卓の真ん中に置かれたパンだけは、見慣れない。
「ずいぶん不器用なパンね」
スーが夕食に焼くのは、丸くて上品なテーブルパン。スタチェット家の厨房直伝のものだ。
「種菌は湿気に弱いから、使わない。塩だけのパンです。パンの焼き方はそれしか知らない」
「そっけないいわくね」
サギ男は黙って、何も置いていない席へ着いた。
あれから彼は、必要最低限の返答しか返さなくなった。
もともと正体を隠したところがあったが、もっと表面に近いところで、何かが閉じられてしまったように。
自省や自戒がそうさせるのか、それとも――。
食欲はなかったけれど、間がもたないこともあって、セアンはスプーンを手にする。スープはスタチェット家風に味が薄い。割られたぶんを手にとって、ちぎり口にしたパンは、塩の味は、そう強くはないけれど。
「涙のパン」
セアンは意識せずに呟いた。

口に出すと、ごつごつしたかたちにいかにも似合わぬ名前だった。打ち消すように首を振る。ただ、スーがいる食卓の陽気さ、呑気さを、ここに引き寄せてみたかっただけだ。

サギ男という異物を迎え入れても、日常に取り込んでしまえた、少しも他人の侵入する怖さがなかったのは、スーの懐の深さがあってのことだ。セアン一人では、たとえ足が自由でも、サギ男にいくら悪意がなくても、無理な一週間だったろう。現にいま、セアンは青年の存在におびえていた。恐怖とは違う。サギ男はセアンに害を加えたりしない、それはわかっている。むしろそれだからこそ、セアンは青年をどう扱っていいのかわからない。一週間ずっと、スーを媒介にごまかしてきたことだ。

スーがいなくて困ることは、もう一つ。夜眠る、寝台への移動だ。他のことは大抵、座ったままでもこなせるように工夫されていた。お手洗いは、スーがいれば厠を使うが、スーが出掛けているときは病人と同じやりかたをする。

しかし車椅子から離れるとなると、自力では試したことがない。腕の力がもたなければ床に落ちるかもしれない。

車椅子をセアンの部屋まで押してきたサギ男が、何か手伝うことがあるなら、と言った。

「ないわ」

とセアンはとっさに返した。

枕元の灯りをつけて振り返ったサギ男は、本当だろうか、という眼でセアンを見ていた。

「なによ、まだお節介がたりないの？」

「スーザンさんの腕の代わりができるなら」

「腕の代わりはできるかもね。でもあなたは、あなたは、スーにはなれないわよ」

セアンは自分で何を言っているのかよくわからなかった。

「スーザンさんは明日には帰ってきますよ。マクビーさんがそう言っていた」

「聞いていたわよ。聞いていたわよ。どうしてそんなこと――」
「スーザンさんは、今晩一晩安静に眠って、明日には帰ってきます。セアンさん、大丈夫ですか？」
「っ聞いて――」
膝掛けの上から、重たく両手が置かれた。とても近いところにその骨張った手はあって、セアンは自分が身体を折って俯いていたことを知る。
「セアン」
覗き込まれて、親身な声で近づかれて、自然とセアンの背筋が伸びる。竦んでどこかへさまよってしまっていた心も、車椅子の上に座っている――まだ縮こまったままだけれど。
跪いたサギ男が不安げにセアンの瞳の奥を見通そうとしていた。
「大丈夫そうに見えない」
「大丈夫よ」
強気に見返して、自分へ言い聞かせるためにも言い返す。
立ち上がったサギ男が左右の肘乗せを持って車椅子を引き寄せ、寝台に着けた。見上げるセアンの両脇へ腕を通し、引き上げて抱え、寝台の上へ移す。スーのやり方そのままに。セアンの髪に、彼の顎がかぶさって、離れていく。見よう見まねでも、真似ただけのことはある、セアンという少女が送っているこの生活にすっかりサギ男が馴染んでいるのだとわかる、自然な介助だった。
胴を抱えたままの中途半端な姿勢で、サギ男は動きを止めた。
「何か間違えましたか？」
彼をそう動揺させるような眼をセアンがしていたらしい。
「別に」
保証してやったのに、サギ男はセアンと視線を絡めたまま外そうとしない。物思いするように時を止めてしまった。
とても静かな夜だ。
「やたら厳しい集団生活って、軍隊のこと？」
「……正確には、士官学校がその最初だった」

やっと動作したサギ男は膝をつくと、セアンの身体を支えながら力無い脚を揃えさせる。「入る前はろくでもなかった。悪ガキで、学校のほかに家庭教師づくめにされたけど、まともに話を聞いてたことがない」

かろうじて笑い話にはなる程度、そういう顔をしながら、話した。

「で、軍隊へ入れられたの？」

「進路は自分で志願した。というのか、うちは長兄以外はだいたい軍人か、穀潰しにでもなるしかない。次兄は陸軍にいる。子供のころから士官学校は憧れだった。海軍も。潜水艦部隊（シー・タートル）も」

そこからは笑い話にならない、表情に陰りを加えてサギ男はつづけた。

「任官してすぐ、戦争がはじまった」

戦争がはじまると、魔法の用途もそれ一色になる。綿々と続いてきた魔法研究は軍事利用へ指向をかたむけ、精霊の力が兵器、艦艇の増産へ注がれるようになる。いつの時代もそうだった。

大海のこちら側における純科学とそれは同じ。

「やられているうちは」

恐ろしく笑えない冗談とでもいう怖い顔になってうつむいた。「疑問も持たない」

重くて沈殿してしまう沈黙。それに困って、頭を振るセアン。気配をさとってサギ男が、眼を上げた。

「……はじめから？」

話がわずかに振り変わる。

「何のこと」

「知っていたんだろ」

「……あなたの着ていたつなぎは、天井裏に隠してあるわ。でも、しらばっくれていたのは私だけじゃないわよ。知らないふりを通したい私の無理な決め付けに乗っかっておいて、あなたは内心笑っていたじゃないの」

「生き字引はあざむけないな」

「名前までは読めなかったわよ。――でも、ねえ、あなたこそ、私のこと、セアン・スタチェットという名前、知っていたんじゃないの？」
ふと思いついて訊いたのだけれど、きょとんとした顔が返ってくる。
「そんなに君って有名人なのか」
「いいえ。いいえ今のは忘れてちょうだい」
馬鹿な思いつきだった。外遊先で出会った車椅子の少女のことを、いちいち憶えていられるほど王様にとって優雅な日程でもなかったはずで、もしかして息子に伝わっていたのじゃないかなどと一瞬でも想像した自分がおかしい。だけどそれは。
（だって馬鹿馬鹿しいくらいおかしな本当のことってあるものよ）
「浜辺に王子殿下が打ち上がるなんてことじたい、おかしな話よ」
ああ、と複雑そうに青年は小さく笑った。
「辺鄙な崖の上の家に住んでるクイーンだって充分おかしいよ」
呆れたように眉をしかめて、それから眼を細くしてセアンを見つめ、サギ男が身体を離す。セアンの両脚を床から持ち上げて寝台に伸ばした。
それだけし終えて、サギ男は部屋を出るため背を向けた。
「サギ男」
戸口で足を止めた彼は、振り返らない。
セアンが次の言葉を探してためらう間に、彼が声を出す。
「ここで名前をなくして、このままぜんぶ消してしまえればいいとも思った」
何を、という問いは、彼を深く抉るだろう。
すぐ前の過去、自分自身、まとわりつく戦争の陰。
すべてが、青年の心を苦しめている。
「置物の猫ならよかったのにな」
ほとんど抑揚のない声で言って、廊下へ消えた。
感情は海辺での絶叫の中に、夜毎の呻きの中に、擦り減ってしま

ったのだろうか。彼を叫ばせていたのは、罪の意識。彼の力がなした大火による殺戮への罪の意識と、仲間を死なせて生き残ってしまった呵責だと、セアンは推し量ることで知っている。理解しているけれど、セアン自身の経験ではないから、あまりにも残酷で遠い現実だから、彼の心が今どうなっているのかは何もわからない。何をわかればいいのかもわからない。わかってはいけないような気がする。

だから止められなかった。

引き留められなかった。

きっとこのまま、サギ男はこの家を出ていく。

あしたの朝には、もういないだろう。

力の暴走がスーを傷つけたこと、セアンからスーを一晩でも奪ったこと、北コロニア政府に見つかって拘束されるわけにはいかないこと、記憶喪失の名無しなサギ男ではいられなくなったこと。

たったの十分の出来事のため、一週間続いた三文芝居は幕引きになった。

白々しくても必要な芝居、だったのだ。政府とつながるスタチェットの名前は、厄介に巻き込まれるわけにはいかない。

（伯父様に迷惑がかかるもの）

そしていま出て行くというならそのほうがいい。そうセアンは思う。どうせ彼の抱える心はセアンにはわからない。それはきっと、わからなくていいのだ。セアンには関係のないことなのだから。

夜の静かさは相変わらずなのに、さっきよりずいぶん自分が落ち着いていることに気づいて、セアンは膝に手の感触を思い出した。スーがいない心細さに取り乱していたのを、なだめて持ち直させたのはサギ男の手と、眼だ。セアンがおかしくなっていたのを彼はちゃんと見抜いていた。自分でさえわからなかったのに。

置物の猫ならよかったのに――

枕元の寝間着を手に取りながら、セアンは独り、その言葉の意味を考えた。

ドンドンドンッ、と、乱暴に玄関を叩く音がする。
闇の中で瞼をあける。止む気配のない音にセアンは身震いして枕元の明かりを点けた。詰問するような訪問者の呼びかけがくぐもって届いていた。時計を見た。深夜のとばぐちといった時間だ。常識的な客ではない。
誰かが玄関に出る様子はなかった。
セアンも一人ではどうしようもない。
上体をなんとか起こして、ガウンを肩から羽織った。
まもなくテラス向きの硝子戸が割られて、複数の人間が家の中へ入ってくる。耳を澄ませずとも捉えられる音は家中へ散らばり、ひとつ、ふたつがセアンの寝室のほうへやってきた。
ノックのあと、返事を待たず扉がひらく。
「セアン、無事だったかい！」
「トニー？」
警官を従えて現われたトニー・シンクルーに驚きを投げつける。突然の警察沙汰には覚悟がととのっていたから動揺もしていないが、そこにトニーが混ざっているのは意外だった。
戸口から身を乗り出すトニーの表情は見たことのないほど厳しく真剣だった。彼がそういう顔付きを持っているとは想像できなかったくらいシリアスだった。
「どうしてあなたが」
「ミス・スタチェット、ここに身元不明の男が働いているとの情報を得ています。その男は、……どうか落ち着いて聞いていただきたいが、我が国に潜入していたヤーヘル軍人であるかもしれない可能性がある。男はどこでしょうか」
「潜入していた？」
「詳しいことは伏せるが、接触の痕跡をレーダーが探知したのです」

そしてその座標が付近の海岸だったというわけね、とセアンは察する。空を塗り替えたあのバリアは北コロニアの沿岸警備レーダーを撹乱するためのものだろうが、現時点で北コロニアはさらに上手の技術をもって、撹乱波を探知、解析、無効化することができるのだろう。それゆえ例の少佐の十分しかもたないという言だ。

「居間にはいなかったよ、セアン。逃げたんだ」

セアンはもの問う瞳をトニーへ向けなおした。

しかし口を開く前に、廊下をかけてくる足音が彼らを振り返らせる。

若年の警官が敬礼して報告。

「浜に足跡が。北上してつづいているようです」

「すぐに追え。じきに州からも応援が集まる。軍も来るだろう」

警察は最寄町の分署ではなく街から出動していて、警察犬も連れているようだ。崖の下から吠え声がしている。そういえばポイはどうしているだろうとふと思う。サギ男が出ていくときも吠えなかったようだし、この騒ぎにも反応していない。少なくとも声がしない。爪の音も。――まったく、番犬にならないではないか。

「トニー、どういうこと」

「……セアン」

レーダーが、侵入艦のおよその位置まで特定したとして、人間の姿まで見えるわけじゃないのだ。

捜索にきた街の警察が、どうしてまっすぐセアンの家に見当をつけられるのだ。どうしてトニーがそこにいるの？

「あなたが手を挙げたの？　『崖の上の家に怪しい男が住み着いてる』って？」

「セアン、僕は昼間、休憩時間にここへ来たんだよ。このまえ急いで引き取ったままだったから……」

「昼間？」

警官たちは戸口から消え、トニーは外を気にしながら、ためらいがちに寝室へ足を踏み入れた。

「ああ。玄関の前にきたとき、急に空がおかしくなって、それで空と海のよく見えるほうにまわった。潜水艦を見たんだ。彼ら、あの男の、邪悪な魔法もね」
「だからって、トニー、あなたはとても馬鹿なことをしたわよ。こんな事件が明日になって広まったら、スタチェットは疑惑の渦中に押し込まれて、家名に傷がつくどころか、がた落ちよ。スタチェットのためには、警察には黙っておいてくれたほうがよかったのよ！」
「知っていたんだね、やっぱり」
「知っていたけど、私は関係ないわ。関係ないままにしておいてほしかったわ。そのほうがあなたにとってだって、よほど有利だったと思うわよ。警察なんかに言わないで、私を脅せばよかったじゃない。バラされたくなかったら、指輪を受け取れってね。労せず億万長者になれたのに」
まくしたてたら、トニーの顔色が変わった。愕然と表情を固めて、立ち尽くす。手に持った帽子に大きく皺が寄った。
「それはどういう意味なのかな」
「あなたはスタチェットの財産を手にいれる未来を逃したってことよ」
トニーは口を開いては空気を噛み、言葉を喉に詰まらせたようになった。
ゆらゆらと、その場で重心が定まらないみたいに立つ位置を変える。首を右、左へ振っても、言葉が出てこなくて、詰まった胸を物理的にこぶしで叩いた。すると本当につかえたものが流れ出てくる。一気にトニーは喋った。
「セアン、君が騒ぎに巻き込まれることの心配は確かにしたよ。だから夜まで迷っていたんだ。でもそれは僕のためにじゃなかったし、そもそも――。いや、そんなことはどうでもいい、僕は世間的な騒ぎより、君が、君の身が心配で、通報することにしたんだ。一日だって邪悪な魔法使いかもしれない男とひとつ屋根の下にいさせたくなくてだ」

顔を赤く言い募るとトニーはくるりと背中を見せた。
そしてまた立ち尽くす。
セアンは顔を背けて黙っていた。トニーのそれは、とってつけた言い分に決まっていた。いいや、生まれついた気取り屋の性分が言わせる八方美人な取り繕いというべきか。とにかくトニーの聞こえいい言葉を、そのとおり受け取れるわけがなかった。だってセアンには、家名とそれについてくる財産を剥ぎ取ってしまえば何も残らない。不自由な脚と偏屈な性格をもった娘を嫁にして特になることなんて何もない。
「もういいから帰って、トニー。これ以上あなたの時間を無駄にすることはないわ。その意味では良かったと思ってね」
言い終わらないうちにどこかからすすり泣きが聞こえてきてセアンは首を巡らした。しゃくり上げ？　誰が泣いてるの？
きょろきょろしていると、急に動いたトニーが灯りの下に何かを置きにきた。戸口へとってかえすのに反転した一瞬、くしゃくしゃの横顔に涙の筋が見えた。
（……なぜ、トニーが泣くの？）
セアンは唖然とする。
よく聞き取れない声で暇（いとま）の挨拶らしきを残し、乱れた足音をたてて廊下を去っていくトニーに、不可解さを抱きながら、セアンはナイトテーブルを振り返る。置かれていたのは、小さな黒い革の箱――日曜日以来ふたたび目にした、求婚の小道具だった。

二―2

2

明くる朝。――けっきょく警察に踏み込まれる前から一睡もしなかったセアンにとってはやっと来た朝だったが、それだけはいつも飽きることも間違いもなく昇ってしかも今日は馬鹿みたいに晴れた空を背景にあらわれた太陽の下、崖の上の家の玄関に、同時に二人の人影が立った。一人はマクビーじいさんの迎えの馬車に連れ帰られたスー。もう一人は、昨日セアンの寝室の戸口に来た警官――街にある警察署の警邏隊長だった。

「男が捕まりました」

中年の警邏隊長は、痛々しく腕を吊った家政婦のスーに招き入れられて居間に立ち、しばらくたって支度してあらわれた家の主人を迎えて開口一番そう言った。

車椅子が隊長と向き合う。昨晩は失礼を、というように隊長は制帽をわずかに持ち上げた。車椅子に乗ってやっと客と会っていい程度の体裁がついたセアンは、片腕のスーにも抱えられるほど体重がない。

「現在州警察本部へ移送中ですが、すぐに中央へ送られるでしょう」

どこで、とセアンが訊く。どこまで彼は逃げられたのだろう。

「こちらから十キロほど北上した沿岸の林中です。さしたる抵抗はありませんでしたが、逃亡の途中でした」

隊長は簡潔に答えた。

「軍の対魔法部隊が出てきたのじゃない？」

「警察の専門人員で対処しています」

それは上からの指図だろう、と察する。

政府がことをなるべく荒立てない方策をとって、各位に指示しているのだ。それそのものはセアンのための動きではないが――

「隊長さん、以前に巡回の挨拶にきたことがありましたね」
「はい、二年前にいちど伺いました」
父や伯父たちは、セアンの田舎暮らしの安全を遠くから見守り、采配している。これまでうすうすセアンはそう感じてきていたし、今回のことも、セアンの名前が政府に届いた時点で父たちは、事件から崖の上の家の切り離しをはかり、セアンの生活を守ろうとしているだろう。崖の上の家から離れた場所で彼が捕まったのは幸いとされるだろう。もっとも、それはおそらく捕まった彼の意図したところでもあるのだった。
多分そのうち父が来て、セアンの判断を半分ほめ、もう半分、彼女が陥った難しい状況をすぐに連絡して知らせなかったことを、叱るだろう。
(私は、連絡しておくべきだったのかしら)
当初に迷い、今でも迷うその自問になぜ答えがないのか。
伯父たちに任せれば少なくとも北コロニアにとって悪いことにはならない。
では、秘密にしつづけることでセアンが守ろうとしたものはなんだったのだろう。
邪悪な魔法使いと呼ばれるヤーヘル人の男をかくまって……。
「お嬢様ぁ」
警邏隊長が報告と、あとで署長が簡単な聴取に訪れるむね伝えて帰ったあと、やっと緊張をといたスーが抱き着いてきて、泣き出した。
「ご無事でぇ、よかったぁ」
それは私のせりふじゃないのと呆れ、セアンはスーの肩を背中にまわした腕でたたく。浜辺での怪我から途切れた時間を今に繋げたように抱きしめられて、胸が苦しくなった。
「サギ男がぁ、サギ男がぁ、まさかでしたぁ」
裏切られた、というような、でも信じられない、というような声で、スーが泣いていた。スーを裏切っていたのは、セアンも青年と

同罪なのだ、本当は。
「スー、ねえスー、あなたに訊きたいことがあるの。サギ男を恨んでいる？　サギ男は悪い魔法使いだと思う？　彼は、邪悪だったのかしら」
「サギ男は、お嬢様、あの人は魔法使いですよ、あたしはこの目で見ましたし、そのせいで痛い災難にもあいました、なによりお嬢様を危険にさらして！　……でもお嬢様、サギ男は、こんなもん、マクビーじいさんに渡して、あたしによこしたんです」
　スーがよそ行きの上着のポケットから取り出した紙切れは、修繕や修理のとき設計図を書く用に彼が求めて与えられたノートの一頁で、折り目を開くと筆圧の強い大きめな字で、怪我させてしまったスーへの謝罪と一週間の世話への礼をつづってあった。
「汚い字ですよねぇ」
「ほんとね」
「でも、お嬢様、なんとなくなんですが、邪悪な魔法使いは、こんな汚い字は書かないんじゃないかと思うんですよ」
「それはまたどうしてなの」
「ですからぁなんとなく」
「きっと契約のイメージがそう思わせるのよ。精霊との契約がこう汚い字で交わされたら、どこか間違っていそうで成り立たないわよ」
「気取り屋トニーなんてお嬢様へのお手紙にいかにも邪悪そうな歯の浮く字を書いてきますけどね」
　トニーの名前はちょっとセアンの心を苦しくした。
　去りぎわの涙を思い出すと、よほど自分が邪悪に染まっているように思えた。
「私の人を見る目は当てにならないらしいのよ、だからスー、あなたに訊いたの。サギ男が私たちと同じ、普通の心をもった人間なら、ヤーヘルの人たちも大概はそうだということよ。ヤーヘルの人たちのほとんどは魔法使いでもあるのだけれど」
「だけんどお嬢様、潜水艦の奴らはなんだか怖かったですよ、あた

し」
「彼らは軍人だもの。戦時、敵地に侵入してきたのだからピリピリしてたのは仕方がないわ。純科学しか使わないコロニアの軍隊だって敵国から見れは同じようよ」
魔法圏を敵視しておそれるあまり南コロニアは対立を煽り戦争を始めた。南コロニア軍の先制攻撃がそののろしであり、魔法圏大陸沿岸部の軍港都市は長距離艦砲射撃によって灰燼に帰したという。
ヤーヘル軍の大火魔法はこの総力戦争において必然的に選択された戦法であり、初手に喫した非道な殺戮への報復だ。
魔法を使おうと、科学を使おうと、人を殺すのに、また殺されるのに、何がどう違うというのだ。
「でも、もう何がわかったってどうしようもないわね。彼は捕まってしまったし、それはもう私には手も足も出ないことだもの」
父や伯父に知らせなかったのは、今たどり着いた理屈が、言語をとらず心の中には住んでいたからだ。最初から青年がヤーヘル軍人であるとわかっていたけれど、だからと通報されるべき罪をセアンは青年に見なかった。北コロニアは非魔法圏の一員であるとはいえまだ参戦はしていないし、邪悪な魔法使いがフィクションであることを、セアンは大昔に対面したある人の姿と言葉に知っていた。
「手も足もといえば、スー、休まなくて大丈夫なの？」
「はあこんなかすり傷！　二十八のうらわかき体力にかかれば屁でもない。それよりお腹がすきましたよ、すぐ朝食にしましょうねぇ」
「簡単でいいわよ。……ポイの姿を見た？」
「いいえ、そういや、どこにもいませんねえ」
まさか外に締め出されたわけでもあるまい。
喉が渇けばそのうち出てくるだろう、としてまずは自分たちの日常を取り戻すことにした。鎧戸を、全部あけると割られた硝子戸から風が吹き込むため、半分しか日を入れられない部屋で、軽食をとった。
ゆっくりお茶を飲んでいると、がりがりと木を掻くような音が聞

こえてくる。二人ともに、眉根を寄せきって顔を見合わせた。
テラスに身体が向いているセアンが、鎧戸を払ってあるほうの硝子戸に覗いた毛むくじゃらを見て、あっと声を上げた。
「ポイったら！」
毛むくじゃらの体を砂だらけに汚した飼い犬が、セアンと目を合わせておとなしく座った。
スーにガラス戸をあけてもらい居間へ入ってきたポイ。が、数歩こそピンとしゃっきり四肢を伸ばしていたものの途中でぱたりと腹ばいにへなってしまう。
あわてて水の皿を前に置いてやるスー。
「あんれぇ、どこまで行ってたんだかぁ」
スーが目を丸くするほどがむしゃらにポイは水に取り付き、飲んだ。
「サギ男を追いかけていったの？」
ずいぶん懐いて、というか、興味を持っていたようだったから、と、わかるはずもない犬の心を想像して言ってみるセアン。
するとポイが皿から鼻面を上げ、あくびする——

「いかにも」

大音声が居間の調度という調度を震わせた。
「ひゃあ〜」
耳をふさぐセアンとスー。
「なに、なんなの……？　今——」
押さえた両手で耳のほうに目尻が吊り上がった目を、セアンはまさかと思いつつポイへ下ろす。
「……しゃべったの？」
「いかにも」
ふたたびのあくびが言葉を吐き出す。声質を聞き取れないほど音が大きい。耳が潰れそうだった。

「っ、どういうこと、おまえ……ポイじゃないでしょう？」
「おうじについてるだいもーんです」
紅茶椀がかたかた言って琥珀色が暴れる。
「なんですって。精霊（ダイモーン）？」
「だいもーんなのです」
遠くで造花の花瓶もがたがた揺れた。もうちょっと音量を下げてくれるかしらとセアンが頼む。すると言われた通りポイのあくびが小さい幅のものになる。
「もうしわけありません。だいもーんです」
「ダイモーンはわかったから」
「おわかりいただきました。だいもーんです」
「名前はないの？」
ポイの身体で胸を張る。
「だいもーんです」
「もういいわ……」
毒気を抜かれたようなスーの仰天顔をちらと見、犬の身体に視線を戻して、セアンは車椅子を近づけた。
「ダイモーンさん、いつからそこにいたのかしら」
「だいもーんはさくじつのゆうがたからかれしのなかにいます」
「昨日の夕方……」
「だいもーんはかれしからごきょうみをいただいておりましたので」
彼氏とはポイのことであるらしい。
なんだかその彼氏に拾って食われたような言い方だと思った。
「昨日の昼まではサリアック王子の中にいたのね？」
「もちろんだいもーんはおうじのなかにいました」
それがどうして――。
「だいもーんにもわからない。おうじはだいもーんのちからをつかいました。だいもーんははりきりました。だいもーんはふしぎとさむくなって、あつくなって、せかいがみえなくなりました。きがつくとだいもーんはすなのうえにおちていたのです」

やっぱり拾い食いされたのね、とセアンは目を細める。
「ポイの失礼はあとで叱っておくから。ダイモーンさん、理由がわからないってことは、剥がれてしまうとき、サリアック王子はあなたに何か言ったりしなかったの？」
ポイがポイらしく無心に、耳の裏を後ろ足でのんびり掻いた。
「おはずかしいことですが」
同居している犬の仕草とシンクロしたような言葉がでてくる。
「さいきんはおうじとこころをかよわすことがむずかしいのです」
ふいとポイが腰を上げて立ち上がった。身を乗り出すように。
「むかしはそんなことはありませんでした。だいもーんはおうじとなかよしでした。とてもなかよしでした」
芸として歌うたう犬みたいに首を上下に振って、犬の声でも人の声でもないその音は喉の奥から絞り出される。
「でもこのごろは、おうじはだいもーんがはなしかけてもなにもいってくれなくなったのです」
「その時期は、大火の魔法と関係がある……？」
「ええちょうど、そのころです、みすとれす」
「海に投げ出されたサリアック王子を助けたのはあなた？」
「ええみすとれす、だいもーんがしにものぐるいでやりました。うみのけんぞくはきむずかしいところがあるのですが、だからほんとにもうだいもーんはしにものぐるいでやりました」
「それはおつかれさまだったわ」
おそらく礼も言ってもらえなかっただろうダイモーン氏を今更だが労う。「そういう契約なのでしょうけど……」
「けいやくとは？」
ポイの首を曲げて疑問を向けてきたので、セアンが今度は首をかしげる。
「ダイモーンと人間は契約で結ばれているのでしょう？」
「いいえだいもーんとにんげんはなかよし。だいもーんとおうじはなかよしこよしです」

首をかしげたままセアンは考えに沈んだ。
（契約じゃない……？）
「みすとれす、おねがいがあるのです」
「なにかしら」
「だいもーんはおうじのところにいかなければなりません。おうじはつれていかれてしまった。おうじはどこにいるのでしょう。だいもーんは、だいもーんは――」
その訴えに、ポイの声できゅうきゅうと哀しげな音が重なった。とりついたダイモーンに宿主がひきずられているのだ。
「元に戻りたいのね、でも――」
自ら剥がしたか、自然に剥がれ落ちてしまったのか、どういうものかは知らないが、原因がサリアック王子の心にあるだろうことは間違いない。そして一旦離れたものを、再度受け入れられる精神状態に今の彼があるとも思いにくい。
「昨日のことをおぼえているでしょう？　あなたがさむくなったりあつくなったり世界が見えなくなっていたとき、力は暴走していたの。サリアック王子の心の混乱のせいだと思うわ。あなたが剥がれ落ちてしまったのもそのせいなのじゃないかしら。彼はあなたの力を使うことを、とてもいやがってる。あの暴走のあとではもっと、こわがってる」
「だいもーんはおうじにあわなければ。だいもーんはおうじにあいたい」
つぶらな犬の瞳。痛切な言葉の響き。
「つれていってください」
「無理よ、だって私……だいいち、会おうとしても会えないわ、彼は特殊な立場で政府に捕まったのだから」
とっさに否定しか出てこない。ポイのみならず話している自分まで引きずられそうになりながら、だからこそ抵抗してセアンは首を振っている。同情はするが、セアンには何の力もない。
きゅーんとポイが鳴いた。ポイに責められているのか、ダイモー

ンに乞われているのか、見極めがつかなかった。両方かもしれない。
「……お嬢様ぁ。サギ男はどうなっちまうんでしょう」
傍らに膝ついてポイの哀れそうな頭を撫でながら、スーが不安そうに訊く。
「南コロニアに引き渡されると思うわ。要請があれば断れない。何より、王子の身柄を人質にすれば南コロニアは優位な講和に持ち込めるかもしれない。捕虜を人質にするのは違法だけれど、この戦争はもうなりふりかまっていられないものになってきているから、水面下に交渉されるでしょうね。そうなれば、うまくいけば北コロニアは参戦せずに済むのよ。伯父様の選択肢は一つよ」
王子を迎えにきた少佐はそのことを言っていたのだろう。
それでもサリアック王子は、あの艦に乗って故国へ凱旋しようとしなかった。
英雄になどなれなかったのだ。
「あの人は、あのとき帰るべきだったわ」
英雄になることを拒んだ彼は、祖国にとっても非魔法圏にとっても、大罪人となるしかない。彼の選択肢は二択だ。
セアンは膝にひらかれてある謝罪の手紙、その汚い字を見つめる。
「英雄なんかじゃないけれど、罪人でなんかないのに」
拒めない人生を生きていただけなのだ。国と国民を守ることも、そのために他国と他国民を殺戮することも。
彼の望みではなかった。
ダイモーンが、ポイの中でわんわんと泣き出した。たがのはずれた大音声に部屋中がゆれはじめて、隅の飾りテーブルの上で花瓶が倒れ、床に造花をぶちまける。その上から、テーブルを転がった花瓶が落ちて、簡単に割れ散った。白磁の肌の正面を優雅に彩っていた、湖の辺で午睡する貴婦人の絵も無残に砕けてしまった。
――置物の猫ならよかったのに
大火に焼かれた家家の窓辺に、海を眺めて微睡んでいただろう少女や、その家の人たちが。

そういう意味だ。
フィクションならいいのに、と言ったのだ。
でも違う。大火の炎は、現実に起きた。サリアック王子の、恵まれた力によって。現実の、生身を焼いた悲劇だ。
本当の現実が辛すぎて、とても向き合っていられないから望まれるフィクションなどとは、なんて残酷な夢なんだろう。
現実に起こした罪に耐えられなくて彼は、自分の本当の力さえ、封じてしまった。
「逃げてる、だけよ……。自分の現実から、自尊心から、逃げてるだけよ」
五年前のセアンはそうだった。
「人にはあんなにデリカシーのないお節介を言っていて、自分は何なの」
知らず車椅子の肘を強く掴んでいる。
「辛くたって、罪を塗り重ねたって、望まれているなら英雄になってみせればよかったじゃないの！」
英雄だってフィクションだ。女王もフィクション。魔法は現実。そしてセアンの不自由さも――
嘘からも本当からも逃げた人間は、本の黴よりも死んでいる。
「あたしゃ言ってやりたいことがあるんですよ、お嬢様。そのサイン、ごらんになってください。フラウドマン、なんて、人に謝るときくらい本名を名乗るべきです」
小さな目を三白眼にして、スー。「馬鹿にしてるったらありゃしない、まったく！」
「そうね、言ってやりたいことは私にもあるわ。一言言ってやるだけなら、出来ないこともないわよ」
するとポイとスーが一瞬目を合わせた気がしたのは、どういうことだろう。
しかし何よりも、勢いのままぽろりと零れた自分の言葉に目を剥いた。

「うちのお嬢様はね、この国に影響力をおもちなんだから」
「そ、そこまでじゃないわよスー。伯父様は家族の前では冗談しか言わない人なんだから……」
「あんたは見る目がありますよダイモーンさん。あたしのお嬢様におまかせすればだいたいのことは間違いありません。だから泣くのはおやめなさいよ」
ぴた、と大音声がやみ、見上げる犬の目がめいっぱいひらかれて潤みだす。
「だいもーんは」
「わかったわよ」
ぱっ、とポイが飛び上がってはあはあ息を荒くしはじめる。
「首都に行くわ。行って、ざまを見ろと言っやるの。でもそれが私の目的じゃないわよ。伯父様に直接つたえなければいけないことが出来たから、だからよ」
お父様にわざわざいらしていただくのも悪いし、――理由をいくつも付け足して、さも必要のあることだという体裁をつける。スーはセアンの気が変わるのを恐れてかさっそく切符の手配をしに立ち上がった。なんだか怪我人とは思えないほど浮き立って見えるのは何故だろう。スーったら、首都に帰れるのがそんなに嬉しいのかしら。一応スーだって首都の暮らしが長くて慣れている人ではあるのだし……。そんなことを考えてセアンは色々な思いをごまかした。

二―3

3

汽車に乗って大陸を端から端まで横断したところに、セアンが生まれ育った北コロニアの首都、トーンソンはある。

プシャー、プシャー、とブレーキを引いて減速した汽車の一等客室で、籠の中から小さなむく毛の頭がぴょこんと飛び出した。

「おうじはどこですか」

朝食の時から乗り移っていた車椅子の上で降りる身支度をしながら、少々呆れ顔でセアンが答える。

「まだよ。まだ駅についたばかりじゃないの」

「あいすみません。なにしろこちらではみぎもひだりもまえもうしろもわからないもので。ぜんぜんけんぞくのこえがしなくて」

「眷属？　精霊のこと？」

なにしろ魔法のことはセアンもよく知らない。純粋な興味から首をひねった。

「だいもーんはひのなかてつのなかからよばれましたもので」

「レミアック王に？」

「さりあっくおうじにです。だいもーんはおうじがうまれてはじめてないたときからおうじのなかにいます」

「おぎゃーと？　それが普通なの？」

「いいえ、やーへるおうけのみなさんは、とくにだいもーんとなかよしになれやすいのです。いちばんふるくからのおともだちですから」

「呼ばれて、取り付くの？　どうして？　どうやって？」

崖の上の家からずっとダイモーンはしくしく泣いたり焦ったりを繰り返すばかりでまともな会話ができなかった。そりゃあ、二十年もずっと一心同体でいた相手の中から落っこちてしまったのだから、

心もとなさといったら、人間ならすぐ心に風邪を引いてしまうくらいのものなのだろう。
　二日、三日と現状に慣れていくにつれ、そして旅の道程が進むにつれ、やっと落ち着いた説明ができるまでに理性を取り戻しつつあるということだろう。ダイモーンに理性や本能があるかはともかく。
「火と鉄の中からというけど、火と鉄は別々のものじゃないの？」
「だいもーんは、ひとてつそのものではありませんが、ひとてつのことをよくしっています」
「あなたとサリアック王子の関係と同じように？」
「そうなのです。でも、ちがいます。ひとてつのなかにいたとき、だいもーんは、だいもーんではありませんでした。おおきなねむれるだいもーん、でした」
「どういうこと？」
　首をまたひねったセアンを見上げ、ポイも「きゅーん」と声を出しながら首ひねる。
「おうじはうみをみて、だいもーんとおなじだ、といいました。だいもーんをみずのいってき、おおきなねむれるだいもーんはうみ、といっていました」
「つまり、未分化なかたまりだったのかしら。そこから分離した、ということ」
「おうじによばれて、だいもーんは、だいもーんになったのです」
　誇らしそうにもたげた頭が籠の蓋をもちあげた。
「はじめて、いしき、をもったのです」
　ポイは客室の壁を見渡し、とくに窓、車体の外側に注意を向けるようにして、つぶやいた。
「かれらは、まだ、ねむっている」
　止まった汽車から降りるとき、一等客のセアンに車掌と駅員が優しい笑顔を向け、三人がかりで車椅子を抱え降ろした。
　帽子を取って見送ってくれた彼らの親しみが、貧乏なセアンにもわけあたえられていてほしいと思う。

「めざめぬけんぞくよ、さようなら」
スーが蓋を抑えている籠から、挨拶がこっそり聞こえた。
それじたい観光名所である透かし彫り模様の美しい硝子ドームを屋根として六線が横たわる首都中央駅構内は乗降客でごったがえし、静かな海辺の生活に慣れた感覚を圧迫する。ホームにはすでに迎えの者が来ていて、人垣で前が見えないセアンの車椅子はほとんど自動的に駅の外へ押し出された。家の車に乗り込むと、そう遠くない過去の日常を思い出す。チャリティークイーンのドレスをとっかえひっかえまとってパーティからパーティへ、引っ張りまわされていたあの頃。
これからしようとしていることも大して変わらない気がして鼻にしわ寄せる。また自分の悪い癖が復活しかけているのだとしたら？
「ダイモーンは、人に使われて嫌じゃないの？」
籠の蓋の上に手をかぶせ、セアンは訊いてみる。
「とんでもない。だいもーんは、だいもーんでありたいのです」
なんだか哲学的な答えだわ、とセアンは思った。
車は『甘い蜜の丘』と呼ばれる地区へまっすぐ向かった。閑静な住宅地に邸宅が並ぶ懐かしい実家への道路を、待ち受ける大人たちへの説明の練り込みに半分心をついやしながら眺める。冬近くなり葉を真っ赤に染めた街路樹は、北コロニアの国樹で、春先に採れる香り高い甘い蜜が東部の名産となっている。
小さいころこっそりバケツをくくり付けさせ蜜を溜めて楽しんだ樹々は、今見ると整然としてどこかよそよそしい風情で立っていた。
『セアン、いつでも帰りたくなったら、意地なんて捨てて帰ってくるんだよ。父さんも母さんも、明日か、明後日かと心待ちにして待っているから』
プライドをこじらせて遁走を決めた娘を、見送る朝に、父はそう言ってセアンを抱きしめた。母も。母は着いていきたいと泣いていたけれど、政府高官夫人の役目を放棄するわけにはいかなくて、セアンだって、母に迷惑をかけたいわけじゃなかった。それこそ寄宿

舎に入るのと同じだと思ってほしかった。
　セアンは帰ってきたのではない。でも、父と母がいて自分が生まれ育った屋敷は、たぶん二度は振り切って出ていけないだろう場所だからこそ、戻ってきにくい気持ちがあって、どんな顔をして玄関に入ればいいやら。
「スー、あなたにまかせたわ」
「はあ、なんでございましょう、お嬢様？」
　きょとん、としたスーの背中を押して扉の前に立たせたら、意図せず途端に両開きの扉がひらいて人が飛び出てきた。
「やあセアン！　やあセアンおかえり！　なんだセアン、一年も見ないうちに背が伸びたね！」
　白髪の男性が飛びつくようにスーを抱きすくめて叫ぶ。抱きすくめられたスーが目を白黒させる間に、上体をそらし、男性はまじまじとスーの顔を見つめて言った。
「顔もちょっと老けたんじゃないのかな？」
「伯父様、それはスーザンよ」
「ああ、失敬。なんて失礼を、許してくれスーザン」
「ひゃあ、大統領に抱き着かれるなんざ、末代までの誇りにさせていただきますよ」
「その前に結婚しないと誇ってくれる子孫がつづかないぞ、スーザン。もっともこれは君の雇い主が悪いんだがね」
「私のことなの、伯父様？」
「もちろん。できた家政婦を道連れに隠居乙女をきどるセアンお嬢様のことに決まっているよ」
　ひょろりと背の高い白髪の紳士、レイモン・フランド伯父は、ハの字に生やした髭をつまみ撫でながらにっこり笑んで、セアンの上に身をかがめ、頭にキスした。
「義兄さん、親より先にただいまを受けるとはなにごとでしょうか」
　玄関に片腕預けてよりかかっている父と、隣で涙をためている母が伯父の肩越しに見えた。

「おかえり、セアン」
「セアンちゃん……！」
頭を撫でる父と、両手を握る母。交互に仰ぎ、うなずきつつ、セアンはただいまが言えない。
（だって……）
「思ったよりずいぶん大きな土産をもって帰ってきたね、セアン。電報をもらう前はすぐ海の家に向かおうとしてたんだが――」
「叱りにいらっしゃろうとしてたんでしょう？　でも、そのことは、ちゃんとくわしく事情をお話ししないと」
玄関ホールへ入りながらセアンは早口に言い募ろうとしたが、伯父はたいして面識もないスーを相手にあることないこと冗談をとばしてからかっているし、父はにやにやとものわかったような皮肉げなような笑顔を見せるばかり。
セアンは、自分の性格が少なくとも半分父譲りであることを知っているから、言いそうなことはわかっていた。
「もちろん事情はすぐに聞く。でもねセアン、お前へのペナルティはもう決まっているんだよ。家族に隠し事をして年頃の男との危険な同居を敢行していた罰として――」
「ちょっと、お父様！」
赤くなってセアンは腕を振った。年頃の男？！　なに、それ？！
「問答無用、罰として――」
「『ただいまパパママ、私そろそろ観念して帰ってきたわ』と、言いなさい――そうおっしゃるんでしょう？」
「その通りだ、セアン」
なまってないね。という顔で、父が微笑む。
――うきゃん！
寄ってくる靴音とともに、凄絶な悲鳴が玄関ホールに響いた。
「大統領、魔法です」
レイモン伯父を取り囲んだ警護の男たちが、手にした機械の箱を全方位にさまよわせて発生源を探す。箱の先に付いたアンテナは、

ある種の電波を送受信している。魔法を封じるコード文を発信し、同時に封印反応を探知することができる機械だ。
　セアンはスーの提げる籠の蓋を開けた。中でポイが横倒しに倒れて動けないでいた。目玉と鼻先とむく毛がふるふると震えている。
「やめてください、私の飼い犬が金縛りにあってこわがっています。ポイの中に精霊が捕まっているんです。害はありません。私が何もされなかったもの」
「大統領とは違う――」
　警護の言葉を制して、フランド大統領が籠の中を覗いた。
「ダイモーンを食して収めるとはゲテモノ食いだな」
　哀れそうに見つめ、警護に指図して電波の発信をやめさせた。
「……っはあ、っはあ、だいもーんは、だいもーんは、みちなかばでおわるわけには……おうじにあうまでは……」
「なんだか悲愴だな」
「悲愴にもなります。ダイモーンとは、とりついた人間と一心同体に在るものだそうです。このダイモーンは、サリアック王子を友達と……『なかよしこよし』と言いました」
　フランド大統領は白い眉を持ち上げ、籠の中身を指さしながらセアンに向いてたずねた。
「このゲテモノくんは、サリアック王子のダイモーン？」
「そうです。今はどういうわけか離れ離れになってしまっているのですが」
　思案げな表情を宙にとどめる大統領。
「そうなのか。何故だろう。彼は被虐趣味のヘンタイさんか」
「伯父様……？」
「わかった、まあいい、とにかくセアン、洗いざらい話してもらおうじゃないか。君がいったいどんな過程をたどってヘンタイくんといい仲になっていったのか。もしくは最初から君の好みのタイプはヘンタイさんだったのか」
「伯父様っ？！」

訳のわからない言い掛かりに声を上ずらせたセアンの視界で、セアンもその性格を少しは継いでいる生真面目な母が、兄の暴走をなんとかしろと言いたげ、皮肉な笑みをたやさぬ父の腕をつねっていた。

二―4

4

どこまでもつづくような長い、長い、暗い廊下――。
塵の落ちる音ひとつなく、装飾も、荷物も皆無の空間に、車輪の擦れと靴音だけ、響いて、吸い込まれていく。果てのつかめぬ迷宮みたいな地下牢は、たった一人を閉じ込めておくには贅沢だ、と思う。
「こちらです」
国防省の偉い人が車椅子を一つの牢の前で止めた。
だいぶ目は暗さになれていた筈なのに、もっと暗い闇が鉄柵の奥によどんでいた。
「くれぐれもお気をつけを」
「何に気をつけたらいいのかわからないわ」
蓋を押さえた籠の中に、職員の言う魔法の元はすでに抱えられているのに。
「囚人は魔法使いです。ミス・スタチェット」
役人はわかりきったことを言う。
「この籠、持っていてくださいますか。ぜったいに蓋を開けないで。何か聞こえても無視してね」
「かしこまりました」
さて、牢の奥にいる筈の悪人は、話し声にまったく何の反応も見せず、ぜんぜん影と一体化したまま、聞こえない振りなのか、感じる心をなくしたのか、無視無言を決め込んでいる。
眠っているのかもしれない。
――そうかしら。
「この、嘘つき」
眠れるわけないじゃない。いちども、深くなんて眠っていなかっ

たじゃない。
「嘘つき、詐欺師、だましたわね」
闇がひくりと動いた、気がした。
「また笑っているんでしょう。でも今のは本当のことよ」
セアンの目が慣れてきたのだろう、奥の壁にもたれてうずくまる影のかたまりが、輪郭を取って浮かび上がってくる。
膝を抱えている。うなだれて。
「あなたには迷惑ばっかりかけられてるわ」
もぞりと首を、もたげた。
「なんて顔してるのよ」
思わず声を震わせる。車椅子でなかったら、あとずさっていたかもしれない。
その顔には、余白なく幾何学に廻る緻密な文字列が描かれている。青いインクが蛇のうろこのように這いまわっていた。顔だけではなく、耳にも、首筋にも、膝を抱える腕にも、手にも、一面に刻まれた、魔法封じのコード。手紙を書く普通のものと同じ細さのペン先で、全身の肌の上をなぞられたら、充分に拷問だ。大統領の冗談の意味がわかった。
その特殊なインクには帯電物質が混ぜられていて、設置機械から放出されている電磁波に反応して魔法の発動を阻害する。
対魔法コードとは、魔法発動時に発せられる微弱波を解析し、そこに言語に近い音形パターンがあることを発見した対魔法技術研究者によって開発された、魔法妨害技術だ。南コロニア軍では実戦にも投入されて効果を証明している非魔法圏の武器だ。
「罪人だから、しょうがない」
ぼそりと、長い時間くちを開いていなくてもつれたような声で、言った。
「これが本当だ。やっといるべき場所に来れた」
「つじつまがあうからどうだっていうのよ。くだらない自己満足で、あなたの仲間を裏切るの」

コードに蹂躙されたサリアック王子の顔が痛みを走らせた。
耐えられないようにうつむいてしまう。
「『南コロニアに引き渡すなら北コロニアで処刑してくれ』、と言っているそうね」
「戦争のとりひきに使われたくない……」
「いまさら言ったって無理よ。あなたを差し出すか、一日も早く参戦するかしか北コロニアの道はないの」
冷たくセアンは言った。
「人を大勢殺したことがあなたの罪ではない。最後までフィクションを請け負わなかったこと、本当の自分を捨てて逃げたことが罪なのよ」
眼を閉じて、セアンは王子と同じようにうつむいた
「そしてそれは、私だって犯している罪よ」
セアンは職員から籠を受け取り、ポイの身体を床に降ろした。
きゅーん、きゅーん、と鉄柵にすりよるポイを、サリアック王子は無感情に眺めていた。
「あなたの中に帰りたがってる」
二百年前大きな眠れるダイモーンのかたまりと最初の契約を交わしたレミアック王の血筋の王子には、ダイモーンの思惟を聞くために言葉を介す必要はない。
「……俺は、おまえにも、ひどいことをしたんだ、だからもう、一緒にはなれない」
かりかりと鉄柵を掻いていたポイの手が止まる。
きゅーん。ひときわ高く、切なげに、ポイが鳴いた。
「いちど手を染めたなら最後までやりとげて、早く戦争を終わらせてよ」
ポイにコードは描かれていない。ポイの中のダイモーンは王子の命令ならば、力を発揮できるだろう。ダイモーンは宿主の命令にしか従わないという。ポイは人間より意志の希薄な、犬だから、ダイモーンの正式な宿主にはなれない。

牢の奥から返事はなかった。手首の鎖が鳴って、頭を抱える両手が表情を隠す。
もうなにも聞きたくない、という態度だ。
セアンは詰めていた息を、吐き出した。
「帰るわよ、ポイ。約束は果たしたから」
「だいもーんは、おうじと――！」
ぎょっとした職員が辺りを見回す。まさか犬がしゃべったとは思いもしない様子で、怪訝そうな目をセアンによこした。
「魔法ですわ。可哀想な精霊の声です。こわがっても信じないのが人間です。もういいです。戻ってください。犬を籠にお願いします」
セアンは地下牢をあとにした。
地上階の会議室で待っていた大統領と父は、セアンがした質問に、つい三十分前と同様に不可能と答えた。
サリアック王子の存在は三日以内に南コロニアに伝えられる。三日以上は延ばせないし、引き渡さない選択肢も大統領は民意に従い国民の生命財産を守る立場上、選ばない、と。

「ごめんね、ダイモーンさん」
おしゃぶりの取れたころから使っていた寝室のベッドの中で、ポイを抱えてセアンは泣いた。
「だけどもう、私にできることはないし」
周囲から持ち上げられて役目に忙殺されるのも困るが、できることがない、というのも辛いなと、初めて思った。
サリアック王子は早晩南コロニアに引き渡され、水面下交渉にてヤーヘルが停戦に応じなければ、彼は戦時法違反の虐殺をおこなった指揮者として死刑になるであろう。
もしヤーヘルが王子の身柄を優先すれば、魔法連合は内部から混乱するおそれもある。ヤーヘル一国が停戦を選んでも、残る国々は

納得しない。戦争は双方に消耗を強いながらつづくだろう。だが大国ヤーヘルを欠いた魔法連合に対し、そのとき確実に南コロニアは優位に立っている。
「どうして戦争なんて始めたの。お互い好きになれないなら放っておけばいいじゃないの」
八方ふさがりで、なかば憤慨ぎみにつぶやくセアン。
セアンこそ、自分には関係ないと思っていた戦争のことを、今はどんなことより腹を立てて考えていた。
――人と人は、助け合って生きてくものだよ
そう言ったのはサリアック王子だ。
大海のこちら側が恐れる、神に背いた悪い悪い魔法使いの。
『それこそ魔法でも使わないと、対立は終わらないね』
大統領はそんなことを言っていた。
「喧嘩を止める魔法ってないの？」
ダイモーンに訊いてみるが、……返事がない。
「……どうしたの？」
心持ち、ポイが白目を剥いているように見える。
「どうかしたの？　ポイっ？！」
「あっ、あああ、やめてください……わかった、わかった、わかった、しょ、しょーうちいたしま」
承知致しました？
何を。
誰に言っているのか――。
暴れようとしていた犬の四肢を抑え込んだのはダイモーンらしかった。
「せ、せあんさん、け、けんかをとめるほうほうなら、だいもーんはちょっとくわしい。なにしろおうじはほうっておくとけんかばかりで」
焦ったように早口でまくしたてるダイモーン。
「どういうの？」

「はなしあいです」
「話し合いですって。ぜんぜん魔法じゃないじゃない。古典的」
「ちょくせつ、へいかとおはなししたらどうでしょうか」
「シンアック国王と？」
何を言い出すのだろう、と眉間をひそめる。
「はい、せあんさんとへいかのたいまんで」
「どうやってよ。海の気難しい精霊を頑張ってなだめすかして連れてってくれるの？」
考えただけでセアンは背筋を震わせた。
「むりむりむりむり無理よ！」
「いえ、みずとき、ひかりとかぜ、ひとてつ、あわせてだいもーんさんきょうだいが、ちからをあわせてせあんさんのからだをむこうにおくります」
頭が混乱するとはこのことで、セアンには全く意味がわからない。
「みっつのげんそでにんげんのからだはできています。それすなわち、みずとき、ひかりとかぜ、ひとてつ、なのです。こちらのせあんさんはきえますが、あちらにしゅつげんできます」
水と木？　光と風？　そして火と鉄。
精霊の言うそれらは、人間の言葉で意味するところのそれらとは、重なりもし、重ならないものでもあるらしかった。
「だって、あなたは今、力を使えないでしょ？」
逃げを打つ気持ちでセアンは確かめる。
（いったん消えて、出現するなんて、そんなこと！）
「だいもーんは、かれしにいわされているんです。かれしはせあんさんをたすけたいとおもっていらっしゃいます」
「ポイに？」
寝たままセアンはポイの身体を顔の前にもちあげ、まじまじと見た。しょぼしょぼと、毛のかぶさる目が見つめ返してくる。
「ポイがあなたの使い手になったの？」
「つかいてとしてはふかんぜんですが、だいもーんはやりてですの

で」
　さりげなく自慢を混ぜてこたえるダイモーン。
「でもこればっかりは、たいかのまほうよりもちからがいるので、だいもーんはへとへとになります」
　帰って来られなくなるってことじゃないの、と訊こうとした瞬間、目の前が淡く黄色に光りだしたことに気づく。そのふわりとした光りは瞬きするあいだにひろがって、セアンの全身を包んだ。
「それでもだいもーんは、がんばりますっ。おうじのために！」
　ちょっと――。
　止める間もなく、声がベッドの上に響かない。
　ぱっと光が弾けたあと、視界は黒く塗りつぶされる。
　落ちる感覚がして身体をすくめた。じっさいどこかの固い床にセアンは膝から落ちて、着地してみればぺたんとした格好ですわっていた。
　その場所は、セアンのいた寝室と同じくらいの薄闇だった。
　ひっそりと静まり、空気の動きがない、屋内。
（夜――）
　もしここが、本当にヤーヘルのどこかなら、時差を考えて、もうすこしで夜明け近い夜中のはずだ。セアンの寝室の時計はまだベッドに入るには少し早い時間だったから。
　廊下みたいに冷たくだだひろい感じがして、つまりここには朝になるまで誰も人が通らない気がする。動けないセアンはずっと座ったままで、寝間着姿で、どうしたらいいだろうと途方に暮れた。
「ダイモーンさん？　ポイ？　いる？」
　いないようだ。……ひとりぼっちでほうり出すなんて、酷いではないか。頼んでもいないのに。
　ふいに、空間の奥が揺れた。動いて初めて、そこに帳が降りていると知れた。濃紺の厚い帳で、豪奢な金の刺繍が上下を縁取っている。
　その内側がほの明るくなり、やがて持ち上がる帳の裾。

中から人が、ガウンの裾を引きずって出てきた。
空間を見通すようにその人はこちらを窺う。
間髪いれずに歩いてきた。柔らかく光沢を見せる絹の室内ばきは音を立てない。
「国王陛下でいらっしゃいますか」
慌ててセアンは口を開いた。侵入者扱いで即刻丸焼きにされてしまってはかなわない。
セアンの周りに、鬼火というのだろうか、床から直接はえているような小さな炎がいくつも灯った。
「いったいぜんたい君は誰かね」
目の前に、首をかしげて威厳ある長身の中年男性が立った。プラチナブロンドと知的な目許に見覚えのある、間違いない、シンアック国王だ。
「精霊が、メッセンジャーだと言っているが」
「はい、陛下。まず、夜分に陛下の御在所へ侵入しました無礼をひらにお許しください。無様な姿でお目にかかり、申し訳ありません。私は……」
すとんと膝がつかれて、シンアック王の目線が近づいた。
少し引いたところから見るように上体をかしがせて、セアンの座り方を見分した。
「君は足が不自由なのだね」
「はい、生まれつき……」
「非魔法圏から送られてきたのだね」
「セアン・スタチェットと申します、陛下。サリアック王子のことで、参りました」
国王は精霊の示唆から、この魔法がサリアック王子のダイモーンの仕業であることを知っていたようで、それには反応しなかったが、むしろスタチェットの名前に目をやや開いた。
「北コロニアのスタチェット家に関わりがあるかね」
大統領を輩出したこともある政治家一族である名門スタチェット

家の名前は、外交に携わる者にはこうも通りやすいのだ。
セアンは神妙にうなずいて、答えた。
「私は、国王陛下に以前お会いしたことがあります」
言い終わるか、言い終わらないかのうちに、シンアック王は腕を伸ばしてちょっと待った、の仕草をした。
眉根に皺して瞑目し、小刻み頷いた。
「待った、君は……」
開いた目と、示す指先で、
「その金色の髪、澄んだ瞳の色、誇り高そうな声、だ」
確認していった。
「そうだ、君は、チャリティクイーン？」
セアンはほっと出た笑みを照れ臭く殺して、こくりうなずいた。
「はい、陛下。そう呼ばれていたことがあります。今はもう引退しましたが……。憶えていていただけたのですか」
「いや」
シンアック王は、なぜだか深刻そうな顔をして首を振る。
「憶えていたのは、私の失態のことなのだ。あのとき、私は、君に酷いことを言った。君の脚のことで。パーティのあと部屋に引き取ってから思い返せばしまったと気づいて、以来思い出しては自己嫌悪にさいなまれるというような、そういう憶えかたで君のことは忘れ難くて。もちろん、役割柄、人の顔を忘れないというのもあるがね。しかし君はすっかり大人だね」
過ぎ去った時を数えるようにまばたき、溜息を置いた。
「いまさら遅いのは承知なのだが、許してくれるだろうか、あのとき私は、無用なことを言ってしまった」
セアンはやはりこれも頷いた。
無用なことだったのは本当だからだ。
「たしかに凍りついたあの場の雰囲気を鮮明に思い出せますもの。ですが、ヤーヘルでは精霊が人の身体を支える、それが当たり前のことなのでしょう？　陛下は嘘をつかずに本当のことをおっしゃっ

たのです。大海の向こうにいるのが、嘘つきな悪い魔法使いではないと幼い私の心に教えたのは、陛下でした」
　変わらぬ優しい瞳を細めて、シンアック王がそれを聞いていた。
「ですから、だから、私はあの日、敵対国の部隊章をつけて倒れていたあの人を、拾って、家に連れ入れたんだと思います」
「サリアックを助けてくれたのは君か」
「助けたのかどうか。もっと早くほうり出して、逃げてもらうべきだったのかもしれません。サリアック王子は、北コロニア政府に収容されました」
　シンアック王は仕方がない、という表情で頷いた。
「奪還部隊の失敗は、そうなることを意味していた」
「サリアック王子はダイモーンを受け入れられなくなってしまっています。大火の魔法から呵責が王子の心を苦しませ、病ませてしまった。まるで死を望んでいるようです。南コロニアに引き渡されることを拒んではいますが、何の抵抗もするわけじゃなくて、あれじゃまるでもうどうでもいいみたい。口ばかりで、自分はけっきょく……」感情に流れた言葉を切って、仕切り直す。「南コロニアが王子の身柄を得ても、戦争が終わるわけじゃありません。我が北コロニアの理想は、参戦せずにすむことです。私は陛下のお考えをお聞きしたくて、ここへ飛ばされてきたのです。もちろん、これには大統領や父たちは関わっていない、私の独断ですが」
　というよりもダイモーンが勝手にさっさとやってしまったのだけれど。
　ふむ、と国王は腕を組む。
「やんちゃ坊主が、軍に入って戦争が始まると矯正の効き目が出過ぎてしまった」
「戦争は、魔法のせいで起きる悲劇じゃありません。なのにこの戦争は、魔法への無闇な恐れから起きてしまいました」
「さすがチャリティクイーンの華麗なレトリックだね」
「……」

他人事のように感心され、とまどいながら鼻白みかけるセアン。
「いや、いや、私が今それを聞いて『そうなんだよ』と返すのは少しばかり間抜けだからね。けれど称賛は素直な気持ちだよ。理解しようとしてくれて、ありがとう」
「理解は……」
セアンは魔法使いの使う魔法の何たるかを知ることができているわけではなかった。
何故ならサリアック王子は、サギ男として暮らしていた限りセアンたちの前で一度たりと魔法を使ったことなどない。マーデル大尉と呼ばれたとき、あれほど自由自在に鉄と火を操ってみせた力を、ただの水栓パイプの修理と工作に四苦八苦していたあいだは絶対に解放しようとしなかった。“王子となかよし”ダイモーンの、お節介な誘惑に、抵抗しつづけた言葉をセアンは耳にして留どめている。
持っている力を使わないでいるのは、とても難しいことではないだろうか。もしそれが難しくないなら、戦争など起こらないのではないか。魔法であれ、純科学であれ、だ。
「サリアック王子も、非魔法圏の常識を理解しようとしてくれていたからです」
言葉を選び、選び、セアンはシンアック王を見上げてつづけた。
「でも王子は、ダイモーンを心に取り戻すべきです。魔法とともにあることが、彼の真実であるはずだから」
そして肩をすくめる。
「車椅子がないと私はこんなに無様で不安です。それと同じだと思います」
しばらくシンアック王は口を閉じて考えにこもるようだった。
一人の小娘がやってきたところで戦争を終わらせられる方法がそう簡単に生まれるわけでもないのだが。……承知しているからセアンは、すべて話してしまうと身の置き所なくうつむいた。
「ミス・セアン。北コロニアの大統領閣下がこの泥沼に参戦を望ん

でいないことは想像がつくが、それですまないのは世論というものの力があるからだね」
「そうです」
「この戦争は、疑心暗鬼から始まっている。だから君は、腹を割って私と話しにヤーヘルの王宮へ乗り込んできた、そうだね」
「その通りです、陛下」
この戦争を、先に仕掛けたのは南コロニアである。逆であればセアンもこうした行動はしない。友好国民を灰燼にした魔法など滅びてしまえばいいと思っただろう。だが、先にそう思っていい権利を持ったのは彼らなのだ。
非魔法圏から背教者、未知のものと忌まれ、恐怖される魔法圏の魔法使いたちには、開戦にいたる過程においてもっともっと弁明の機会が与えられるべきだった。彼らに背を向け、締め出していたのは非魔法圏なのだ。
「私が北コロニア大統領に、こうした親書を書けばどうだろう。王子の身柄と交換に、中立国北コロニア主導での停戦協議に応じる――魔法連合は魔法圏の独立と生命財産が保証されるならば、いつでも、鉾を収めるつもりがある。と」
「でも、それでは魔法連合に不利です。けっきょく王子が捕まる前の現状と変わらず、世論の高まりで北コロニアが参戦すれば……」
「だからね、チャリティクイーンの出番だよ」
満を持したように言われ、ぐっとセアンは顎と首とを前のめりに落とした。
「私が、何を」
すればいいと？　何ができるというのだ。
「スピーチを」
「まさか。無理です」
「何故だね？」
「だって」
「君は人の善意を引き出すのがうまいから、チャリティクイーンと

して君臨していたのだろうね。平和の伝道師にはもってこいの人物だと見受けるが」
「私の言葉は嘘ばかりです。だから引退したんです。いいえ、そんなこと今は関係ないわ、戦争ですよ？　政治です。小娘が関わっていいことじゃありません。成果をお約束できません。冗談をおっしゃっているのでしょうか」
伯父が大統領邸以外ではそうだからセアンは王の言葉の重さを疑った。
「冗談であっても、人を笑わすことができたらそれは立派な影響力だ。私が愛の女王に任せたいのはそういうことだね」
笑えなかった。
「魔法と口にしただけで、誰も耳を貸してくれないでしょう。子供の戯れ言とされるだけです」
「ミス・セアン。サリアックは君とおそらく五歳も年は離れていないが、戦争に参加している。国の未来に大人も子供もないばかりか、これからを担っていくのは君たち若者なのだから、君たちの言葉は必要なんだよ。無謀で自由な若者だからこそ、君はここへ、敵地へ乗り込んできたのだろうしね。私が頼んでいるのは、君にしかできないことだ」
王の青灰の瞳には人をそらさぬ威厳があった。
海と空に馴染んだ自由人の眼の色を持つ第三王子は、父親似の顔をしていないな、と思う。
それとも彼も年を取ったら、こんなふうに人の心の奥まで落ち着かせて説得してしまう風格を、身につけていたりするのだろうか――。
「親書に取引事項として、君への頼みを加えて記させてもらうよ。成果は含めない。私は希望の種を撒きたいだけだから」
「……わかりました」
そう言われてはしょうがない。
いいや、しょうがないという気持ちではいけないのだ。首振って、

セアンは王の瞳を見つめ頷いた。
　セアンは戦争を止めたいし、サリアック王子を長く生きさせたかった。余命は償いのためにあると彼は言ったのだから、嘘はつかせない。悔恨と呵責に襲われる苦痛の日々であっても、その先の話が途切れて教訓だけで終わるのはフィクションだけでいい。フィクションは教訓を伝えるためにあるけれど、人間の実人生は違う。先があって、先に待ち受ける終わらない日々こそが本当だ。本当の、つぐないだ。
（彼のつぐないを実現させる手伝いが、焼かれた海辺の街の人々への、私にとっての追悼）
「ところで、君をよこしたのがサリアックではないとすると、魔法を使ったのは君かね？」
「いえ、陛下、それが……実はダイモーンはいま、私の飼い犬の中に収まっています」
　そんなことがあっていいのですかという顔をしながら答えると、シンアック王はとくだん驚いた様子もなく、
「君のことを慕っている犬なのだな」
　と感心してみせた。
　怪訝にセアンは首をかしげる。
　すると王は、めったに起こらないがおかしい現象ではないということを説明してくれた。
「精霊と人とは、互いに助け合いの精神で結び付いているのだよ。精霊は大いなる塊から我という意識を持って生まれいでたいという望みを叶え、人のために知識を使う喜びによって意識を成長させていく。人は彼らの知識が起こす力をかりて、生活を便利にしていく。すべては、誰かの役に立ちたいという、知性体の準本能と言っていい思いから成り立っているのだ。君の犬は、君の力になりたいとずっと思っていたのだよ。共感に足る思いでなければ、精霊は力を発揮できない」
　ポイが。

のんきそうに寝ていたり、じゃれたり、砂浜を縦横に走りながらテラスに向かってうるさく吠えたりしているだけの、あの子が……？

難しい顔をしてしまったセアンに、シンアック王が勝手に小さく笑いこぼして。

そして。

「あの日、私の失礼な言葉に答えて君が何と言ったか、おぼえているかな」

感慨を瞳に浮かべてシンアック王がたずねる。

「いえ……」

こまっしゃくれていた幼いあの日、何を言ったのだろうか。瞬間の雰囲気だけ鮮明に記憶するセアンは全然、あとのことを忘れていた。

「君は、要らないと首を振ってね。こう答えた。『精霊に助けてもらっても、私には返せるものがないとおもうから』と」

セアンは思いがけない過去の自分の言葉に、瞠目する。

鬼火と一緒に動いて国王が立ち上がり、聞こえぬ言葉をつぶやいて腕を伸ばした。魔法が、淡く黄色く光り輝き、発動する――。

「君は魔法の本質を見抜いてのけたんだよ。君はきっと、私にあのとき会っていなくても、サリアックを助けただろう」

さようなら、クイーン。私の王妃が寝台に眠っているから、起こさぬうちに会談はひとまず終わりに――。またきっと会えるだろう、その日まで。

気が付くとセアンはくったりしたポイを腕の中に抱いて、さっきまでいた自分のベッドに寝ていて。

明かりの灯が消えてしまっている辺りは暗くて、ほかにどうしようもなかったから、そっと、ポイを起こさないように自分も目をつむって、そのまま眠ってしまった。

朝、目が覚めると、枕元に一通の封書が置かれていた。真紅の蝋封に紋章の捺された、王からの親書。
北コロニア大統領への。
夢ではなくて、これは本当。

今夜は、海運失業者のための救済基金発足の夕べにお集まりいただき、ありがとうございます。この会場の様子は全国放送ラジオでも中継されているとのことで、これに耳を傾けていらっしゃる国民の皆様の互助精神の篤さを尊敬し、感謝いたします。　さて今般の世界情勢において、海を渡る船の中で純粋な貿易船は希少のものとなり、多くの徴用商船が軍事物資の運搬、兵站にまわされています。未だ参戦に及んでいない我が北コロニアも、サメのごとき牙を海中にさまよわす魔法連合潜水艦部隊による通商破壊の危険に脅えながら、植民地と本土とを商船たちは往復しております。これらの船は経済生命線として死活の役割を担う最前線のつわものと言え、いまだ犠牲は出ていないものの、今日か明日かもしれないそれが起これば北コロニアは、迷わず軍靴を踏み鳴らすことにするでしょう。
まだ参戦は現実になっていませんが、来るとき、私たちは今ある日常を捨てることになります。
すでに、絞られた交易は、携わっていた人々の暮らしを変えてしまっています。今年の冬至祭りにこの人たちの家庭の多くが、去年より貧しい食事をします。
彼らのほとんどは、新年が明けても仕事はない見通しです。基金では、彼ら海運失業者に月十ゲールの給付と毎月曜の炊き出し実施

を予定しています。ご賛同の皆さんの善意の寄付金が、彼らのあしたをつなぎます。

我が北コロニアには、苦難を乗り越えて建国された力強い国家である自負があります。国民には根強く相互扶助の精神が息づき、弱者救済網を厚いものとしてきた誇るべき歴史があります。歴史の端緒にはまた、人々の記憶に残る不幸な貧困のできごとがいくつかあったわけです。七つ子の林檎のタルト、というお菓子にまつわる話がニューバーレイの田舎町には伝わっています。――

『昔々、あるところの村に、秋生まれのかわいい七つ子が住んでいました。お母さんはお誕生日に好きな果物でタルトを作ってあげようと約束していたのですが、いざお誕生日がきてみると、七つ子はてんでばらばらなことを言ったので、けっきょく林檎のタルトをつくりました。七つ子は七人とも林檎がきらいでした。真っ赤なまあるいほっぺが林檎に似ていたからです。ぶーぶー文句を言いました。でも大丈夫、お母さんは七つ子のほっぺをちぎってタルトにしたのでしたから』

この風刺的な童話は、口減らしの悲劇を記憶するため残された物語です。滑稽なあらすじは私たちに、なんとない不気味さを感じさせます。誇張とユーモアに隠されたところに本当の悲劇は存在し、むしろ隠されることで私たちは想像力と共感を掻き立てられ、印象ぶかいものとしてこれを受け取ることになるのでしょう。

変わって、私が今からお話する出来事は、誇張とユーモアをなるべく排除して語られるべき、小さなできごとです。カッコでくくるような間も、頁をめくる動作も必要としません。これは日が昇り沈んでいく日常の地続きに私が体験したことです。

月の始めに、私は住んでいる浜辺で一人の人間を拾いました。彼は砂の上に倒れていて、熱を出していました。記憶を失っていて、運びいれた家の中で目が覚めても、自分の名前も、身元も、言えま

せんでした。けれども私は彼が身につけていた服から、どこの誰であるかを知っていました。彼は魔法圏から来た、魔法連合ヤーヘル軍の潜水艦部隊所属艦艦長、つい昨日南コロニアの軍港と港街一つを火炎地獄に焼いてきた、魔法使いでした。後で知ったことによると、彼の名はサリアック・マーデルといい、ヤーヘル王国の第三王子が生まれついての身分でした。非魔法圏の私たちは、かつてレミアック王を筆頭にこぞって精霊との契約を交わした王族というものに、その旧態政治という意味も含めてよいイメージをもっていませんが、サリアック王子は高貴ぶっているかいないかの点において、あまり王子らしくは見えませんでした。彼はむしろデッキ掃除になれた海軍の青年でした。

結果的に言えば、私は彼を一週間も家に置いていました。通報して騒ぎに巻き込まれることがいやだったし、働き手として使いでがあったからです。実は、記憶がないというのは彼が私の家に面倒を持ち込まないためにしたフリだったのですが、正体に気付かないフリしていた私の態度も彼にとっては好都合だったでしょう。彼は一週間のあいだ一毫の魔法の気配も見せようとはしませんでしたが、迎えに現れた母国の潜水艦乗員たちの前で、帰還を拒否したとき初めて、閉じ込められようとした檻を魔法の力で破壊しました。彼は一緒に閉じ込められた私を巻き込むまいとしてくれた一方、魔法の暴走によって私の家の家政婦の腕を怪我させてしまいました。

魔法の暴走は、彼自身の、魔法の力への疑問、嫌悪、後悔、自責、自失があいまって起こったことです。彼は毎晩、おそらく自分が焼き払った街の夢を見て、うなされては叫んでいた。

それでとうとう彼は、精霊をその身から落としてしまいました。

まもなく彼は北コロニア政府に収監されました。今も地下深く、牢の中につながれています。精霊が中にいない今、魔法を使えません。使える状態ならば檻を壊して逃げるのだろうと思う人もあるかも知れませんが、精霊を落っことした彼の心は魔法を拒んでいるのだから、つまり彼は魔法を使うつもりがないということになります。

そもそも、捕まってから危険をおかして逃げるくらいなら、おとなしく潜水艦に乗って帰ればよかった。
彼は南コロニアには引き渡されたくないから、北コロニアで処刑してくれと言っているそうです。
私が知っている事実はだいたいこれだけです。もりあがりもひねりもなく、あったことだけをお話しました。海辺の家に静かに暮らしていた私の日常に起きたことでした。
十四つのほっぺが焼き上がって終わり、というような滑稽で悲劇的なオチも、まだついていません。七つ子の林檎のタルトのお話は皆さんに、貧しさへの心配り、相互援助の大切さを喚起させ、基金の財政の役に立つかも知れませんが、収監された魔法使いに関する私のぽつぽつとした経験と知識は、憎しみを煽るにさえ物足りないとお感じではないでしょうか。
事実には、案外力がないものです。南コロニアのペンセルで何千人が亡くなったと報道された朝よりも、その午後流れた南コロニア大統領の演説のほうが、我々の怒りと復讐心をかきたてました。
私がお話ししたサリアック王子について、彼の実物を見たことのない皆さんは不安と怒りの対象であることを前提にその人物像を描くと思います。しかし私の見た限り魔法使いとは、罪ばかりでできているものではないようでした。彼は勤勉でしたし、神に祈りを欠かしませんでしたし、こうも言いました、「人と人は、助け合って生きてくものだよ」と。この会場に彼がいたら、彼の自由にできる三十ゲールを寄付してくれたでしょうね。
そういえば、私が彼の命を助けて拾ったことを、逆に怒られたこともあります。投げ出されて海で死んでしまえればよかったのにというふうに、罪におびえる彼は思っていました。悔恨が彼の日常になっていました。
あした北コロニアにも戦争がはじまれば、私たちの兄弟も魔法圏の人々を殺しにいきます。善良な私たちの兄弟も、それが私たちの正義を守るための戦いであるとはいえ、あたたかい血の流れる身体

を持った同じ人間を、幾人も、幾人も殺して生き残らねばならない場所に身を置いて過ごせば、まもなく彼のように悪夢に苦しむ人になるでしょう。

失われていくのは、戦意高揚のためのフィクションによって動員される私たちの日常です。私たちがたった今、当たり前だと思って生きている日常。

貧しい人々のために財布からお金を出すのは尊い行為ですが、戦争は家庭から人の命をわしづかみにして持っていってしまいます。一度始まれば自動運動のようで、なかなか止めることも難しい。

すでに戦争によって失われた、そして最前線にて危険にさらされている日常のことを、初めにお話しました。今年の冬至祭を、尊い日常のために、祈ってください。できるならば、あなたの善意を基金の募金箱に、闇に覆われようとしている世界に、そっと鳴らしてください。小さな音でいいのです。かそけく小さなため息のような音が、少しずつ世界を変えていくと――、きっと大きく変えるよりも、小さく抗ったほうが私たちのためにいいのだと、私は信じ、願っています。ご静聴ありがとうございました。

エピローグ

エピローグ

「ポイ、ポイ、どこにいるの？　あら、さっきまでここにいたのに……」
「だいぶ前、廊下のほうへ出ていった気がするけどな。それよりミス・セアン――」
「ねえトニー、それ、嫌みなの？　なれなれしく呼び捨てにすると思えばミスを付けたり定まらないのは」
「ミセスになったら呼べなくなるから、今のうちにと思ってるんだよ」
「結婚の予定なんてないわよ。ミセス・シンクルーになる予定はもっとないけれど」
「つれないなあ」
　食卓に肘をもたれながら紅茶のカップを傾ける、トニー・シンクルーは洒落た流行のかたちのカラーにも抜群に糊のきいた都会的ないでたち。州都の銀行勤務に栄転してからはさすがに週二が月二になったけれど、気取り屋トニーの本質は変わらない。
　十年たっても、つれないなあ。
　窓の外はるかな水平線を眺めながら、キザにつぶやいた。
「あなたがしつこいのでしょ」
「ここで飲むお茶ほどうまいものはほかにないんだから、仕方がないよ、ミス・セアン」
「メアリに言ってやってちょうだい。あの子、マクビーじいさんに、スーの入れるお茶に比べたら泥水だ、なんて言われてびーびー泣いてたんだから」
「老いてもしぶとくむっすり毒舌なんだからなあ」

じいさんがさらに十年ぶんじいさんになって、まだまだマクビーじいさんはかくしゃくとした足腰を保っている。むろん相応に衰えもしているから、半命令のような主人のお願いにしたがって夕食はセアンの家のほうで取るようになったし、面と向かう機会が増えたからなのか、無口と思っていたマクビーじいさんはなかなか毒舌家で、セアンもたまにぼやきのような文句を食らうことがある。「サギ男という名前は酷い。ほんとに酷い」と、特にこのことを繰り返し、思い出しては言うのだった。「人を人とも思ってない名前だ」老人の繰り言はセアンの反省や弁解やらを求めるわけではなく、ただぼそぼそと、唇を動かして言いたいためだけに言うのだ。

もうずいぶん昔のことのような気がするのに。

あっと言う間に十年たっていた気もするのだけれど、セアンの周りの状況は転々と変わっていったから、それらの出来事に思い出は塗り重ねられて、あの秋の一週間のことなんて、もう遠すぎた。

サギ男なんて人間は本当はどこにもいなかったし、そう仮に名付けられていた人間も、あれっきり、二度と会わないままセアンの範疇から姿を消して、それっきり。

幻とまでは言わないが、だから遠い。セアンには関係ないことになって久しい。

一年くらいは、そのことはセアンに色濃く付きまとって、生活まで変えさせてしまった。セアンの海辺の家での静かな日常は首都行きを境に失われてしまったように思われた。

セアンの演説は思っていたより多くの人たちの心に届いた。良い届きかたもあれば、悪い届き方も。誤解されたり、誤解じゃなくても、どうしてもセアンの考え方を受け入れられないという人たちは大勢いた。もちろん、予想していたことではあった。

非魔法圏と魔法圏との対立は昨日今日の簡単さではないから、仕方がない。

サリアック王子を匿っていたと公表したことでセアンはメディアから取材攻勢を受けたし、セアンのしたこと、話すことに腹を煮え

繰り返らせたのだろう人たちからの嫌がらせもかなりあった。蜜の丘の実家からしばらく出られなくなって、そのとき、海辺の家にはもう戻れないのだと思った。

ラジオに演説が流れた次の日、シンアック国王によって、中立国主導停戦協議の席にヤーヘルがつくという表明がなされたのは、約束が果たされたことを了解してのリアクションだったのだろう。おそらく、のちの情勢を変えたのは表明のタイミングだ。このニュースを境にして、北コロニアの世論は、微妙な沈静化を見せはじめたのだった。

表明に呼応してフランド大統領は、中立国法にのっとったサリアック王子の身柄の返還を決断し、それはすみやかに実行された。南コロニアに対しては参戦の意志の希薄さを突き付ける行為であり、援軍が見込めないとなれば、南コロニアも強気な戦争継続はできなくなるのだった。――すべては一通の親書を元にした信頼の構築がなしたこと。

セアンのスピーチにわずかでも影響力があったなどとは、本人は考えていない。伯父はピースクイーンの誕生などと言ってからかったが、なんだか間抜けな響きのする称号で、道化じみていて、でもチャリティークイーンよりは重くないから、笑い話にしておけばいいかなと思った。

まもなく停戦協議が始まると皆の興味と話題はそちらに移って、セアンの周りは波の引くように静かになった。半年が過ぎ、綱渡りな停戦協議のすえ南コロニアもやっと講和に応じる気になったころ、セアンは首都の大学へ聴講生として通いはじめた。そこではセアンは、車椅子の娘というのではなく、魔法使いを拾った例の演説のひと、という目で見られた。奇異の目もあれば、リベラルな学生からは身内意識を持たれたり、反魔法思想の学生グループはあからさまに敵視して攻撃してきたり、面倒は面倒だったとはいえ、言葉でなんとかなることならば、セアンには切り抜けられる口があった。

大学へ行ってみて知ったのは、史学の教授が私的におこなってい

る魔法史研究の存在だった。魔法関係がタブーであるため書籍化はされないが、研究者自体は少なからずいるという話だった。

興味深かったのは、教授が教えてくれた話、ヤーヘルなどの魔法国では成人年齢を境に大人と子供の区別がはっきりしていて、それは対話により築かれる精霊との関係が人間側の言語能力の研鑽をもって成熟し、能力も安定する時期の、平均的な目安として十六歳と定められているというのだった。大海の向こうでは、精霊と仲良くなれて初めて一人前と認められるのだ。

ところで、ここコロニアでも、スピーチの上手い子供はひとつの興になるが、スピーチが上手い大人は珍しくもないということらしい。再デビューを寄付金の額としてはそこそこの成績で飾ったセアンには、しかし以前ほどの引っ張りだこな声掛かりは舞い込まなかった。だったらかまわないと、自分のペースを尊重しつつ呼ばれる催しにはなるべく出ていって、弁舌をふるうたび、どこか気恥ずかしい感じがするのだったが、その感じは目の前の人たち、あるいは社交界の見知った人々に対して覚える出戻りの気後れというのではなく、遥か遠くの誰かに対してのものだった気がする。

そういうわけで、首都の暮らしも今ではそう悪くなかったが、やはり潮風と潮騒と、こじんまりした生活が懐かしく恋しくもあり、三年後にセアンは海辺の家へ戻ってきて、前と同じように暮らしはじめた。

スーは首都の屋敷にいるあいだ、厨房で働く幼なじみと急に仲良くなって結婚した。セアンが海辺の家へ帰るのにともなって、新婚夫婦は直近の町でパン屋をひらいた。海辺の崖の上の家では、町でつのった若い娘が、何度か人を変えながら働いている。なにも主人の偏屈に耐えられないというのではなくて、あまり長く置いて婚期を逃させたら可哀想だというのと、町の娘たちには案外仕事がなくて、名家の娘の世話という職はいい結婚をするために箔がつくしということで、応募はけっこうあるのである。

スー以外の他人から世話されるのを嫌がっていたセアンの、十年

内の変化のひとつだ。
「12って言いかけたんだよ、12はヤーヘルの最小紙幣で、コロニアでは間違えて出てきようがないんだからねえ。僕の勘が、奴の正体を見抜いたのさ」
ふっと物思いから覚めて隣を見ると、得意そうなトニーの目付き。
「何度目なの、その話？　それにあなたは、潜水艦を覗き見して泡を食ったんだって言ってたじゃない」
トニーは肩をすくめて、
「だって今も、考えてただろう？　あのねセアン、使う貨幣が違う人間とは、仲良くしたくてもうまくいきっこないよ。数の数え方が違うってのは、考え方もズレてくるってこと」
絶対の自信を込めて言ってのける。
「べつに何も考えてないわ」
「じゃあ、僕のことでも考えてくれないかな」
「ええ、いいわよ。そろそろ結婚したら、独身貴族さん？　どんな人がお似合いか考えてあげるから」
「それならはっきり決まってるんだよ。僕のことを苛めてくれる金髪さん」
「首都にたくさん居そうよ」
すっかり求婚はお茶うけ話にしかならなくなっている。海辺の崖の家に深くかかわると、皆なかなか結婚できなくなるのはどうしてだろう？　トニーが気心の知れた茶飲みともだちになって、だらだらと何年もその関係がつづくなんて十年前のセアンは想像もしていなかったし、トニーだってそのはずだ。だけど現実にトニーは戻ってきたセアンとふたたび前と同じ交流を望んで、過去にセアンがとったひどい態度のことだって根に持っていなかったし、指輪を返したときも、「今の給料ならもっと良いのが買える」と求婚のやる気を見せて、前以てセアンが断ると「でもいいよ。会いたいから会いにくるよ」などとあくまでキザに言ってのけた。
そろそろいいかげんセアンだって信じざるを得なくなったのは、

トニーが本当に正直な気持ちから、ちょっと度が過ぎるくらいセアンのことを好ましく思っているのだ、ということ。結婚したいとか、好き、という言葉だと経験がないセアンにはよくわからないのだが、「会いたいから」という気持ちなら、少し想像できる感じがする。
「首都は寒さが長いというから嫌だねえ」
そう嘯いて、トニーは日差しの注ぐテラスにセアンを誘った。「今日の風はそろそろ初夏の匂いがしているんだよ。出てみてごらん」

「よかった。明日から子供たちがくるから」
海辺の家は五月から八月、貧困家庭の子供たちを集めて過ごさせる活動に使われている。
セアンがはじめたこの活動には、国籍を問わず、対魔法戦争に起因する南コロニアの母子家庭の子や、肌色の違う南方大陸内の紛争難民の子供たちも連れてこられる。不自由な身体の子も選別なく受け入れていた。
「今年も僕は、人生の役に立つ数の数え方を教えてやらなきゃ」
「恩に着るわ、トニー。あなたって、本当にいい人ね」
車椅子をテラスへ押し出すトニーが、セアンの仰ぎ見る頭上で自嘲気味に呟いた。
「永遠にね。わかってるよ……」
玄関のブザーが鳴った。
「メアリは気を利かせて果樹園だったね、僕が出てくる」
「あなたが袖の下を渡してるのはお見通しよ」
背中ごしひらひらと手を振りながらトニーは廊下へ出ていった。テラスとの境でセアンは降り注ぐ初夏の太陽をまぶしがりながら、カーディガンを脱ごうとした。
――君は……
玄関のほうから、小さくトニーの応対が聞こえてくる。
客の声は低いから男性だ。日曜に、巡回の警官はこないけれど――。

今日は何をしに？　といったことをトニーが聞き、忘れ物を取りに来たようなことを相手は答えたみたいだった。聞き取りにくい距離から断片ずつ聞き取れるそれ。わずかな間のあと、急にトニーの声が大きくなる。

――ああ、思い出した！　君は三十ゲール預けてくれたままいなくなった、元運送員だね

はっと瞼をひらき、セアンは廊下を振り返った。

――その節はお手数をおかけして

――いや、仕事だからね。え、利子？　利子なんて端数しかついてないよ、三十ゲールぽっちじゃねえ……声が遠ざかり、玄関ドアが閉じられて彼らの気配が消えた。セアンは車椅子をこいで居間をわたる。やっと廊下へ頭をつきだして玄関をうかがったときには、いま中へ戻ったトニーが、閉めたドアの把手に手をかけたままやや俯いて立っているだけだった。

「トニー」

トニーは背中ごしにひらひらと、しかしさっきよりのろのろと手を振った。

「トニー」

……なんだ、と思った。

（帰ったのね）

「また来るけどね。再来週には」

（……どういうこと？）

ポイの老いた鳴き声が海のほうから聞こえた。

廊下に静かにいたはずのポイが、なぜ外へ出て年甲斐なくはしゃいでいるのだろう？

――無意識に腕に力がこもってセアンは車椅子を海の向きへ返した。背に玄関の閉じる音が響く。ためらいながら車椅子を進めて、テラスへと出た。

直射の日差しに目がくらんで、慣れるまで数瞬、時間がかかる。

どこにも姿の見えないポイの声を懸命に追いかける。前に車輪が

進むほど広がっていく視界には、いない。砂浜に点々とあたらしい足跡がここへ向かって刻まれていた。たどり着いた欄干から見下ろした真下に、老犬を抱き上げた青年が立っていた。
「あなた、誘拐犯？」
「幾ら出します？　聞いた話じゃ結構な忠犬らしいけど」
「悪食がたまに傷だけれど」
サリアックは顔を向き合わせていたポイを正面に返して抱え、犬の目線と我のを揃えるよう顎を支えた。セアンを仰いで。
「おひさしぶりです。だいもーんです」
「それ、腹話術じゃない……」
「バレたか」
おもちゃにされて唸りだしたポイを砂の上へ降ろし、あらためてセアンを見上げる表情もしれっと悪びれないのは、昔と変わらない。
「そう言ってるのは本当。感謝を伝えてほしいって。伝えるだけじゃない、つまり二人分言いたいんだけど、感謝が二倍になるような言い回しってあるかどうか、先に生き字引の君に訊いたほうがいいかな」
「オールドミスの先生に教わってから来ればいいじゃない」
「そんな気の利いた言葉を知ってたらあの人はオールドミスになってないよ」
そこで、どうしてこういう応酬になるかなというようにサリアックは苦笑した。仕切り直して、首を傾ける。
「驚いたりしてないね」
「そうね。生き字引だから」
サリアック・マーデル元大尉が、ヤーヘルの友好使節団とともに北コロニアに来ていることは新聞で読んで知っていた。一昨日は、南コロニアペンセル市への慰霊献花の予定が組まれていたが、やはり根強い反対運動に阻まれるかたちで入国すらならなかったことも。
「知らないことだってたくさんあるけれど。今は何してるの？　英雄？」

「もっと意外だと思うけど。教官。沿岸警備候補生に潜水訓練をしてる」
「海の気難しさを教えてるってわけね」
「教えられる限りはね」
ふと視線を落として、うん、とサリアックは穏やかに深く頷いた。いろいろな意味がこもっていたが、葛藤をつづけながらも道を見いだしている彼の今が感じられる頷きだった。
「忘れ物って、お礼？　それとも、つなぎ？　それとも、巻き上げた三十ゲール？」
片頬に微笑をのせて、ちょっと考えるように海を見返った。そしてまたセアンを見上げたときには、開き直ったような、それでいて痛む傷もあるような、複雑な顔で笑っていた。
「いろいろあるけど、どれでもないかもな。そう今思った、君の顔を見たら」
「ふうん」
セアンは急にしかめ面をしたくなって、その通りにした。だから何？、という意味の不機嫌面で明後日を向く。
「感謝の言葉はお手上げだったけど、君に会ってすることはちゃんと、ずっと考えてたんだ」
上がっても？　と仕草で尋ねられて、しぶしぶ許した。一国の王子を軒下に突っ立たせたままは、スタェットの品格にもとる遇し方だろうから。
あっというまに目線が逆転している。
「スーザンさんは？」
家の中をきょろきょろと窺って、なつかしい顔を探していた。
「スーは結婚して所帯を持ったわよ」
「それはめでたいです。良かった。セアンお嬢様はトニーさんという？」
なぜだか少し構えるように訊く。
「魔法かなにかで予知しない限り、まだ私も知らないわね」

沈黙を、勝手に解釈したセアンは急いで言い足す。
「べつに、あなたに言われて仲良くしてるんじゃないわよ。向こうが勝手に通い詰めてくるんだから」
かえって図に乗るようにサリアックが頭をもたげる。
「ほらね、良い奴だって言ったろ？」
「……そうね、あなたよりはね」
十年も何の音沙汰もなく、十年立って前触れもなく現れた男に、自分の時間を譲ってやるようなお人よしだ、彼は。
「そりゃあね」
それに比べて、セアンの生活も、余生の方針も、めちゃくちゃに変えてしまった、デリカシーのないお節介な魔法の国の王子ときたら――。
なんとなく不機嫌をつづけているセアンをサリアックは飄々とのぞき込んだ。
「成人された婦人には、ちゃんと許可を取りますよ」
と、言う。一応、言いはしたが。「用意はいい？」
「ちょっ、ちょっと、何をするのよ、いや……！」
慌てふためくセアンを掬い上げ、いつかのように問答無用で軽々と歩きだした。
だけどその横顔は、あのときみたいに怖くない。楽しそうに笑っていた。
「あの水栓、一カ月もったかい？」
テラスを降りたところで、丈夫そうなシャワー栓が立っているのを指して、ばつが悪そうにするので、
「水圧式の水道がきたから」
セアンは海辺の家ではじめた活動のことを話した。
浜遊びの基地として機能するようになった家のことを。
「あれから数え切れないくらい浜に降りたんだから」
まつわるポイと一緒に砂浜をあるいて、一直線に海を目指す。
「水の中にはまだ入ってないだろ。震えてるもの」

目を合わせて、弱みを見抜くように言ってくれる。
「待ってよ、待って。心の準備が……」
しがみついたセアンのつよい抵抗に、目を細めながら笑い漏らして、そして頷いた。
「わかるよ。もう少し待ってみよう」
こういうことは、長くかかるから。そう呟いて、眼の奥で頷いた。それが、彼の感謝だった。たぶん。
十年前、サリアック王子の身柄が北コロニアからヤーヘルへ返還されて、三カ月くらいが過ぎたころ、セアンはポイが喋らなくなったことに気づいた。ポイは普通の犬に戻っていた。ああ、ダイモーンはいるべきところへ帰ったのだな、と、思った。
恐怖の克服は、簡単なことではない。だけど意志を捨てずに向き合っていれば、なんとかなってしまう日がきっとくる。罪を背負った彼には克服すらが、罪悪感を増させる枷のようなものなのだろうけれど。
それでも逃げずに立ち向かえたこと、本当の意味で罪と向き合う日々を選択できたこと。
命の恩人のセアンがいなかったら、全部がなかったかもしれないと、サリアックの碧の瞳が語った。
彼のその瞳ならば深く見抜くだろう、セアンの中にも、あの言葉をくれたサリアックに対して同じ気持ちがあること。人と人は、助け合って生きていくものだ。人とダイモーン、人と犬のように――。
「いつかでいい。ヤーヘルの海にも子供たちを連れてきてくれ。魔法があってもなくても、海は関係なく、きれいだから」
目の前の碧い海の色に、セアンは自分の微笑みを映す。もうちょっと意地悪く見えたほうがいいのに、と感じながら。
「ええ。……基金のお金の集まり次第でね。まだまだ軌道に乗るには程遠いから、十年くらいは無理だけど」
約束さえあれば、きっといつかまた会える。
「待ってるよ」

ぐる、ぐる、ぐる、と空が巡る。雲一つなくて、目に見えない緊張だって過去のものにした空。ヤーヘルにつながる北コロニアの空。世界中がこうとはいかないけれど。まだそれは夢物語だけれど。約束して、あるいていけば。そう、気難しい海とだって、万物の精霊とだって、会話して仲良くなろうなんて考えて本当にしてしまった人はいるのだから。

行こうと思って行けない場所なんて、どこにもないのだ。

〈了〉

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1400q/

『海と戦争と魔法使い』

2011年1月21日15時40分発行